

山 垣 遺 跡

——「里長」関連遺構の調査——

発掘調査報告書

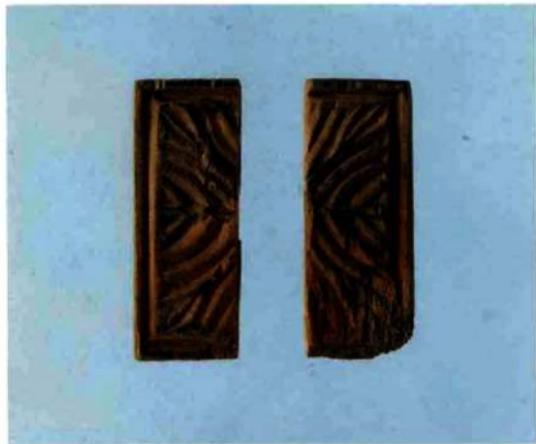
近畿自動車道舞鶴線関係
埋蔵文化財調査報告書(XIII)

1990年

兵庫県教育委員会



濠内出土木簡



上段：「春マ里長」墨書き土器 下段：飾板状木器

例　　言

- 1 本報告書は、氷上郡春日町棚原字山垣・溝尻にかけて所在する「山垣道路」の発掘調査報告書である。
- 2 「山垣道路」は、近畿自動車道舞鶴線の建設に伴って発見された道路であり、日本道路公団の委託を受け、昭和58年4月から同年9月にかけて兵庫県教育委員会が発掘調査を実施した。
- 3 昭和58年の全面調査は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課加古千恵子・平田博幸が担当し、前年度の確認調査は加古と岸本一宏が行った。
- 4 遺物の検査・復元、作図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町）において、加古・平田・岸本を中心として広戸紀子、早川亜紀子、密谷美音、前田陽子、平井美鈴、森本貴子等で行った。
- 5 調査現場での造構写真・遺物出土状況等の写真是調査員が行い、遺物整理後の写真撮影の一部は調査員が行った。
- 6 木簡の転文とその内容については、佐藤宗淳・鬼頭清明・佐藤一信の三氏による「山垣道路概報」及び「木簡研究」第6号掲載の文章を参考にさせて頂いた。
- 7 木簡の保存処理は、奈良国立文化財研究所の方々の御協力と御指導を頂いて行った。
- 8 保存処理前の木簡の写真撮影は、奈良国立文化財研究所の細幹雄氏にお願いした。
- 9 出土木製品の樹種同定は京都大学名誉教授島地謙・京都大学木材研究所林昭三両氏に委託し、原稿を贈った。
- 10 出土木製品の一部は、財團法人・元興寺文化財研究所において保存処理を行った。
- 11 本書の執筆・編集は加古・平田・岸本が行った。

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要

1. 調査に至る経過	1
2. 調査の体制	2
3. 遺跡の取り扱い	3
4. 調査日誌	4

第Ⅱ章 遺跡の調査

1. 遺跡の歴史的環境	5
2. 遺跡の概要	8
3. 確認調査	11

第Ⅲ章 遺構

1. 漆	13
2. 溝	14
3. 捜立柱建物址	14
4. 標列	14

第Ⅳ章 遺物

1. 木簡	15
2. 墨書き器	18
3. 円面硯	20
4. 土器	20
土器に関する小結	31
5. 木器	33
木器に関する小結	39

6. 金属器	40
7. 石器	40

第V章 野村B・C地点遺跡

1. 遺跡の概要	41
2. B地点出土の土器	43
3. C地点出土の土器	44

第VI章 まとめにかえて

1. 遺構に関して	46
2. 土器に関して	50
3. 山垣遺跡出土木製品の樹種	57
結語	65

挿図目次

第1図 春日町位置図	5
第2図 周辺道路分布図	6
第3図 遺跡周辺の概地形	8
第4図 調査区内旧地形図	9
第5図 調査区内等高線図	10
第6図 確認グリッド配置図	12
第7図 全面調査区位置図	12
第8図 SD-1断面図	13
第9図 SD-5断面図	14
第10図 木簡出土地点位置図	15
第11図 漆内出土傾向図	30
第12図 器種別須恵器対土師器占有比率図	32
第13図 馬歛出土状況図	35
第14図 木製容器類指數図	39
第15図 野村B・C地点遺跡位置図	41
第16図 野村B地点遺跡構造図	42
第17図 野村B地点溝内土器出土状況図	43
第18図 字山垣地域周辺丈量図	46
第19図 調査区内坪割り想定図	47
第20図 遺構復元試案	48
第21図 須恵器径高指數図	51
第22図 上師器径高指數図(1)	52
第23図 土師器径高指數図(2)	53
第24図 時期別器種構成図	54
第25図 土器用途別占有図	55
第26図 樹種同定顕微鏡写真(1)	63
第27図 樹種同定顕微鏡写真(2)	64

表 目 次

表 1	周辺遺跡地名表	7
表 2	山垣遺跡木製品の樹種	60
表 3	樹種別製品一覧表	62
表 4	製品別樹種一覧表	62
表 5	須恵器墨書き土器一覧	67
表 6	土師器墨書き土器一覧	68
表 7	須恵器(杯A)一覧	68
表 8	須恵器(杯蓋)一覧	71
表 9	須恵器(杯B)一覧	72
表 10	須恵器(その他)一覧	74
表 11	土師器(杯A)一覧	76
表 12	土師器(杯C)一覧	77
表 13	土師器(杯B・皿・鉢)一覧	77
表 14	土師器(甕)一覧	78
表 15	土師器(その他)一覧	79
表 16	S D - 4・5 出土土器一覧	80
表 17	濠内出土古墳時代土器一覧	80
表 18	木器(容器)一覧	81
表 19	木器(農工具)一覧	82
表 20	木器(その他)一覧	83
表 21	土師器(弥生時代~古墳時代)一覧	85

カ ラ 一 図 版 目 次

卷頭カラー (1)	濠内出土木簡
卷頭カラー (2)	上段：「春マ里長」墨書き土器 下段：飾板状木器

図版目次

- 図版1 調査区周辺旧地形図
図版2 調査区周辺航空写真(上段:南より 下段:東より)
図版3 山垣遺跡遺構全景(写真はラジコン・ヘリコプターによる)
図版4 漆内遺物出土状況(1)
図版5 漆内遺物出土状況(2)
図版6 漆内遺物出土状況(3)
図版7 漆内遺物出土状況(4)
図版8 漆内遺物出土状況(5)
図版9 漆内遺物出土状況(6)
図版10 漆内遺物出土状況(7)
図版11 調査区全景・漆各部分
図版12 堀立柱建物址
図版13 野村B地点遺跡(上段:溝・北より 下段:溝内土器出土状況・南より)
図版14 野村C地点遺跡(上段: Aトレンチ全景(南より) 中段:自然流路内遺物出土状況(南より) 下段:同上拡大)
図版15 木簡(1)
図版16 木簡(2)
図版17 木簡(3)
図版18 木簡(4)
図版19 木簡(5)
図版20 木簡(6)
図版21 木簡(7)
図版22 黒書土器 1(須恵器第1期型式)
図版23 黒書土器 2(須恵器第2期型式)
図版24 黒書土器 3(須恵器第3期型式)
図版25 黒書土器 4(土師器全期型式・須恵器型式不明)
図版26 須恵器 1(第1期型式杯A)
図版27 須恵器 2(第2期型式杯A)
図版28 須恵器 3(第3期型式杯A)
図版29 須恵器 4(第1期型式杯B)
図版30 須恵器 5(第2期型式杯B)
図版31 須恵器 6(第3期型式杯B)
図版32 須恵器 7(長頸壺等)
図版33 須恵器 8(高杯・壺類等)

- 図版34 須恵器9(円面鏡・鉢・瓶類)
- 図版35 須恵器10(第1期型式變)
- 図版36 須恵器11(第2期型式變)
- 図版37 須恵器12(第3期型式變)
- 図版38 土師器1(杯A・杯B・皿)
- 図版39 土師器2(杯C・鉢・碗)
- 図版40 土師器3(深鉢・鍋)
- 図版41 土師器4(第1期・第2期型式變)
- 図版42 土師器5(第2期・第3期型式變)
- 図版43 土師器6(鉢・鍋・甕)
- 図版44 土師器7(高杯・羽口等)
- 図版45 SD-4・5出土土器・漆内出土古墳時代土器
- 図版46 上段:飾金具状金属器、下段:飾板状木器
- 図版47 木器1(曲物蓋)
- 図版48 木器2(曲物身)
- 図版49 木器3(御敷・槽・鉢・漏斗状等)
- 図版50 木器4(御物盤)
- 図版51 木器5(馬歛・歛・えぶり)
- 図版52 木器6(横件)
- 図版53 木器7(綱杵・箒・柄等)
- 図版54 木器8(木鍾)
- 図版55 木器9(柄・琴・祭祀關係・下駄等)
- 図版56 木器10(柄状・刺突具・木印・火錐臼・織機等)
- 図版57 木器11(用途不明木器)
- 図版58 石器(砥石・扁平石斧・環状石斧・投斧・紡錘車)
- 図版59 野村B・C地点出土土器

第1章 調査の概要

1. 調査に至る経過

日本道路公団によって計画された近畿自動車道舞鶴線は、高速自動車専用道路によって阪神間と日本海側とを直結するものである。同自動車道は兵庫県南東部にある中国縦貫自動車道の吉川インターを起点とし、そこから北上して北摂津・三田市及び兵庫丹波の丹南町・西紀町を南北に貫いた後、多紀連山をトンネルで貫通しながら加古川水系の春日町・市島町へと移る。その後は、北流する由良川水系を辿りながら京都丹波の福知山市にてからは、丹後地域の綾部市を経由して日本海中部の拠点的港を有する舞鶴市へと至る。「山垣遺跡」は同自動車道の建設に伴って発掘調査を行った道路である。

この自動車道路の建設が予定されていた水上郡春日町棚原・七日市地区は、町内で最も広い平野部にあたるため既に幾つかの遺跡が周知されていたが、歴史的・経済的観点から見ても未知の遺跡が数多く埋蔵されている可能性が非常に高い地域であるため、道路予定地域内の分布調査がます不可欠となった。分布調査の結果、「山垣遺跡」の所在する字山垣・溝尻地区は古くから知られる「野村石刻出土地」に近接すると共に、遺物の散布地である事が判明したため、遺跡の有無とその性格を確認する調査が必要となった。こうした状況にもとづいて、日本道路公団と協議を行い、同公団より発掘調査の依頼を受けて昭和57年12月に兵庫県教育委員会がまず確認調査を実施した。

確認調査の結果、春日中学校から野上野の集落を結ぶ東西基幹農道を挟んで北と南に各一箇所の遺跡の存在を確認したが特にその北側の地区（A地点＝山垣遺跡）は旧河道（と確認調査時は考えていた）より多量の土器が出土し、その一部に墨書き土器様のものが見られる事から、再度日本道路公団とその取り扱いについて協議を行った。同地区の工事は土盛り工法によるものであり、地下構造の破壊には直接ならないものの、道路が半永久的な構造物であり、道路が完成してしまうと遺跡を再度公開することがほとんど不可能な状態になる事は遺跡の消滅に限りなく近いものであるという見地から、日本道路公団より調査の依頼を受け、この二箇所について翌昭和58年4月より記録保存を前提としての全面調査を実施した。

全面調査に入った段階では、「野村散布地」内の遺跡ということで北側を「野村A地点遺跡」、南側の西地区を「野村B地点遺跡」、同東地区を「野村C地点遺跡」と呼称していたが、所在地が「野村」ではなく「棚原」である事、さらに「野村石刻出土地」と混同される可能性も考えられる以上に、「野村A地点遺跡」の歴史的・学問的資料としての重要性を考えて、その名称を字名を取って「山垣遺跡」と変更した。

2. 調査の体制

現地での確認調査・全面調査、その後の兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所での出土品の整理に関する兵庫県教育委員会の調査・整理および事務体制は次のとおりである。

確認調査（昭和57年度）

* 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

課長：藤本繁／参事：吉村芳朗／副課長：道畠寅

課長補佐：池田義雄／課長補佐：堀洋／課長補佐兼管理係長：福永慶造

埋蔵文化財係長：大村敬通／主任：西口和彦・小川良太／技術職員：水口富夫

調査員：加古千恵子・岸本一宏

全面調査（昭和58年度）

* 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

課長：西沢貞之／参事：大西章夫／副課長：森崎理一

課長補佐：池田義雄／課長補佐兼管理係長：福永慶造

埋蔵文化財係長：樋本誠一／技術職員：大平茂／調査員：加古千恵子・平田博幸

整理作業（昭和60年度）

* 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

課長：北村幸久／参事：森崎理一／副課長：黒田賢一朗

課長補佐：和田富男／管理係長：小西清

埋蔵文化財係長：樋本誠一／技術職員：森内秀造・加古千恵子・渡辺昇

整理担当：加古千恵子・岸本一宏・平田博幸

整理作業（昭和61年度）

* 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

課長：北村幸久／参事：森崎理一／副課長：黒田賢一朗

課長補佐：福田圭宏／課長補佐兼管理係長：小西清

課長補佐兼埋蔵文化財係長：大村敬通／技術職員：渡辺昇

整理担当：加古千恵子・岸本一宏・平田博幸

整理作業（昭和62年度）

* 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

課長：北村幸久／参事：森崎理一／副課長：黒田賢一朗

課長補佐：福田圭宏／課長補佐兼管理係長：山口幸作

課長補佐兼埋蔵文化財係長：大村敬通／主任：小川良太／主任：岡田章一

整理作業（昭和63年度）

* 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

課長：中根孝司／参事：森崎理一・日野和広／副課長：高坂 隆

課長補佐：松下 勝／課長補佐兼管理係長：山口幸作

課長補佐兼埋蔵文化財係長：大村敬通／主査：小川良太／主任：岡田章一

整理担当：加古千恵子・岸本一宏・平田博幸

整理作業（昭和64・平成元年度）

* 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長：大江 剛

副所長兼調査第2課長：村上祐揚／総務課長：小池英隆

整理普及課長：松下 勝／主任：加古千恵子／技術職員：別府洋二・岸本一宏

整理担当：加古千恵子・岸本一宏・平田博幸

本報告書の刊行をもって山垣遺跡の調査は終了をむかえますが、この長きの間にわたり多くの方々に惜しみない御協力を賜わり、こうして報告書を刊行できましたことに深く感謝いたします。特に地元春日町の皆様、日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所の方々、さらに公務の間をぬって数々の御指導と御教授を下さいました奈良国立文化財研究所をはじめ、関連諸機関の方々にもこの紙面を借りて御礼申し上げたいと思います。

3. 遺跡の取り扱い

調査の詳細な結果は後に記すとおりであるが、本遺跡が全国的でもはじめての「里」に関する遺跡であることが判明したため、歴史的・学術的にも重要なこの遺跡を現地で保存し、随時研究・公開できる状態で保存する事を日本道路公団へ申し入れ協議を行ったが、既に南北の両側まで本塀部分の土盛りが完了しており、この段階での撤去等工法変更は不可能であるとの解答を得た。よって可能な限り遺構を保護するため遺構内はもちろん、遺構面上約30cmまで山砂を敷き詰める条件の基に、当初計画通り記録保存による土盛りし工事を行なう事とした。

また遺跡の北を限るSD-0についても、路線内以西は既に農業用幹線水路によって破壊されているため、唯一残る路線内部分を保存するためこの水路の迂回を申し入れたが、水路カルバータ内の清掃等で内部に入った場合の安全性を考えると、水路の迂回は不可能であるために、SD-0は水路によって完全に消失してしまう事となった。

野村B・C地点については可能な限りの調査を実施し、検出した遺構等を記録する事によって保存できたため、調査終了後に土盛り工事を行った。

4. 調査日誌

全面調査（昭和58年4月18日～同年9月10日）

- 4月18日 作業開始。調査区の草刈り。基準杭の設定。機材の搬入。
- 4月19日～26日 A地点人力掘削。C地点重機掘削。
- 4月19日～5月8日 連休。
- 5月9日～18日 A地点人力掘削、遺構検出。
- 5月19日 A地点遺構検出。C地点第3・4・5トレンチ断面精査。
- 5月20日～27日 SD-1内北より掘削。
- 5月30日 A地点全城のセクション撤去。掘立柱建物址検出状況写真撮影。
- 5月31日～6月3日 柱穴・ピット類の掘削。
- 6月6日～9日 重機により調査範囲を北に拡張。C地点人力掘削開始。
- 6月10日 SD-5南側を拡張。掘立柱建物址の写真撮影。
- 6月14日 内郭北半の清掃。遺構検出状況の写真撮影。SD-5検出状況写真撮影。
- 6月15日～30日 SD-3・5掘下げ。付札・墨書き器出土。
- 7月1日～6日 SD-1掘下げ。馬糞出土。
- 7月7日 人形出土。共同記者発表。
- 7月8日～13日 SD-1・2掘下げ。木筒出土。濠内遺物出土状況写真撮影。
- 7月18日 各セクション写真撮影、実測。
- 7月19日～25日 SD-3掘削。円面鏡・付札出土。
- 7月26・28日 SD-2完掘。各セクションの撤去。
- 7月29日 全城の清掃。午前セスナ機、午後模型ヘリにより全景の写真撮影。
- 8月1日～3日 平面実測用の割り付け。B地点の表土掘削。
- 8月4日 濠内遺物出土状況の実測。B地点の表土掘削。馬糞をウレタンで取り上げ。
- 8月5日～12日 濠内遺物出土状況の実測。遺物の取り上げ。B地点の表土掘削。平面実測。
- 8月13日～17日 積休み
- 8月18・19日 A地点遺構平面実測・エレベーション。
- 8月23日～26日 B地点遺構掘削。
- 8月29・30日 A地点清掃。B地点流路内セクション断面の実測。
- 8月31日 A地点写真撮影。
- 9月2日 SD-4を確認するために3本のトレンチを掘削。
- 9月5・6日 B地点清掃、全景写真撮影。C地点流路内掘削。
- 9月7日 C地点流路内掘削終了。B地点平面実測用の割り付け。
- 9月8日 B地点平面実測終了。B・C地点平板測量。
- 9月10日 現地説明会。
- 9月12日 調査終了。

第II章 遺跡の調査

1. 遺跡の歴史的環境

從来春日町内における周知の遺跡は古墳や城郭など外見できるものであったが、近畿自動車道舞鶴線に関する発掘調査および圃場整備に関連した発掘調査などによって、古墳や平野部における各時代の集落址等多くの遺跡が新たに発見されることとなり、原始・古代の町史が大きく塗り替えられた感もある。それらの新たな発見の中には、全国的見地から検討される性格の遺跡もあり、「丹波」の地域的重要性を再認識する必要に迫られている。

まず注目されるのは、山垣遺跡のすぐ北西に在る春日・七日市遺跡である。近畿自動車道舞鶴線の春日インター部分に当たったため、一万m以上において広範囲の発掘調査がなされ、始良火山灰を作り遺跡でも記載の後期旧石器遺跡の実態が明確となった。その上層には周溝墓を伴った弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての大規模な集落址と、「春マ郷長」の墨書き器等を伴い、大型の攝立柱建物址が整然と並んだ奈良時代後半から平安時代初頭の官衙的性格を持つ遺跡等が複数の複合遺跡である。

野村地区では古く有柄式石劍が出土しており、加古川水系との文物の交流が盛んであったことが言わされているが、山垣遺跡の東山裾の野々間遺跡でも外縁付錐式銅鏡が二口発見され、一層加古川・由良川ルートの重要性が高まってきたが、上記の春日・七日市遺跡がその中心的集落であった可能性が非常に強い。

国領に所在する国領遺跡でも弥生時代の集落址が確認されている。弥生時代後期に属し、丁度その時期春日・七日市遺跡の遺構が減少するため、両者は有機的な関係を有するようである。また文化層を伴わないが、旧石器がここでも出土している。さらに、11世紀末から12世紀代の攝立柱建物址群もみられるが、谷を別にした多利・前田遺跡ではこれに続く時期の攝立柱建物址群があり、地理的・時期的観点からも両遺跡の存在意義が注目される。

古墳に関しては、竹田川右岸の野上野・多利、中央平野部の南に接する棚原・野村の山裾、さらに黒井川北岸の山田・牛河内・長王の各地域に古墳の集中がみられる。松ノ本古墳群（5世紀から6世紀）・多利古墳群（5世紀から7世紀）等のように、接近する各古墳群でもその内容はかなりの特色あるものと思われる。前方後円墳では、稻塚に馬具・玉類を出土した玉塚な



第1図 春日町位置図

る古墳があったと言われているが現存せず、野上野の二間塚古墳（全長約37m）だけが唯一の前方後円墳となっている。この古墳も早くに発掘され、石室が内部主体であったと伝えられているが時期などははっきりしない。外観から古墳時代中葉から後半の時期と考えられる。

須恵器窯址は、市島町の鶴庄古窯址群（6世紀後半から9世紀）がかなり広範囲に広がる窯址群として知られている。春日町内でも中山の10世紀代の窯址と、野上野の中央・田中奥地区の谷間部にある野上野窯址が知られているが、未調査のためその実態は把握しきれていない。ただ野上野窯址出土の須恵器には、山垣道路、春日・七日市道路で大量に出土しているものと同型式のものが含まれているため、7世紀後半から9世紀初頭にかけての窯址群がそこにあり、両道路に供給されていた可能性が非常に高い。



第2図 周辺遺跡分布図

中世城郭（城館）においても、丹波・丹後・播磨への交通の分岐点に当たっているため、三尾城・河津館・高尾城・茶臼山城・野村城・野上野城等多くの城郭がみられ、近世には赤井氏の居城黒井城が築かれて今日の春日町の母体が形成された。

表1 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	種別	時期	所在地	備考
1	山垣遺跡	里長垣址	奈良前半	春日町櫛原字山垣施	
2	三ツ塚庵寺跡	寺院址	白鳳時代	市島町上田	
3	天神瓦窯址	瓦窯跡	白鳳時代	市島町上田	
4	鴨庄森坂1号窯址	須恵器窯址	古墳～奈良	市島町喜多森坂	
5	鴨庄森坂2号窯址	須恵器窯址	古墳～奈良	市島町喜多岩戸シシリヤ谷	史跡指定
6	上牧窯址群	須恵器窯址	古墳～奈良	市島町上牧小星谷	
7	喜多窯墓	墓葬	中世	市島町喜多	
8	鴨庄森坂3号窯址	須恵器窯址	古墳～奈良	市島町喜多端	
9	喜多窯址	須恵器窯址	古墳～奈良	市島町喜多	
10	雨宮址	須恵器窯址	古墳～奈良	市島町南	
11	柏野1・2号墳	古墳群	古墳時代	春日町小多利柏野他	
12	柏野3・4号墳	古墳群	古墳時代	春日町小多利高山ノ下	
13	童所古墳	古墳群	古墳時代	春日町小多利童所	
14	松ノ本古墳群	古墳群	古墳時代	春日町多利松ノ本	
15	多利遺跡群	集落	古墳時代	春日町多利前田他	
16	野上野城跡	城跡	中世	春日町野上野奥山	
17	多利古墳群	古墳群	古墳時代	春日町多利向山他	
18	二間塚	前方後円墳	古墳時代	春日町野上野田中	史跡指定史跡
19	野上野古代墓址	須恵器窯址	古墳時代	春日町野上野田中	
20	長者ヶ野古墳群	古墳群	古墳時代	春日町長者ヶ野他	10基確認内4基崩壊
21	山田御源寺古墳	古墳	古墳時代	春日町山田寺山	
22	山田井上古墳	古墳	古墳時代	春日町山田大山	
23	氏龟古墳群	古墳群	古墳時代	春日町古河氏龜	3基確認
24	水農古墳	古墳	古墳時代	春日町黑井奥兵主	
25	兵生古墳	古墳	古墳時代	春日町櫛原奥兵主	
26	櫛原松島古墳	古墳	古墳時代	春日町櫛原奥東山	
27	櫛原古墳群	古墳群	古墳時代	春日町櫛原大西他	
28	黒井(保月)城跡	山城	近世	春日町黒井井上丸	
29	龜山古墳	古墳	古墳時代	春日町朝日八幡山	
30	十八人衆首塚	古墳	基壇	春日町朝日丹波山	
31	朝日城跡	城跡	中世	春日町朝日七日市	
32	春日・七日市遺跡	集落	平安	春日町野村木寺	
33	野村城跡	城跡	中世	春日町野村竹田川左岸	
34	野村遺跡	石剣出土址	弥生時代	春日町野上野野々間	
35	野々間遺跡	銅鐸出土址	弥生時代	春日町塩ヶ谷松ガ鼻	
36	塙ヶ谷古墳	古墳	古墳時代	春日町塩ヶ谷山王	
37	塙ヶ谷山王古墳	古墳群	古墳時代	春日町野村西野々	
38	西野々古墳群	古墳群	古墳時代	春日町野村奥野村	
39	茶臼山城跡	古墳	古墳時代	春日町野村六ツ塚	
40	六ツ塚古墳	古墳	古墳時代	春日町棚原原南	
41	殿墓古墳	古墳	古墳時代	春日町棚原高西	
42	柳原桜塚跡	古墳	古墳時代	春日町国領南他	
43	国領遺跡	古墳	古墳時代	春日町國領越山	
44	尉ヶ越苗跡	山城	中世	春日町櫛原尉ヶ越山	
45	袖津城跡	山城	中世	春日町袖津城	
46	国領古墳	古墳	古墳時代	春日町国領	
47	高尾城跡	古墳	古墳時代	春日町国領長谷	
48	東中城跡	古墳	古墳時代	春日町東中佐中	
49	河津船跡	居船	中世	春日町東中	
50	乾中塚古墳	古墳	古墳時代	春日町中山佐中	
51	三尾城跡	山城	中世	春日町東中三尾	
52	下三井庄塚	古墳	古墳時代	春日町下三井庄九西坪	
53	南多田古墳群	古墳群	古墳時代	柏原町南多田	7基確認
54	久原古墳群	古墳群	古墳時代	柏原町南久原	
55	藤の目古墳群	古墳群	古墳時代	柏原町藤の目	1基崩壊状況
56	大安寺古墳群	古墳	古墳時代	柏原町東大安寺	
57	柏原高校古墳	古墳	古墳時代	柏原町柏原八幡山	
58	八幡山古墳	古墳	古墳時代	柏原町柏原八幡山	
59	柏原通神塚跡	居船	近世	柏原町柏原	史跡指定

2. 遺跡の概要

昭和57年度確認調査時のNo.9グリットにおいて、南北方向に流れる旧河路を検出し、その中から奈良時代を中心とする墨書き器を含んだ土器類と木製品が大量に出土した。ただその南へ20mあまり離れた確認グリットではなにも確認できなかったため、No.9グリットを中心とする約1100m²あまりを全面調査の対象範囲とした。

確認調査の結果に基づき、翌昭和58年度に全面調査を実施した。段差のあまりない平野部内に位置するものの、扇状地上に位置するためほとんど包含層ではなく、耕土直下で遺構を検出できる。そのため、耕土の掘削も重機を使用せずすべて人力で行った。ただ、C地区は包含層までが1m近くあるため、重機の掘削の後遺構面までを人力で掘削した。

掘削の結果、A地点は遺構が全面調査対象範囲外へも広がることが判明したため、日本道路公団と協議を行い、南北約63m、東西約27m、総面積約1350m²に調査実施範囲を拡大した。

遺跡は竹田川左岸の低位段丘上に位置する。周辺の地形は、南の譲葉山・清水山山塊から伸びる低い扇状地が連続するため、南に高く北に向かって下がり、さらに西へは河岸段丘をへて竹田川へ続く基本地形となる。さらにその平野部に10cm間隔の等高線を入れると(第5図)、旧竹田川の河道等旧地形を復元できる。旧竹田川は棚原の集落の北側で現竹田川と分岐する。棚原・野市の集落の東の中位段丘の北側を北西に進み、春日中学校の東でさらに分岐する。一本はそのまま北上し、山垣遺跡と春日・七日市遺跡の間を通り七日市集落の東を経て、現竹田川に合流する。春日中学校の東で分岐した他の一川は、そのまま北西へ進んだ後、春日・七日市遺跡と下野村集落以西の段丘との間に北進し、七日市集落の西手で黒井川と合流して、多田集落の東を経て現竹田川に注いでいる。

山垣遺跡は旧竹田川によって形成された最も東の低位段丘(微高地)に位置する。この段丘は、南北約1000m強、東西約250m前後の細長い島状を呈し、遺跡のすぐ東が段丘崖となっており、遺跡の邊地において東を流れる竹田川を強く意識していたものと思われる。

検出できた遺構は方形に巡ると思われる溝状の溝(SD-0.1, 2, 3)と、溝の内側に建てられた南北棟柱建物址一棟・幅状造構一条

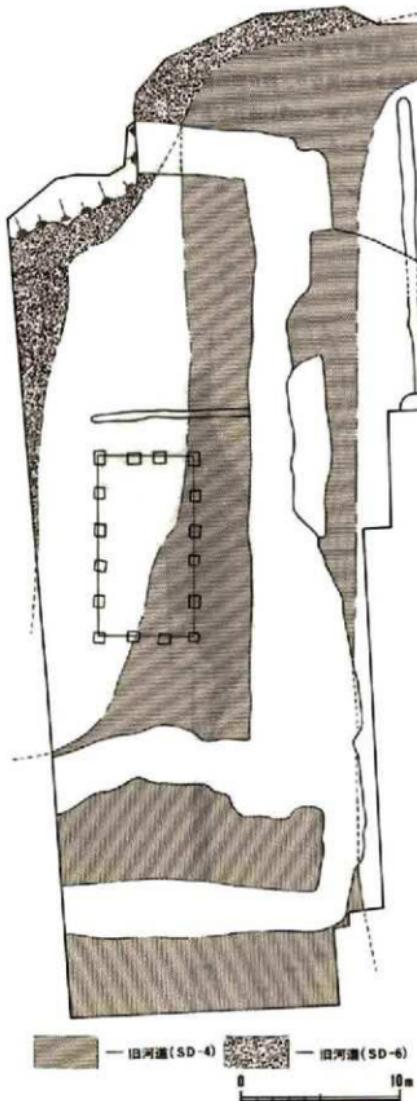


第3図 遺跡周辺の概地形

だけである。獨立柱建物址は方形区画内の東南隅にあり、場もしくは柵を隔てた北側に東西方向に長い柵開きが配されている。濠状の溝の東にも同方位の細い南北溝(SD-5)が一条みられる。

遺構は南西から北に流れる弥生時代から古墳時代の旧河道(SD-4)、南西から東に流れる古墳時代の旧河道(SD-6)が埋まつた後に造営されている。よって獨立柱建物址の東柵柱列、南柵柱列の東半分と濠のはんどが旧流路内に入る。そのため、濠の内肩部の北半分には、護岸用と思われる杭が打たれている。濠内からは、7世紀後半から8世紀前半にわたる大数の土器・木製品と共に、「里長」の文字のある木簡等が出土した。

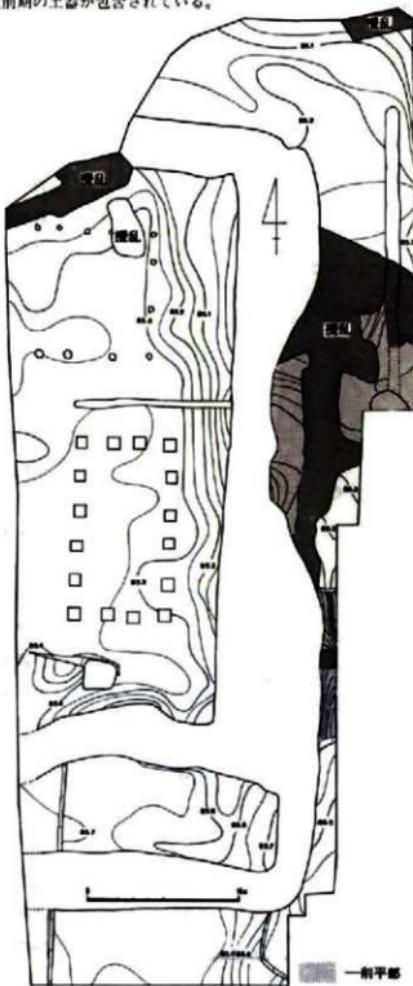
調査範囲が路線内のため、濠が続く西側の地区にはまったく調査の手を入れることができなかつたが、同様の状況で連続しているものと思われる。ただ北の濠に関しては、先行して行われた農地区画整備に伴う東西幹線水路と重複しているため、以西部分は既に破壊されている。



第4図 調査区内古地形図

B地区も耕土直下で遺構を検出できる。遺構は、調査区の西側に蛇行しながら弧を描いて流れる溝だけである。溝内からは6世紀末から7世紀前半の土器がわずかに出土している。ここでも南東から北西に流れる旧河道と溝遺構とが重る。

C地区は上記二地区とは遺路の立地条件が異なり、段丘間の自然流路内にあたっている。北西から東に流れる旧河道を切るように西から東への浅い流れがあり、この流路の中に弥生時代後期から古墳時代前期の土器が含まれている。



第5図 調査区内等高線図

1. 確認調査

確認調査は、昭和57年12月13日より12月24日まで実施した。調査対象地区は野村地区から柳原地区にかけての路線内、約27,500m²である。

路線外ではあるが、調査対象区の付近の水田から昭和43年に完形の有職式磨製石剣が瓦土採掘作業中に表下30cmの深さで偶然に掘り出されており、野村石剣出土地と呼称されていたが、単独出土で遺跡の確認はされていなかった。

このため、集落跡の存在は十分予想され、確認調査の実施にあたっては分布調査の結果を参考に2m四方のグリッドを27箇所に設定し、土層の堆積状況を観察した。

その結果、第6図に示すグリッドNo.9、No.10、No.20において遺構および遺物を検出したため、状況に応じてグリッドを拡張して遺構の性格を把握につとめた。遺構および遺物が検出されなかつた他のグリッドにおいては、砂礫層等の無遺物層まで掘り下げた。確認のグリッドのはほとんどは耕土下が瓦土の採掘によってかなり深く擾乱されていた。瓦土採掘作業をした地元の人々の話では土器がかなり出土したようである。確認調査の発掘総土量は、156.4m³であった。

確認調査の結果、No.9、No.10の山垣地区では古墳時代から奈良時代の土器が、No.18、No.20の野村地区では弥生時代から古墳時代にかけての土器が多量に出土し、遺跡としては全く異なる様相を呈していた。以下、各地区について確認調査の結果を述べることにする。

山垣地区 (No.9・No.10グリッド)

No.9グリッドでは、耕土下より多量の須恵器が出土したが土層の堆積状況が不明瞭であったため、北及び東方向に2mずつ拡張、遺構の性格を把握するためさらに北4m拡張して4m×8mの範囲を精査した。その結果、須恵器の出土する範囲は東半分に限られており、その境目には南北方向に8本の杭列が検出された。北壁及び南壁の土層觀察では砂質土層の東側への落ち込みが確認された。この状況から南北方向の大きな溝状遺構があると思われたが、東西の溝の網を確認するには調査範囲が大きくなりすぎるため実施しなかった。柱穴は確認されなかった。出土土器は、7世紀から8世紀の土師器、須恵器類で、確認調査後土器を水洗いしたところ、墨書き土器や須恵器の坏蓋を利用した転用窯が多量に含まれていたため、グリッド西側において何らかの建物遺構が存在するのではないかと思われた。(確認調査時グリッド設定西側部分には仮設用水路掘削の際の掘削土が盛り上げられており、確認グリッドを入れることが出来なかった。)

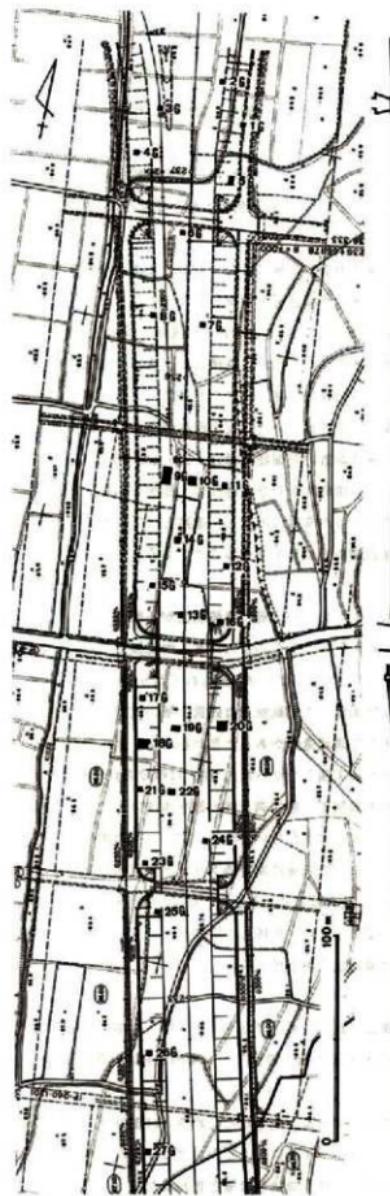
No.10グリッドでは、瓦土採掘の擾乱を若干受けている。近接したNo.9グリッドにくらべ須恵器より土師器の出土量が多く、土器出土層は遺物包含層と思われた。

野村地区 (No.18、No.20グリッド)

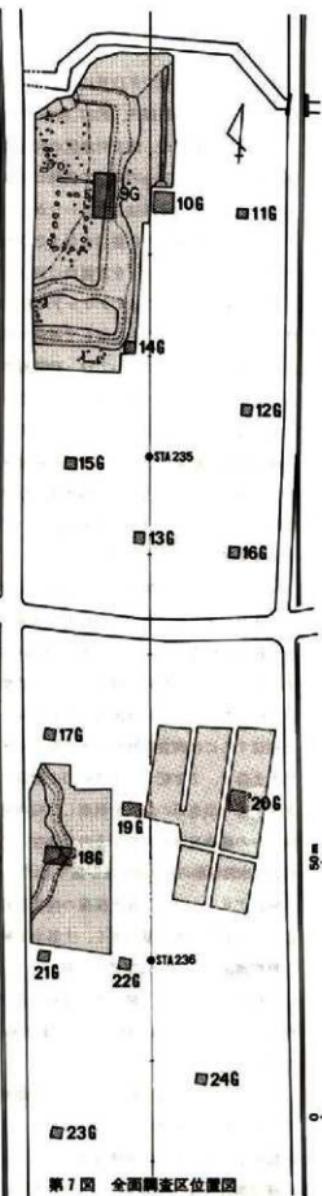
No.18グリッドでは、耕土下で落ち込みが確認されたため、グリッドを3m×4mに拡張して精査したところ、幅1.5m～2m、深さ50cmの蛇行した溝を確認した。溝内からは、弥生土器、土師器が出土した。

No.20グリッドでは、耕土下1mの砂礫層内より須恵器が出土したためさらに掘り下げたところ、灰色粘土と砂礫の入り交じった層より、土師器が多量に出土した。グリッドを4m×4mに拡張したが、顯著な遺構は認められず、旧河川に伴う遺物包含層と思われた。

確認調査を行った結果、以上の3地区において全面調査の必要性が認められた。



第6図 確認グリッド配置図



第7圖 全面調查區位置圖

第III章 遺 構

1. 濠

方形に造り、内側を区画する濠状の溝である。便宜上北の東西溝をSD-0、それに続く南北溝をSD-1、南側の東西溝の内その北側をSD-2、南側をSD-3とする。

SD-0

SD-1 東肩部からの現長約12m、幅約3m、深さ約50cm、SD-1からほぼ直角に西に曲がる。内（南）側肩部に護岸用の杭を打つ。西延長部分は農業用水路によってすでに消滅する。

SD-1

SD-0の北肩部からSD-3の南肩部までの距離は、約50.5m。SD-0の北肩部約10mから約29mまでの間が内側に突出し、幅が約3mと狭くなる。この突出部以北は幅が約5.5m、以南は約7mと広くなる。ただ、SD-3の南肩部から約8mのところでSD-2の南肩部と分岐するが、それ以南は幅が約2mに狭まり、そのままSD-3へと続く。西肩部のうち、突出部の南端の対岸にあたる付近より北側には、護岸用と思われる杭が打ち込まれている。深さは北側で約50cm、SD-2と分岐する北側が最も深く約80cmである。

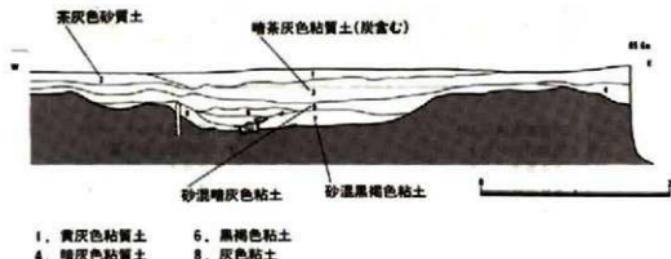
SD-2

SD-1の東肩部からの現長約19.5m、幅は約3m。西側が若干南に傾ける傾向がみられる。深さ約70cmある。調査区の西辺付近の北肩に杭が一本打たれている。

SD-3

SD-1の東肩からの現長約18m。SD-1の南端から西へほぼ直角に曲がる。幅約2.5-3.5m。深さ約70cm。

濠の南辺はSD-2とSD-3があり二重壁の構造になっているが、この2本の溝の構築の前後関係または同時構築かは溝内の堆土では確認できないが、最終段階では同時期に稼動している。



第8図 SD-1断面図

2. 溝

布堀溝

SD-0 の北肩部から約18.5mの箇所にある布堀溝。掘立柱建物址と柵列とを区分している。3本の細い柱根が遺存。おそらくSD-1の西肩部から始まっていたものと思われる。SD-1の西肩部からの全長約10m。深さ約20cm。土器の出土はないが、濠と同時期であろう。

SD-5(半町境)

SD-1の東肩部から東へ約5mの距離にある南北溝であり、ほぼSD-1と平行している。現長約20m。調査区の北端から約4mのところで終結する。南側は後世の擾乱によって遺存状態が悪い。幅約80cm、深さ約20cm。断面は浅い「U」字状を呈する。

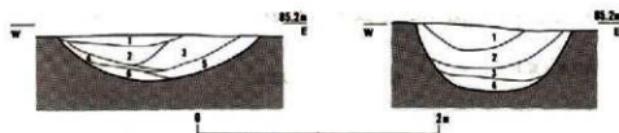
7世紀末から8世紀前半の土器を出土するが、7世紀後半まで上がる可能性がある。

3. 掘立柱建物址

濠内の南側(布堀溝の南側)に一棟確認した。3×5間(6m×11.2m)の側柱南北棟である。東桁行がSD-1の西肩部より約3.5m、北梁間がSD-0の南肩部から約18mの位置にあたる。掘方は不揃いであるが、概ね隅円方形を意識している。芯々間は2.4m(8尺)を計る。

4. 柵列

濠内、布堀溝の北側にある。柱間隔は不揃いであり、北柱列(現長約10m)は5間分を、南柱列(現長約9.5m)は4間分を、東柱列(現長約8.5m)は3間を確認している。掘方も20cm前後と小さく、すべて円形である。



- | 番号 | 説明 |
|----|-----------|
| 1. | 黄灰色シルト～中砂 |
| 2. | 灰褐色シルト質 |
| 3. | 灰黄色シルト |
| 4. | 灰褐色シルト～粗砂 |

第8図 SD-5断面図

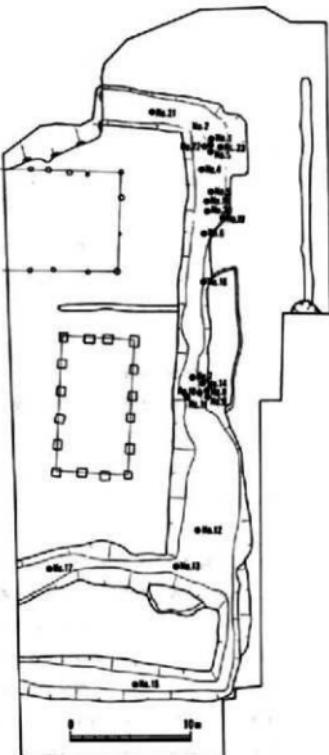
第IV章 遺 物

1. 木 簡

A. 木簡釈文の経緯

本遺跡の藩内からは、21点の木簡（24点出土したが接合したため）が出土した。それらの内多くはSD-1の東側出入り口と想定される突出部付近で、大量の土器と折り重なるようにして出土した。SD-0・SD-2・SD-3からもわずかながら出土している。（第10図）

出土した時点では奈良国立文化財研究所の御協力・御指導をいただき、調査概報作成時には同研究所の鬼頭清明（現東洋大学教授）・佐藤信（現文化庁記念物課技官）両氏と奈良女子大学佐藤宗淳教授に解説をお願いし、さらに佐藤教授には木簡に関する王稿を贈った。今回の本報告書の作成に当たっても、御三氏にお願いすべきところであるが、奈良国立文化財研究所の御二人が転出されたため、鬼頭氏の御配慮により、引き続き同研究所で木簡類を安置していただく予定にしていたのであるが、折しも平城京内で「長屋王家木簡」・「二条大路木簡」とたて統けに膨大な量のしかも非常に重要な内容を記した木簡が発見されたため、真空凍結乾燥処理によって新たに出現した文字等を含めた「山垣遺跡木簡」についての新たな解説・釈文等を頂く事が出来ない状態となつた。よって今回の報告には、



第10図 木簡出土地点位置図

「概報」・「木簡研究」第6号の佐藤教授による釈文を引用させていただき、最終的な釈読とその解釈については後日改めて報告させていただく事とする。

B. 木簡の釈文

図版15から図版21にかけて真空凍結乾燥処理前の実測図と概報掲載の釈文を記した。

形態別に分類すると、1：文書木簡、2：付札・荷札木簡、3：留書木簡等に分類できる。

佐藤教授は木簡に記された内容から

1：支配関係を示すもの〔(1)～(3), (16), (19)〕

2：農業経営ないしそれに類する内容を示すもの〔(8)～(11), (17), (24)〕

3：徵税・収奪など民政にかかわるもの〔(5), (6), (12)～(15), (21), (22)〕

4：留書・用途不明

等に分類しておられる。(詳細な内容については兵庫県教育委員会「山垣遺跡概報」・「木簡研究」第6号を参照されたい)

木簡釈文についての註は、次の通りである。

1. 釈文末尾の数値は、木簡の長さ・幅・厚さの順にミリメートル単位で示した。欠損しているものは現在長を括弧書きで示す。

2. 釈文に用いた符号の内容

()：校訂に関する註の内、本文に置き換わるべき文字に付く。

□□□□：欠損文字の内字数の確認できるもの。

□□□：欠損文字の内字数が推定できるもの。

□□：欠損文字の内字数が数えられないもの。

□□：記載内容からみて上もしくは下に少なくとも1字以上の文字を推定できるもの。

〔 〕：異筆・追筆。

・：木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

カ：疑問の残る註。

また本簡は比較的出土状況は良好なもの、その形状は次のようにになっている。

文書木簡

No19を除いて、幅は約4～5cm、厚さは約0.4～0.8cm前後である。

*No 8～11木簡：両端とも残存しており、下端の中央に穿孔。両面に墨書き。6分割となる。

「丙午年」かと読める記年名あり。表面の残存状況は良い。

*No 3 木簡：下端を欠損。両面に墨書きがあり、非常に良好に遺存。

*No 2 木簡：上端を欠損し、側邊も若干剥離。両面に墨書きがあるが、状態は悪い。

*No17木簡：両端を欠損。両面に墨書き。表面は若干剥離する。

*No16木簡：両端を欠損し、二分割となる。両面に墨書きがあり、遺存状況は良い。

*No22木簡：両端を欠損。両面に墨書きがあり、遺存状況は良い。

- * Na24木簡：両端を欠損し、側面もかなり荒れる。片面に墨書があるが、表面はかなり荒れる。
- * Na19木簡：全長を残す。幅が付札程度に狭いが、遺存状況は良好である。

荷札・付札木簡

- * Na12木簡：全長を残す。先端を両側から削り込んで尖がらす。片面に墨書があり、遺存状況は良。
- * Na14木簡：下半を欠損。片面に墨書がある。文字部分がかなり荒れる。
- * Na5木簡：全長を残す。上端には両側から「く」字に削り込んでくびれをつくる。先端も両側から削って尖がらす。片面に墨書があるが、文字はかなり薄くなっている。
- * Na20木簡：全長を残す。上端と中央部分に小さなくびれがある。下半はだいに細くなるが尖がらない。片面に墨書があり、遺存状況も良好である。
- * Na15木簡：下端に切り込みを入れる。上端は欠損する。片面に墨書があり、文字の状態は良好である。
- * Na7木簡：上端を欠損する。片面に墨書があり、遺存状況も良い。

習書木簡

- * Na14木簡：下端を欠損する。片面に墨書があり、遺存状況も良好。付札様に幅が狭い

C. 木簡の内容について

山垣遺跡出土木簡の釈読から、佐藤教授はその内容を次の様に分析されておられる。

- すべてが、郡里制下〔大宝2年(702)から靈龜元年(715)まで〕の木簡である。
- 年号が干支年で記載されていることから、木簡自体が7世紀代に遡る可能性がある。
- (3) 木簡は上級官司ニ水上都衛から春部里長にあてられたものである。
- 郡を越えた里への下符がある事から、律令制的行政区画の初期的段階を示している。
- 一本簡内に郡里を越えた人名が見られる事、春部里のみ「代」がみられる事は在地の支配関係を示すものである。
- 日時を十二支用いて記している事〔(24)木簡〕の意味あい。
- 里名・地名・民名との関連〔(7)木簡〕。

最終的に、同教授は木簡の内容から本遺跡の性格を確定する事は出来ないとしながらも、都衝より下級の官衝であることをほぼ認めておられる。私共も前記したとおり遺構・遺物の分析から、郡衝の統制下にあり律令制地方支配機構の末端に位置する「里」の中心的施設(=「里家」)に相当するものと考えている。

2. 墨書き土器

各時期に見られるが、第1期型式に11点（内土師器2点）、第2期型式に11点（1点）、第3期型式に11点（1点）、時期不明7点の総計40点（4点）を確認している。各土器の型式分類に関しては後記する土器の項で詳しく述べる。

第1期型式

須恵器

杯Aの2点はいずれも底部外面にあり、1は「仮」、2は「春マ」と書かれる。杯蓋の2点は内側の口縁部近くに書かれており、3は2文字分は確認できるが文字は不明であり、4は「珠環(?)」とある。

杯Bの底部外面に書かれた4点の内、5と6は「春マ」であり、7は「井」、9は「掛」である。体部外面の8は「春マ」と横書きされる。

土師器

杯Aの1、杯Cの3ともに底部外面中央に「春□」とあり、下部を欠損するがおそらく「春マ」とあったものと思われる。

第2期型式

須恵器

杯Aは4点ある。「上影榮」の墨書きが10には体部外面に、11には底部外面に書かれる。12は底部外面に「春」と漆書きされ、13は体部外面に「仮」が縱書きされる。

杯蓋は4点あり、14は天井部に「春マ」を4行書きし、15は内面に「春マ」・16は「春部」と書く。17は内面に「井」と書かれていたものと思われる。

杯Bは2点あるが、18は体部外面に「春一欠損」となっているが、「春部(マ)」と横書きされていたものと思われる。19は底部外面に「掛」とある。

土師器

2の杯A 1点のみであるが、体部外面に「春マ」と縱書きされていたものと思われる。

第3期型式

須恵器

杯Aの20は底部外面に「春マ」と書かれ、21は底部内面に「富貴」と漆書きされる。

杯蓋はいずれも内面に見られる。23.24.26.28は「春マ」、22は「杯」、25は「春部□」、27は「得」と書かれる。特に26には「春マ里長」の墨書きが、口縁部付近に書かれている。

杯Bは29 1点であり、底部外面に「春マ」と書く。

土師器

4の皿1点だけである。底部外面に「得」と書かれる。

型式不明のものはすべて須恵器であり、30が杯Aで体部外面に「春マ」、36は杯Bの底部外面に筆の当たりをみるが文字は不明である。他の5点は杯蓋であり、内面に墨書きを残す。34は漆によって「玉」と書かれ、31が「春□□」、33が「大」と読める他は判読できない。

上記した墨書き土器40点は、後述する本論同様正確な判読を行っていないため文字不明としたものもあるが、これらも含めて全体的な判読を行った後「第2番」において再度詳細に報告させて頂くこととし、今回は文字の内容を作わない統計的な処理のみ行った。各型式間での総数は三型式とも11点である。土師器は1もしくは2点が含まれる状態であり、型式間での増減は認められない。

また須恵器：土師器の割合は、総数で36：4=9：1と須恵器が圧倒的に多い。土器全体の中での供給形態の割合が約8：2であるため、若干須恵器に多く墨書きがされていると言える。これを時期別にみると、第1期型式では8：2、第2期型式では9：1、第3期型式でも9：1となり、各型式とも総数での割合と近い状態になっている。

器種としては、杯A・杯蓋・杯Bの3器種のみに見られる。各型式内での3者の割合は、第1期型式内で2：2：6、第2期型式内では4：4：2、第3期型式内では2：7：1となる。杯Aは第2期型式で増加するものの総じて2割程度を占める。杯蓋と杯Bは相反する状況にあり、第1期型式では杯Bが多いが第2期型式以降はだいに減少し、それに代って杯蓋が多数をしめるようになる。型式不明の7点を加えれば、この傾向はより顕著なものになると思われる。

各器種内での墨書きの書かれる位置を見てみると杯Aは底部外面の周囲部分が3点、その中央部が1点、体部外面が3点、内面底部が1点となり、底部外面でもその周辺部と体部外面に多い。杯蓋は内面の口縁部付近が5点、中央寄りに4点、ほぼ中央に3点、天井部が1点となり、中央を避けた場所への頻度が高い。杯Bは体部外面が2点、底部外面の中央部が1点、その周辺部が5点で、杯蓋同様中央部以外の箇所に多く書かれる。ただ土師器の場合は体部外面に1点書かれているが、残る3点は底部外面の中央部に書かれており、総数は少ないものの須恵器とは若干異なった状態にある。いずれにせよ、こうした墨書きの位置の傾向は、その使用目的・用途等に関連するものとも考えられる。

以上墨書きについての大まかな傾向を述べたが、判読できる文字の中では「春マ(春部)」が最も多く書かれており、墨書き土器の面からもこの遺跡が「春部里」もしくは「春部」なる人物に関連した遺跡であるという以上に、「春マ里長」の墨書き土器の存在により「里」もしくは「里長」そのものの存在、さらに極端な言い方をすれば「里」・「里長」そのものを肯定する性格の遺跡になるのではないかと考える。

3. 円面硯

総数で4点が出土している。ほぼ完形を知り得るのは305のみである。

飛鳥期 (305)

28本(推定)の長方形透による低脚の脚足を持つ。堤は開き気味に立ち上がり、端部は内傾する。

平城期 (306)

脚部以下を欠損し、堤は外傾して短く立ち上がる。端部小さく外方に肥厚して狭い水平面を形成する。溝は浅く、隣の周囲の土手も小さくなる。

308は脚足部のみであり、大きく聞く脚部には9個の大きな長方形透が穿たれる。足部は段によって脚部と区別される。307は308と同様の足部であり、脚部との接合部分で割離する。

4. 土 器

ここに報告する土器の多くは、「コ」の字型に検出した瓶(漆)内から出土した。特に木器の状況と同様突出部以北に集中してみられた。土器の中にはSD-4と同時期のものも少量含まれるが、多くはそれ以降の奈良時代に属するものである。各土器はSD-1の溝底内に折り重なるような状態で出土したため、層位的に取り上げることは出来なかった。基本的な器種分類は「飛鳥・藤原京・平城宮」を参考とした。

A. 須恵器

杯A

高台を伴わないので3型式に分類できる。さらに口径差から2型式に分かれるが、各時期とも1型式(大口径)に属するものはごくわずかである。器的には第3期型式に薄手のものがあるが、明確に区分できるものではない。

第1期型式(1-52)

4形態あり、全般的に器高が高く体部に丸味を持つ。口径差によってI・II型式に細分する。

第1形態：前代の杯Gの形態的特徴を受け継ぎ、底部から体部へと緩やかに続くもの(1, 2)と明確で体部が屈曲するもの(3, 4)がある。

第2形態：体部が屈曲する形態で、第1形態の後者の型式を受ける。

第3形態：体部が内側する形態。口縁部が外反するものと、しないものがある。II型式内には古墳時代の杯蓋に近いものもあるが、それに合う口径の杯身がないため杯Aとして取り扱った。

第4形態：器高が高く、椀に近い形態のものである。すべてII型式に属し、口縁部が大きく屈曲することを特徴とする。

第2期型式(53~104)

3形態に分類できる。体部には直線的なものと丸味を残すものがあり、器高もわずかに低いものがみられる始める。I・II型式がみられる。

第1形態：第1期型式の第2形態を引き継ぎ、体部が外反もしくは直伸する形態のもので、I型式・II型式がある。口縁部が大きく屈曲するものもある。

第2形態：前代の第3形態に続き、体部が内擣する形態である。他の二形態に比べると器高が相対的に低い。口縁部が外反するものが多くを占める。

第3形態：前期型式の第4形態同様器高は高いが口縁部の大きな屈曲はなくなり、わずかに外反する程度となる。

第3期型式(105~156)

器高は全体的に低く、体部の内擣も小さい。底部との境が明確。3形態に分類できる。

第1形態：体部に内擣の痕跡を若干残し、口縁端部はわずかに外反する。I型式はない。

第2形態：体部が直伸もしくは外反するが、相半ばする。I型式は底部を回転ヘラケズリし胎土も他のものより緻密であるため搬入品と思われる。皿に近い形態もある。

杯蓋

第1期型式から第3期型式の三型式が、口径差によってI・IIの二型式に細分できる。

第1期型式(157~177)

I・II型式があり、内面に返りの付くものはまったく見られない。器高は相対的に高く、天井部が丸味を持ち、口縁部との境に段を持つか、口縁端部が断面逆三角形となる。II型式(177)は口縁部内面に返りの痕跡かと思われる隆起がある。

第2期型式(196~219)

まだ器高は高いが、前型式にあった口縁部付近の段は完全に消滅する。口縁端部は長く下方に垂下するもの、もしくは外反するものが主体となる。口径差でI・II型式がある。

第3期型式(238~254)

器高は相対的に低くなり、天井部は丸味が無くなる。口径的にはI・II型式がある。口縁端部は大きく外反し、さらに開き気味となる。

杯口

高台付きの杯である。杯蓋に対応して3型式に分かれ、さらに口径の違いによってI・IIの二型式に細分できる。I型式の底部外面等には、転用硯にしたと思われるものが多數見られる。

第1期型式(178~195)

器高は相対的に低目で、体部は丸味を持つ。高台は内側気味に付くが特徴的に高いものは見られない。口径差によってI・II(195)型式があり、体部には3形態がある。

第2期型式(220~237)

体部はまだ丸味を持つものが多くを占めるが、若干直線的に開くものも加わる。脚部は前型式より若干外側に付くが、形態的にはそう大きく変わらない。I・II型式がある。体部には2形態あり、両形態が相半ばする。II型式(288~287)は体部の下半が大きく張り出す。

第3期型式(255~275)

体部は丸味が無くなり直線的に聞く形態が主流となり、底部と体部との境は明瞭となる。脚部は太く短く、その位置は前型式と変わらない位置にあるが、体部の張り出しが無くなつた分より外側に付くような形態となる。I・II両型式がある。

長頸壺

第1期型式(276~278)

体部が球形に近いため肩の張りも小さく、体部の一部に叩き目が残る。276は高台の接合部付近に五孔が穿たれ、頸部に2条の、体部上半には2+2条の沈線が巡る。277は口縁部付近に2条と肩部に1条の沈線がある。底部から約3分の1までを手廻しヘラケズリする。高台は持たない。278は体部に叩き目を残す。

第2期型式(279, 280)

体部は算盤玉形に近くなるが、下半に緩やかな丸味を持つ。279の肩部には1条の、280には頸部と肩部に各2条の沈線が巡る。高台はいずれも長く、大きく踏張る。

第3期型式(281~283)

体部下半の丸味が無くなり、より算盤玉形となる。いずれも頸部を欠損するが、281, 283の肩部には1条の沈線が回る。高台は前代に比べると短くなるが、大きく張り出す。

直口壺

小型で口縁部が短く直立するもので、第1期型式から第3期型式までの3型式に分類できる。

第1期型式(291, 292)

非常に小型で体部は楕円形をなし、底部も丸い。体部の最大径はほぼ中央にある。

第2期型式(293, 294)

前型式より大型化し底部も平底となり、体部最大径はやや上方に移る。

第3期型式(295, 296)

体部最大径部はより上方に移る。体部は丸味を失い、底部も明確な平底となる。

短頸壺用蓋

杯Aを逆転させたような形態をする。第1期型式から第3期型式の3型式に分類できる。

第1期型式(297)

天井部と体部との境は明確で、体部は直線的に聞くが口縁部付近に段を持つ。

第2期型式(298)

体部は内擣気味に聞き、口縁端部は内外に若干肥厚する。摘み部分を欠損する。

第3期型式(299)

体部下半を欠損するが、ほぼ直線的に聞くものと思われる。天井部と体部の境は明確。

短頸壺

大型で口縁部が直立するものをいう。

第1期型式(300)

肩部はかなり上方にあり大きく張る。体部は若干内側する。口縁部は短く直立した後小さく外方に肥厚する。肩部に1条の沈線が巡り、体部外面には櫛目を施す。

第2期型式(301)

上方にある肩部は大きく張り、体部はほとんど直線的となる。口縁部は欠損するが、開き気味に立ち上がると思われる。肩部に2条の沈線が巡る。

広口壺

口縁が外反しながら開く形態のもの。

第3期型式(302)

口縁は外反しながら開き、端部は短く直立する。

双耳壺

第2期型式(303)

口縁は短く内側気味に直立し、端部は内傾する。耳部は環状形を呈すると思われる。耳部を欠損するため、四耳壺になる可能性もある。

四耳壺

第2期型式(304)

口縁は比較的長く、わずかに内傾して立ち上がる。端部は段を持って内側に肥厚する。丸味を持った肩部に二対の環状の耳が付く。

水差椎壺(284,285)

体部下半のみ残存する。体部はコップ形をなし、わずかに高台状のものを作り出す。

取手付壺(288)

体部上半を欠損する。取手はその直跡が体部最大径部分にある。大きく聞く高台には、張り付け部附近に5孔が穿たれる。内面には墨漆が付着する。外面には平行叩きが、内面には同心円文を残すため、壺となる可能性もある。飛鳥期に属するものか。

台付壺(287)

第1期型式の小型長頸壺の肩部に穿孔したような形態をする。高台は細いがしっかりと踏張り、肩部に2条の沈線が巡る。

高杯(289,290)

289の杯部は第2期日型式の杯Aで、両端部が短く直立する低脚を付ける。ただ、杯部は体部中央以下を回転ヘラケズリしており、杯Aとは調整が異なる。

鉢A

高台を持たない平底形態の鉢。第2期型式と第3期型式に分類でき、さらに口径差によって大小2型式に細分できる。

第1期型式(309~312)

平底のみ。体部は内側して口縁端部は丸くおさまる。器高は比較的低い。

第2期型式(313)

平底型式には口径の小さい309と大きい311がある。いずれも口縁部が大きく内側しながら内傾し、口縁端部が肥厚する。

鉢B

高台付きの鉢である。2点のみであるため、各時期の特徴はとらえ難い。

藤原Ⅳ期型式(314)

体部はわずかに内側しながら開く。脚部は細目で内面接地する。

平城Ⅰ期型式(315)

体部は直立気味に開き、丸くおさまる。脚部は太く、水平接地する。口縁端部直下と体部の中央に各1条の沈線が巡る。

鉢C(316)

体部は直線的に開き、口縁端部は短く直立した後外方に肥厚して狭い水平面を形成する。体部中央に一对の取手を持つ。

横瓶

第1期と第2期に属するものがある。全形を知り得るもの1点だけである。

第1期型式(318)

口縁は外反しながら開き、端部は小さく斜め外方に肥厚する。体部以下は不明。

第2期型式(317, 319)

317は俵形の体部を持ち、口縁部は欠損するが直立した後外反すると思われる。

平瓶

第2期型式と第3期型式に属するものがある。

第2期型式(320)

器高が高く、体部は丸味を持つ。口縁部は体部に比較して大型で、外反しながら開く。

第3期型式(321, 322)

321は天井部に取手が付く。体部は低く、外反気味に立ち上がる。322も体部のみであるが、直線的で大きく開く。水差し様のものになるかと思われる。

壺

第1期型式から第3期型式までの3型式が想定できる。第2期型式のみが大型しか確認され

ていないが、他の型式には小型もみられる。

第1期型式

口縁部は若干外反しながら開き、口縁端部は短く垂下する。

大型(324.325)：口縁外面は2帯の沈線によって3分割され、そこに324は3条の325は2条の波状文を這らす。324の体部最大径はほぼ中央にあり、325はかなり上方にある。324の体部調整は外面を縱方向に平行叩きし内面には同心円文が残る。325の外面は左傾斜の平行叩きで内面には同心円文をみる。

小型(323)：口縁は短く外反し、端部は狭い内傾面をつくる。体部最大径は中央より上方にあり、底部は丸底。体部外面は縱方向の平行叩きの後横方向の櫛搔きを行い、同心円文を残す。

第2期型式

口縁部は直線的もしくは若干外反しながら開き、端部は内外に肥厚する。

大型(326.327.328)：326.327は口縁部が外反しながら開き、326は端部付近が直立気味に角度を変える。いずれも口縁端部は内側に鋭く肥厚する。326.328は口縁部が直線的に開き、端部が外方に肥厚する。326.327は2帯、327は3帯、326は5帯の沈線によって口縁部を分割し、328以外はそこに3条の波状文を這らす。328は2段に放射状の篦搔き文を施す。327の最大径は中央部より上方にあり、若干長胴となる。328はほぼ中央部にある。いずれも外面は縱方向の平行叩きであり、内面には同心円文をみる。

第3期型式

大型(331.332)：口縁部は外反しながら開き、端部は外方に折り返して肥厚させ、下端がごくわずかに垂下する。口縁外面は2条の沈線によって3分割し、331は上段に1条の波状文を下段には篦搔きの斜放射状文を描く。体部外面は縱方向の平行叩き、内面には同心円文を残す。

小型(329.330)：いずれも口縁部は短く外反し、端部は狭い水平面を形成して内外に肥厚する。体部外面は縱方向の平行叩きの後横方向に櫛搔きを施す。内面には同心円文が残る。

B. 土師器

杯A

高台を伴わないので、第1期型式から第3期型式まで見られる。さらに各型式は頬窓器杯A同様、口径によってI(20cm前後)・II(16cm前後)・III(12cm前後)の3型式に分かれ、体部が底部から緩やかに開くA形態と、境が明確で体部が直線的に開くB形態がある。

第1期型式(1~6.22.23)

口径差によりA形態はIからIII型式に、B形態はI・IIの2型式に細分できる。A形態(1~6)は口縁部がわずかに屈曲する。半数が体部内面に放射状暗文を施す。B形態(22.23)は体部内面に放射状暗文を持つ。

第2期型式(7~15.24.25)

第1期型式同様A・Bの2形態がある。体部は大きく立ち上がり器高が高い。A形態(7~15)にはIからIII型式があるが、B形態(24.25)はII型式のみとなる。体部内面には斜放射状暗文(12は斜格子状暗文)が描かれ、体部外面は横方向のヘラケズギが施される。B形態・24の体部内面には二段の斜放射状暗文がある。体部外面は底部付近を横方向にヘラミガキをする。

第3期型式(16~21.26.27)

A・Bの2形態があるが、いずれも体部の開きが大きいために器高が低い。第2期型式同様A形態はIからIII型式、B形態はII型式のみである。A形態の18は体部内面に斜放射状を持たない。体部外面の横方向のヘラミガキも21だけとなり、他のものは底部との境を横方向にヘラケズギする。B形態27の体部内面には斜放射状暗文と外側には横方向のヘラミガキがあるが、26は外側底部境の横方向のわずかなヘラミガキだけとなる。

杯蓋(30)

天井部から体部にかけてゆるやかに連続するが、著しい丸味は持たない。口縁端部は断面三角形をなして内側に肥厚する。摘みは欠損する。第2期型式に属するものか。

杯B

高台の付く形態であり、第1期型式から第3期型式までの3型式に、各1点ずつある。

第1期型式(28)

体部は大きく屈曲し、底部付近が丸味を持つ。高台はかなり内側に付く。

第2期型式(29)

体部は大きく屈曲し、端部は内側に肥厚する。体部の立ち上がりは大きく、器高が高い。体部内面には二段の斜放射状暗文が見られる。高台は外側に付き、低い。

第3期型式(31)

体部はゆるやかに屈曲し、端部は丸くおさまり、高台は比較的高い。体部内面上段には連弧状暗文が、下段には斜放射状暗文が施される。

皿(32)

器高は低く、天井部から体部へと段を成さずに連続する。口縁端部は断面三角形に小さく内側に肥厚する。外面は天井部を「口」字に、体部を横方向にヘラミガキする。

皿(33~39)

第1期型式から第3期型式がある。いずれも口径に大きな差はなく、1型式である。

第1期型式(33~35)

口縁部の立ち上がりが大きく、端部が外方に肥厚する。体部内面に一段の斜放射状暗文を施す。

第2期型式(36,37)

36の口縁は丸くおさまり、37はわずかに外反する。37の体部内面には斜格子状暗文を施す。

第3期型式(38,39)

体部はわずかに屈曲しながら大きく開く。体部内面は斜放射状暗文と斜格子状暗文が施され、外面は横方向にヘラミガキする。

杯C(40~62)

底部が丸底で、器高の低い椀に近い形態をする。第1期型式から第3期型式の3型式に分かれ。第1期型式・第2期型式とも口径に大きな違いはないII型式(口径約12~14cm前後)のみであるが、第3期型式にはI(15cm前後)・IIの2型式がある。

第1期型式(40~49)

体部はゆるやかに大きく開き、口縁端部は外方に小さく肥厚する(第2形態)。体部外面は横方向のヘラミガキもしくはヘラケズリの後横方向のヘラミガキを行う。

第2期型式(50~55)

体部が丸味を持ち器高が高い。比較的杯Aに近い形態であり、口縁部が大きく屈曲する。体部外面は横方向のヘラケズリの後横方向のヘラミガキか、83,84等のように刷毛目調整を行う。

第3期型式(56~62)

第2期型式に比べると器高が低く、口縁部がわずかに屈曲した後丸くおさまる。体部外面は横方向のヘラミガキが一般的であるが、57,60はヘラケズリのままであり、62は指頭圧する。

椀(63~70)

杯A・Cより器高が深く、底部は丸底である。第1期型式から第3期型式までの3型式に大別できる。基本的な形態的特徴は、杯Cと一致する。

第1期型式(63)

体部は丸味を持たず、口縁端部が外方に肥厚する。体部内面には放射状暗文が見られる。

第2期型式(64~67)

口縁部は屈曲して丸くおわる。体部内面の暗文はない。

第3期型式(68~70)

口縁部の屈曲がなくなり、端部は丸くおさまる。

鉢(71~76)

形態的な特徴は杯A・杯Cと共に通する。第3期型式までの3型式がみられる。

第1期型式(71)

体部は丸味を持ち、口縁端部が外側に小さく肥厚する。体部内面には放射状の暗文がある。

第2期型式(72~74.76)

口縁部は屈曲した後丸くおさまり、体部外面には斜格子状暗文がある。

第3期型式(75)

口縁端部は丸くおさまり、暗文は一切施さない。

深鉢(77.78)

長胴の深鉢形を呈すると思われるが、底部の形態は不明である。

第2期型式(77)

口縁部はごく短く、小さく外反して、丸くおさまる。体部は直線的に底部へと狭くなる。

第3期型式(78)

口縁部は小さく外反して、丸くおさまる。体部は丸味を持って聞く。

取手付鉢(79.80)

体部に一对の取手が付く形態のものである。第1期と第2期の型式がある。

第1期型式(79)

口縁部は若干狭くなり、ゆるやかに外反した後丸くおさまる。体部はかなり丸味を持つと思われ、その最大径付近に棒状で彎曲した取手が付く。

第2期型式(80)

体部は内脣しながら開き、端部はわずかに内傾した後内側に小さく肥厚する。口縁部下に三角形に近い小さな取手が付く。

鍋(81~90)

第1期型式から第3期型式までの3型式に分かれ。口径差によってI(40cm前後)・II(30cm前後)の2型式に細分される。

第1期型式(81.82)

口縁部は外反気味に開き、端部はさらに描み出される。外面の頸部直下に明確な棱を持つ。

第2期型式(83~86)

I型式のみであり、口縁部が外反気味に聞くのは前代と同様であるが、端部の描み出しがゆるくなり、内面に数条の隆起を持つ。頸部直下には段がある。

第3期型式(87~90)

口縁部はほぼ直線的に開き、端部は丸くおさまる。口縁部内面の隆起も頸部直下の段もほとんど消滅する。I型式は87.89、II型式は90.88である。

彫

第1期型式から第3期型式までの3型式に分かれ、各型式は口径の違いにより、I型式(20~26cm前後)・II型式(14~18cm前後)・III型式(12~16cm前後)の3型式に細分できる。

第1期型式(91~106)

頭部直下に段を持つ形態(91~96)と持たない形態(97~106)がある。この2形態は口径の違いにより、段を持つ形態は3型式に、持たない形態は2型式に細分できる。段を持つ形態は短い口縁部が大きく外反し、口縁端部を描み出すことを基本形態とするが、95などのように直線的にわずかに外反するものもある。91がI型式、92~95がII型式、96がIII型式である。段を持たない形態は、口縁端部を描み出しているが口縁部の開きがややゆるやかである。97,98がI型式であり、99~106がII型式に属する。

第2期型式(107~116)

口縁部はゆるやかに外側しながら開き、端部は丸くおさまる。口縁部内面に数条の段が巡ることを特徴とする。頭部直下に段の痕跡を若干残すものもある。全形を知り得るのは116のみである。口径差からI型式は107~113、II型式は114~116となる。

第3期型式(117~127)

口縁部が外側する形態と直線的に伸びるもののが相半ばするが、口縁部は短くなり、内面の棱も無くなる。完形を知り得る126は長脚気味であり、122,127はほぼ球形の体部となる。口縁部が外側する形態が前者に当たり、直線的なものが後者になると思われる。I型式は117,118であり、II型式は119~127である。

高杯

全形をとどめるものはないが、第1期型式から第3期型式に分類できる。

第1期型式(128)

杯部のみであり、体部はほぼ直線的に開き、口縁端部は内側にごくわずかに肥厚する。

第2期型式(129,130)

縁部は径が小さく、ほぼ水平に開く。脚柱部は非常に短く、面取りをする。

第3期型式(131~136)

縁部は脚柱部からゆるやかに大きく広がる。面取りした脚柱部は前代より長くなる。

羽口(137~139)

3点出土している。外面には布等による綻り目があり、先端は溶解した金属が付着する。

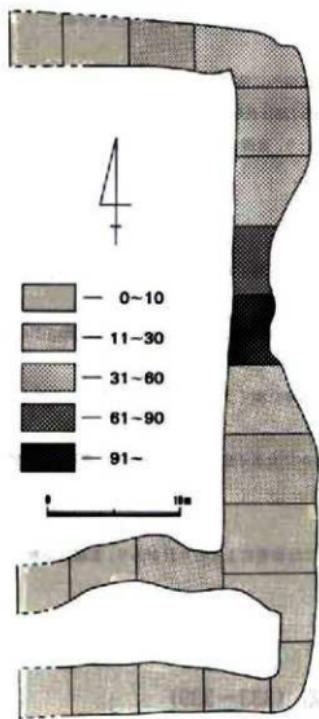
C. SD-5出土土器(333~339)

SD-5内からも古墳時代後半から飛鳥時代にかけての土器が若干出土している。数量的には古

墳時代後半のものが多いようであるが、遺構は漆と有機的な関係にある漆であるため、本来の時期は飛鳥から奈良時代であり、古墳時代のものは混入と考えられる。

D. 濑内出土の古墳時代土器（344～354）

瀬内からは古墳時代後期を中心とした少量の土器が出土しているが、杯蓋の内面に返りの付く型式のものはまったくないため、直接本遺跡につながる時期の土器ではなく、これに先行するSD-4の中に含まれていたものと考えられる。時期的には野村B地点出土の土器と同一ものである。



第11図 濑内土器出土傾向図

土器に関する小結

濠内からも少量の古墳時代の土器が出土しているが、これはSD-4等8世紀初頭の遺構に先行する時期の自然河道内の遺物が流れ込んだものであり、本来の「山垣遺跡」に関連する土器は、古墳時代のものとは若干の時間的隔絶を経て現れる土器群である。

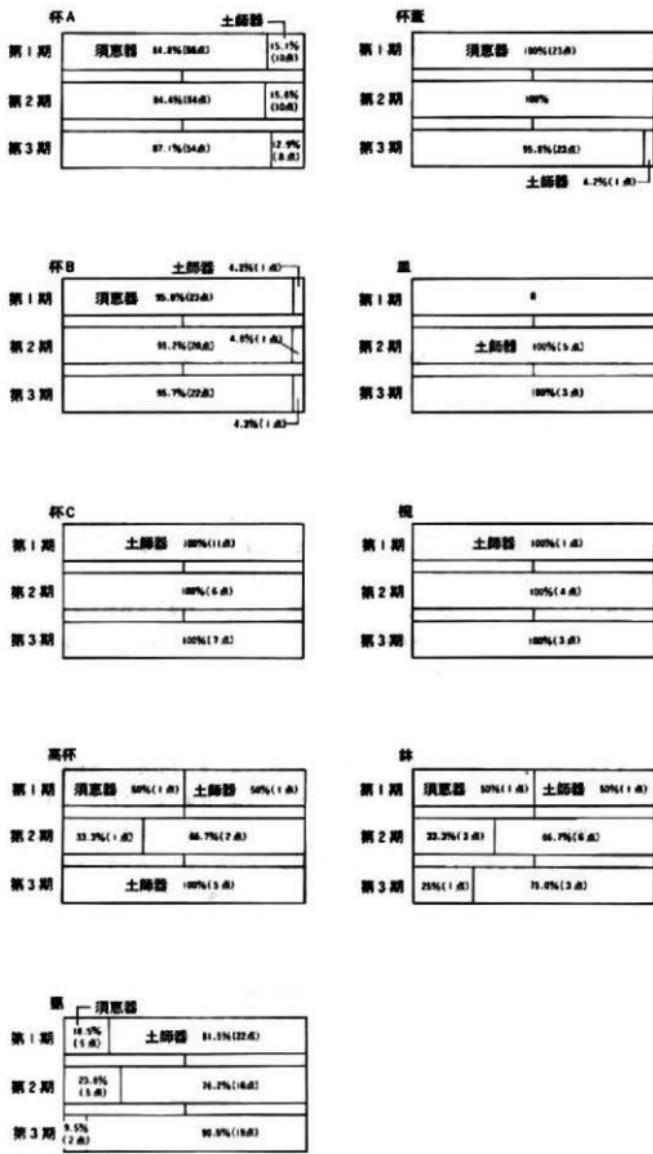
これらの土器群は3型式に大別できる。型式差は時間的な変化を示すものであり、第1期型式→第2期型式→第3期型式と推移するものであり、各期型式はそれぞれ飛鳥IVの後半、平城I前半そして平城I後半に比定できるものと思われる。飛鳥IVに当たる第1期型式には飛鳥IV前半もしくは飛鳥IIIの型式を残すものも若干含めたがそれはごく限られたものである。また第3期型式に属する土器の中には、ごくわずかに平城IIに入るかと思われるものも含めた。

型式別に須恵器・土師器の各器種の百分率を示したものが第12図である。須恵器の場合、3型式を通して杯Aは45%前後、杯Bは20%弱、杯B蓋も20%前後ではほぼ安定しており、これら3器種で80%強を占めている。土師器では杯A・杯Bが全型式を通して20%前後と2%弱である。杯Cは第1期型式で20%強あるものの他の2型式では10%強と少なくなっているが、その分量が加わり、掩が増えて総体としては第1期型式の数値に近いものとなっている。これに対し甕も第1期型式で45%と高く、第2・3期型式で30%前後となっているものの、掩を加えれば40%強の均整の取れた値となる。こうした須恵器・土師器の器種別数値が一定していることが、この遺跡の性格を示す一因となっているように思われる。

器種別にみた須恵器対土師器の割合（第12図）は、杯A・B・杯蓋で3時期を通して須恵器が80%強、約95%、ほぼ100%と大勢を占めているのに対し、杯C・皿・掩では土師器がほぼ100%を占めている。これらの器種では明らかに、須恵器と土師器の器種別分担が行われている。また高杯・鉢では、土師器の比率が第1期型式で50%、第2期型式で66%、第3期型式で前者が100%、後者が75%とだいに土師器の占める割合が高くなっている。

「まとめにかえて」2で詳しく述べるが須恵器の器種別法量は単一ではなく、多数派から外れるものも若干見られる。周辺生産遺跡・同時代の集落遺跡が一法量で統一されている事から考えれば、複数法量を持ち得た理由はこの遺跡の持つ性格によること以外に考えられない。

また40点にものぼる墨書き土器の出土。多数の転用窯、里付着土器。これもまた本遺跡の特性によるものであり、それらの終結が「里長」の墨書きであり、木簡に記された文字と内容である。これらの土器のはほとんどは地元産ながら、春日町内及び周辺地域を含めても生産地は限定できていない。ただ最終型式の時期になると若干であるが、胎土・調整方法の違い等により他地域産と区別できる資料も見られる。また土器存続の期間・遺跡の性格付け・所在地が接近する等の状況から、都衙級の規模を持ち、「春日郷家」の墨書き土器を出土している「春日・七日市遺跡」の整理・分析が大いに注目される所である。



第12圖 器種別須恵器對土師器占有比率図

5. 木 器

器種別分類は、奈良国立文化財研究所編『近畿地方出土木器集成図録』—古代編一に従った。

A. 容 器

曲物（曲物、御敷）、削物（盤、樽、鉢）に大きく分類できる。

曲物蓋（2～12）

天井板（もしくは側板）の口径によって、I（25cm前後）、II（18cm前後）、III（16cm前後）に大別でき、さらに器高によって、1（6cm前後）、2（4cm前後）、3（3cm前後）に細分できる。

I型式（2）：天井板のみ。側板結束孔は四箇所と思われる。表面が著しく剥離する。
II-1型式（3、4）：結束孔は四箇所である。3は桿皮によって側板を先端ともう一箇所で閉束し、4は先端のみで結束する。

II-2型式（5）：結束孔の数は不明。側板は先端のみで閉束する。

II-3型式（6～8）：側板の結束孔は8が4箇所、7が5箇所であり、9が6箇所と推定される。側板はいずれも先端のみの閉束である。

III-1型式（10）：結束孔は4箇所である。側板を2箇所で閉束する。

III-2型式（11）：側板付近が大きく剥脱する。結束孔は5箇所。側板の閉束法は不明である。

III-3型式（12）：遺存状態は良好。結束孔は4箇所である。側板の閉束法は不明である。

曲物身（13～21）

曲物蓋の口径に対応して、I（26cm前後）、II（19cm前後）、III（17cm前後）に大別できると思われるが、I型式は見当たらない。さらに器高によって、1（4.5cm前後）、2（2.5cm前後）に細分できる。

II-1型式（16）：側板固定本釘は7箇所で、側板は先端のみで閉束する。内面に切痕あり。

III-2型式（17～21）：5箇所又は6箇所の本釘で側板を固定する。側板は先端のみの閉束。21は底板であり片面の切痕面に墨漆の痕跡が見られる。唯一の極目取りの材を用いる。

13、14、15は中央に一孔を有し、惟（蒸器）等の底板と考えられる。

御敷（22）

平面形は小判形を呈する。桿皮で側板を閉束すると思われる。片面に切痕がある。

削物盤

口径差によって、I（23cm前後）、II（22cm前後）、III（20cm前後）、IV（18cm前後）の4型式に分かれ。さらに各型式は口縁部の形態の違いにより、a（体部が大きく立ち上がり、端部が外方に小さく肥厚する）、b（体部が大きく立ち上がる）、c（体部が開きながら立ち上がる）の3形態に細分できる。

I型式

b、c形式が見られ、a形式は見られない。

I-b型式（28）：28は口縁端部が外傾する。

I-C 形態(29)：口縁端部は丸くおさまり、内面に切痕を有する。

II型式(a, c 形態が見当たらない)

II-b 型式(31, 32)：いずれも口縁部は丸くおさまる。32.31には内面に切痕が残る。

III型式(a 形態が見当たらない)

III-b 形態(32)：32は口縁端部が狭い水平面をなす。

III-c 形態(33)：体部は極端に薄くなり、外反気味に開く。

IV型式(a, c 形態は見られない)

IV-b 型式(34)：口縁端部は丸くおさまる。内面にロクロ痕を明確に残す。

刺物鉢(26)

26の一点のみである。歪みが大きく、遺存も著しく悪い。体部は外反しながら立ち上がる。

荒く形取りしただけの未製品である。

刺物槽(24, 27)

24は平面が長方形をする。四壁とも底部から外反した後垂直に立ち上がり、水平な口縁部に続く。内壁はいずれも外反して立ち上がる。27は取手部分であり、口縁端部から若干下がった所から水平に棒状の取手が作り出される。体部等の形態は不明である。

刺物ロート状木器(25)

体部は平面が円形で浅い鉢形をし、中央部を穿孔する。狭い水平な口縁端部から短い取手を作り出す。

橋底板(23)

曲物の底板よりかなり厚いため、橋の底板と考える。側面は若干内傾し、そこに6箇所の木釘が打たれる。上面には墨漆が塗られ、切痕も若干みられる。

B. 農耕具

木鍬(櫛の子)・横杵・縱杵・鏟・鋤・柄等に分類できる。

木鍬(櫛の子)(58~74)

形態的特徴から3型式に大別できる。

第1型式(58~62)：かつて「丹波」型と呼ばれていた型式であり、「こけし」形様に最小径部が片寄る。

第2型式：最小径部がほぼ中央にくる型式であるが、若干の形態差から4型式に細分できる。
a型式(63~69)：最小径部が長く、双頭部へとゆるやかに移行する。b型式(70, 71)：双頭部から最小径部への切り込みが「く」の字状に直線的である。c型式(72)：最小径部が長く、双頭部へと垂直に上がり、列車の動輪形を呈する。d型式(73)：双頭部は扁平で頭部の区別が明確でなく、雄ネクタイ形を呈する。

第3型式(74)：円柱材の半裁形であり、中央の側辺際に長方形の穿孔を持つ。

横杵(39~47)

形態上2型式に分類できる。

第1型式：棒状の取手部が垂直に塊をなして体部へ移る形態であるが、体部の長さの違いに

より3型式に細分できる。a型式(38)は体部の長さが42cm、b型式(39,40)は20~24cm前後、c型式(41,42)は12cm前後である。42は未使用。

第2型式：取手から体部へとゆるやかに移行する形態であり、取手が短い。体部の長さの違いにより、3型式に細分できる。a型式(44,45)は体部の長さが20cm前後、b型式(43)は長さ10cmで扁平、c形態(46,47)は17cm前後。46は未製品である。

鍔(48~53)

握手部分から体部への移行は、種の子の第2形態に類似した形態になると思われる。体部の長さの違いにより、3型式に分類できるが、そのほとんどが未使用である。

第1型式(50~53)：体部長40cm前後。

第2型式(48)：体部長30cm、唯一の完形品である。

第3型式(49)：体部長20cm、握手部分を欠損する。

鍔(57)

取手部分は未穿孔で、体部の先端側は一段狭くなり、鉄製の歛先を装着すると思われる。

柄状木器(55,56,75~80)

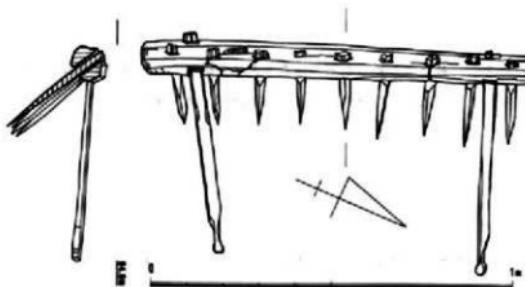
55,79,80は同形態の柄と思われる。全体は「へ」の字形をし、基部側は断面長方形、取手側は橢円形を呈する。桿曲部分の外側は短く平らになり、55は内外から1箇所のホゾ切りがある。他の2点は2箇所のホゾ穴が穿孔され、80には内部に組合せたホゾ部分が残存する。

56は基部側がゆるやかに弯曲し、断面が橢円形を呈する。基部の先端は刃部を設置するため二又に割れる。取手部の先端は斜めで、一方に肥厚する。長柄の鍔の柄と思われる。

75~78は取手部の先端のみである。75は56と同様の柄になると思われる。他のものは滑り止め部分の形態が異なっている。76は垂直に、77は「へ」の字に切り込まれ、78は山形に作られる。

馬鍔(35~1~35~4)

長さ約108.5cmの八角柱に面取りした台木の相対する2面を貫くように、33cmの9本の歛部を設定する。歛部は基部を出たあたりで両側から削り込み先端が尖り、頭部側は環状に穿孔



第15図 馬鍔出土状況図

しそこに木釘を打って基部に固定する。引手部分は両端の1本目と2本目の間に、首部に対して鋭角になるように設置されている。ただ柄の装着は見られない。

えぶり(37)

平面形は梢円形をし、その一方の長辺に山形の施部を設ける。着柄用の孔は長方形で垂直に穿孔される。

獣(36)

頭部から肩部へと大きく広がり、先端部へ向かって再び狭まる。先端部は欠損のため不明。頸部と肩部分に着柄用の穿孔がある。

C. 祭祀関係

蓋車(82)

82は両側から切り込み頭部を作るが、頭部は欠損する。全体は長く、先端は両側から削り込んで尖る。84は頭部を山形とした頭部のみである。83は長方形材の両端を、同じ側から斜めに切り取って台形とする。

人形(85)

頭部の明確な区別はない。腕部は両側辺を下から削り掛け、脚部は又部分を「匁」形を作り出すかいずれも欠損する。表面の調整は粗く、顔の表現はない。

鳥形(86)

平らな頭部は先端に向かって細くなる。ゆるやかに内擣した頭部以下は欠損する。頭部には目と思われる2孔が穿たれる。他の用途のものになる可能性もある。

馬形(87)

長方形体の裸馬であり、首・背中・足は側辺を削り込んで表現する。口は小さく削り込まれ、目は両面に2本の刀子彫きで表現する。

D. 楽器

琴(81)

全体は長方形をし、糸をまとめる基部側は若干丸味を持つ。糸を掛けた先端側には4本の突起があり、基部は溝状に彫られた後穿孔される。断面形は薄い盾鉢形。

E. 遊戯具

羽子板(88)

取手部は短く、ゆるやかに外反しながら開いて長方形の体部に統く。

独楽(89)

円柱材の上端を水平にし、中央に小さな突起を作る。下端は逆三角錐状と思われる。

F. 履物

下駄(90)

平面形は隅円長方形をする。表面には使用による足形の痕跡が明確に残る。2本の曲部は左側への摩減が著しい。鼻緒孔が右に寄っており、左足用である。

G. 工具

車状木器(91~98・101~103)

頭部は面取りし、先端は95の様に2面方向から削って尖がらす形態と、その他のように周囲から削り込む形態がある。101は途中で細くなるようである。

木針(99,100,106,107)

99,100は頭部側に孔を穿ち、106は片側から切り込みを入れ、107は円形の頭部を作り出す形態である。

籠(110)

柄部と体部との長さは等しく、体部先端は円く薄く仕上げる。

刷毛(109)

刷毛等の柄の先端になると思われる。丸い頭部に向かって広くなり、先端部に孔を穿つ。

H. 食事具

箸(104,105)

104は頭部が若干失がる。105は一端を欠損するため上下が不明。

I. 装飾用木器

飾板(1)

長方形を呈する平面形をしていたと思われるが、中央部分が欠落し両端部のみが残存する。表面を四分割し、表面には外区を設け、内区は4分割するように木葉文状の刻文が描かれている。凸面には墨の痕跡が若干見られるため、印章等の可能性がある。

J. 文房具

木印(111)

取手・体部とも断面は方形。印面には「□」の中に「#」の刻印を施す。

K. 雜具

自在(108)

平面形は長方形、断面は台形を呈する。丸味を持った両端付近に小さい2孔を穿つ。

火鍵臼(112,113)

112は長方体材の側面に2箇所、上面に3箇所、裏面に1箇所の使用痕が遺存するが、一方が欠損する。113は両端を欠損するが、側面に1箇所の使用痕があり、火落溝も1箇所ある。

L. 紡織具

紡輪(115,116)

115は厚さも均一で、中央に大き目の1孔を穿つ。116も同様の形態になると思われる。

M. 部材

118は角材の両端に貫通するホゾ穴があり、その間に不定間隔で9箇所の小さなホゾ穴が穿たれる。119は両端にホゾを設けた細い材である。120は片端を欠損するが、端には組合せ用のホゾがあり、その中に4箇所の孔が穿たれる。123は薄い材であるが、両端付近に小さな孔が開き、その間に4孔が穿たれる。121-1は中央に方形の穴を持つ薄い方形体である。この方形の穴から一辺の中央に向かって外下がりの溝があり、その先端の両側には方形の穴とをつなぐごく小さな孔が穿たれる。この溝の抜ける反対側の側面の中程には木釘が打たれ、上邊から木釘まで溝が彫られる。121-2は両側からの切り込みによって小さな頭部を作り、端近くに穿孔を行う。孔間の中央部分が使用により摩滅しているのは、121-1の中央孔の中に装着されていたためである。

N. 用途不明具

122は両面から削り先端を尖がらせて籠状とする。124は両端が細くなつて欠損するが、125,126は片側だけとなる。127,128は3面が造切れの菱形平面を呈する角柱である。129は断面円形を呈するが、下端にホゾ状の作り出しを持つ。130は断面円形で自然面を残し、頭部は丸く先端部は尖がる。131は薄い削り材で先端部が著しく細く削り出される。132は細長く長辺の一辺が薄く、低い山形状の突起を持つ。133,134は円形の板で、蓋になる可能性もあり。135も円形であるがかなり分厚く、中央に大きな穿孔がされる。

O. 編み物様蔓製品

蔓を径約40cmの円形状に絡めたもの。一本の蔓を使用したものか、複数によるものかは不明である。同様のものが5点出土している。

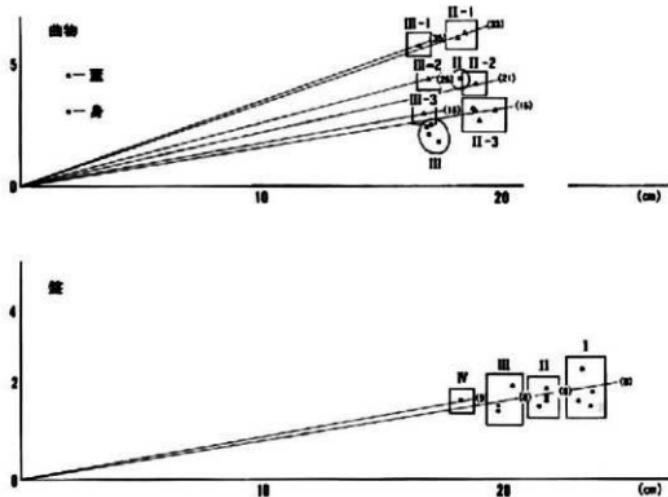
木器に関する小結

塗内埋土が粘質土であったため、木器の遺存状態が良好なものが多い。こうした状態が幸いして、木簡の文字を読み取ることも可能となった。木簡を初めとして官衙的性格を示す木印等がある一方で、容器・農工具から日常生活に使用する雑具に至るまで多種多岐にわたる種類の木器が出土している。

木器に関してまず注目される点は、農具類に未製品もしくは未使用と思われるものが多い事である。特に杵類は、約半数近くがこうした状態で出土している。漆の中に水没していたものであり、「内郭」内もしくは付近で製作されたものと思われる。ただ、その一方でかなり使い込まれた製品もあり、それらが漆内で共存している状況、および、そうなった経緯にこの遺跡の性格が示されているようである。

第2には、容器類に関してである。曲物は土器ほど明確ではないにしろ、口径差・器高差による細分が可能である。蓋類では口径によって3型式に、器高によっても3型式に細分できる。I型式は底板のみの1点だけであるが、II・III型式では1型式の指標が33と35、2型式では21と26、3型式では16と18のように2型式が若干離れるものの、ほぼ近い値を示し、いずれもIII型式がII型式を上回っている。身部は器高の明確な資料が少ないが、蓋部のII-2型式とIII-3型式に対応するものが見られる。

盤は口径差によってIからIVの4型式に細分できるが、顕著な器高差は見られないため、径口指標は各型式ともほとんど同一である。さらに底部外面に3本の爪跡を残すものも見られる



第14図 木製容器類指標図

事、平面形が均整の取れた円形をしている事などから、その制作に当たりロクロを使用して削られたものと思われる。曲物の時期的な編年の基準は抽出できないが、盤はa→b→cの順に配列できるものと考える。

馬頭は、台木・歯・引手が組合って完形の状態で出土したが、他の遺跡例のように取手を持った形態のものではないため、使用方法が若干異なるものと思われる。

木簡・円面鏡等を出土することから考えれば、非常に官衛的な色彩の強い道路と考えられるが、特に木器だけに関してみれば、容器類が比較的整った状態にはあることは官衛的であるものの、農工具類からみれば一般的な集落道路と何ら変わるものがない。表面上は官衛的な顔をしているものの、その実一般的な集落と変わらない要因も包含している。このまったく異なる性格が表裏一体となっているところに、本道路の本質が伺えるようである。

6. 金属器

A. 鎏金具様金属器

大柄の透文が施された鎔金具様の金属板である。地金は銅と思われ、表面に若干の塗金が残る。両端を欠損する。

7. 石 器

A. 磚石(1, 2)

1は両面および側面も使用したものであり、使用痕が若干残る。完形ではない。砂岩系の石材を利用する。2は横断面が楔形をし、その先端側から打点を加えて半載した安産岩系の石材を利用する。中央部分が利用されており、多くの使用痕を残す。

B. 石斧

扁平石斧(3)

側辺が若干内擣しながら頭部へと向かって狭くなる。表面には多くの調整剝離痕が残り、刃部は刃こぼれをする。全体が磨かれており、研磨痕が残る。

環状石斧(4)

穿孔は両側からされるが、片側からが主体をなす。刃部の刃こぼれが著しい。

C. 投弾(5)

橢円形をし、使用痕と思われるものが3箇所見られる。

D. 紡垂車(6)

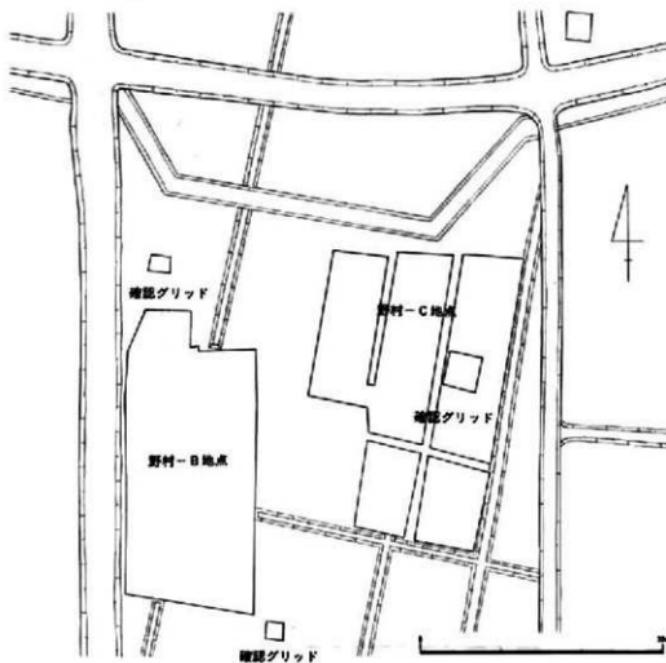
上面が丸味を持って高くなり、下面側から主に穿孔する。

第IV章 野村B・C地点遺跡

1. 調査の概要

両遺跡は幹線農道を挟んで山垣道路の南側に位置する。確認調査の結果に従い2地点（第15図）の遺跡とした。当初「山垣遺跡」を「野村A地点遺跡」としていたが、前記したような理由により「山垣遺跡」と改称したものの、この2遺跡は当初の呼称を踏襲したため、西側を野村B地点遺跡、東側を野村C地点遺跡とした。

B地点（第16図）では確認調査で溝状の遺構が確認されたため、南北約38m、東西約15mの範囲に全面調査を実施した。遺構は耕土直下の灰黄色土を遺構面として検出でき、主な遺構は



第15図 野村B・C地点遺跡位置図

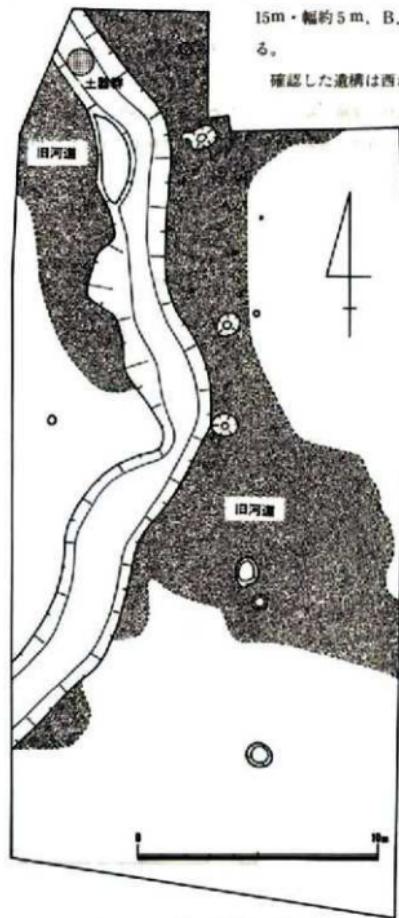
幅約2.0m前後の溝と南北に並ぶ1条のピット列のみである。ただ、このピット列の埋土にはごく新しい時期の旧耕土が混じっているため、現在の稲垣等の柱穴と考えられる。溝状構造は調査区の南西壁から出現し、小さく蛇行しながら南から北に流れて北西隅で調査区の西外に伸びていく。この道構は古い時期の旧河道の中を沿うように流れているため、自然の流路と思われる。溝内からは古墳時代後期の須恵器杯が集中して出土した（第17図）。

C地点は当初全面調査を予定していたが、しっかりととした道構面がなく河道内であることが判明したため、調査区内のセクションをそのまま残し、5本のトレンチ調査とした。北東がAトレンチ・南東がBトレンチで、北西をEトレンチとした。A、C、Eの各トレンチが長さ約

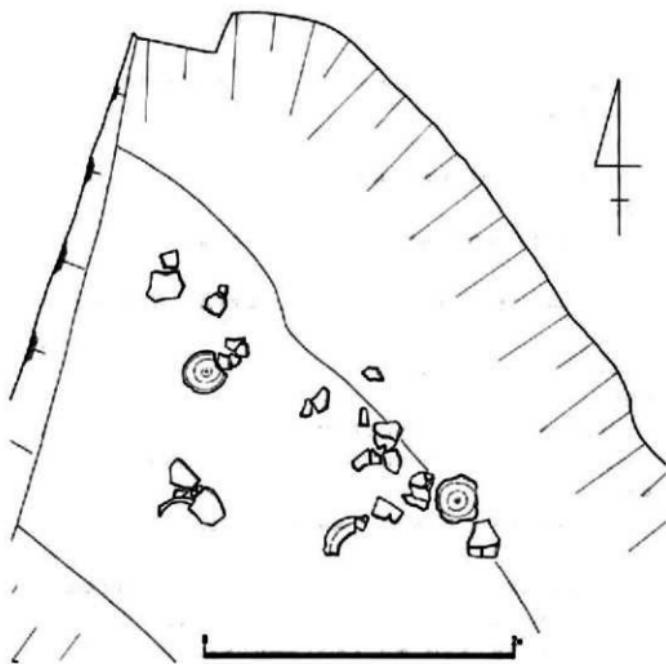
15m・幅約5m、B、D両トレンチが長さ約10mと短くなる。

確認した道構は西から東に流れる自然流路であり、そのまま北東に流れ竹田川に注いだと思われる。自然流路の北肩はEトレンチ西壁の南辺寄りから始まり、Aトレンチ東壁の北寄りに入る。南肩はDトレンチの西壁中央から発し、Aトレンチ東壁の南寄へと至る。この自然流路内からは弥生時代後期から古墳時代初期の土器と少量の古墳時代後期の須恵器が出土したが、特にAトレンチの流路北肩部付近で古墳時代初期の土師器がまとまって確認された。

またこの自然流路に先行する浅い旧河道があり、Eトレンチの北西部から始まって、Aトレンチ東壁の中央部に向かって流れている。河道底部には樹木葉・自然木など有機物の堆積層が見られる。弥生時代中期から後期の土器が少量出土した。



第18図 野村日地点遺跡旧地形図



第17図 野村B地点溝内土器出土状況図

2. B地点出土の土器

溝状遺構内より、古墳時代後期の須恵器が少量出土している。

A. 土師器

図(1～3)

いずれも口縁部が外反するもので、端部は丸くおさめている。口径が大きい壺Aと、小さな壺Bの2種が存在する。壺Aはその特徴から古墳時代中期末～後期の所産と考えられ、壺Bは平底であることから弥生時代後期～古墳時代前期のものである。壺Aのうち1は口縁部が長く外反度がゆるやかなもので、2は頸部から大きく外反する口縁部を持つものである。体部以下は欠失している。どちらも溝から出土したものである。壺B 3の口縁部は短く外反し、体部

はあまり張らない。底部は大きく、径4.6cmを計る。

甌(4)

底部は径約7cmの孔、端部から約1cm上に4方向に径6mmの円形孔を穿つものである。底部付近のみの破片であるため、全体は窺い得ない。古墳時代中期末～後期の所産と考えられる。

盞(5)

つまみ部は中実で上端は瘤み、上下を中央で接合している。天井部はやや内擣する。端部はやや丸みのある面をもつ。

高杯(6)

杯部は欠失している。中実円柱部で、瘤部は低く、あまり広がらない。

小型壺(7)

小型丸底の壺である。口縁部は外折するが、やや内擣ぎである。

小型鉢(8)

ミニチュアの鉢で、溝出土である。口縁部は指揮さえで器厚を減じ、若干外反させている。

B. 須恵器

高杯盤

355：口径は大きく、天井も若干扁平になる。棱は沈線状となる。口縁は開き気味となる。

356：天井は高く丸く棱は明確で、口径も小さい。口縁端部は鋭く外反する。

杯盤

357：口径は若干小型化し、口縁部は短く、端部は丸くおさまる。

杯身

359：立ち上がりは高く口縁端部に段を持つ。口径は若干大きく、底部も扁平となる。

360：口径は大きく、器高も低い。立ち上がりは短く大きく内傾する。

358の底部は大きな平底であるが、他はごく小さく未調整のまま。

杯G

361：口縁部は内擣しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。

362：底部は平底。口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさまる。

3. C地点出土の土器

弥生時代後期～古墳時代前期の所産と考えられる壺・甌・高杯などが出土している。

A. 土師器

甌(9～12)

複合口縁のものと小型のものがある。複合口縁のうち、大きく屈曲するもの(9)と屈曲度が小さいもの(10,11)がある。小型のものは丸底で、外面に記号文を描いている。

甌(13～16,29～23)

口縁部の形状により、複合口縁のもの(13,14,32)と外反するもの(15,29,30)、その中間形態のもの(31)と内擣するもの(16)がある。13は口縁端面に擬問線文を描く。16は布留式土器に近

い形態を示す。複合口縁のものは山陰系に多い器形で、丹波にも認められる。

鉢(17.18)

複合口縁の大型の(17)と単純に外反する(18)がある。

高杯(19~21.26)

高杯のうち杯部は1点(19)で、他は脚柱部である。杯部の屈曲は緩やかで、後線は鈍い。内面の粗曲部も同様である。脚柱部のうち20はしっかりした太い長いもので、脚部端はやや上方にひきのばしており、丁寧なつくりである。21は布留式によく認められる屈曲した脚部をもつ。26は上下2個一対の透孔を4方向に穿っており、脚部に大きく聞くものである。

器台(22.23.27)

複合口縁の2種が認められる。(28)の天井部中央には形4mmの孔を穿っている。

B. 古墳時代須恵器

杯身

366：立ち上がりは外擣氣味で短い。口径も小さく、器高も低い。

杯G

363.364：口縁部は外擣氣味に開き、端部は丸くおさまる。363は指數が低く。364は高い。

365：口縁部は内擣氣味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。

まとめにかえて

1. 遺構に関して

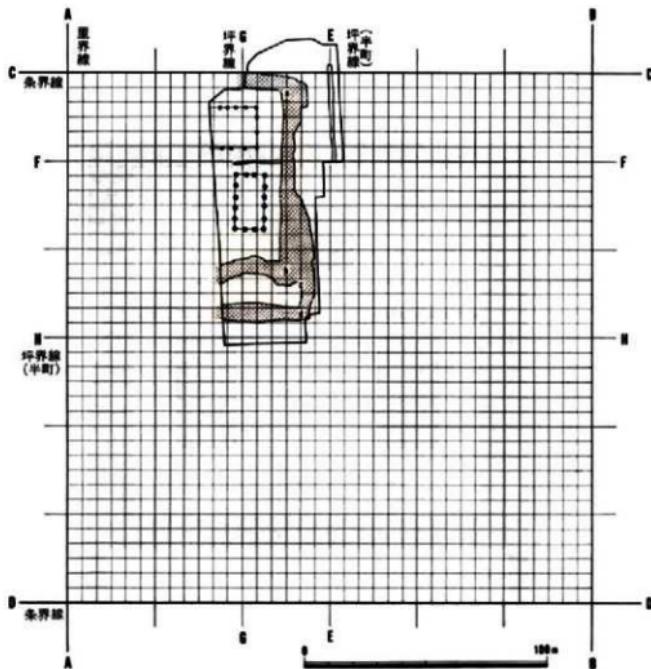
今回の発掘調査で検出した遺構は、「コ」の字形に曲がる溝とその内部施設等であるが、その溝・建物址の方向は、現水田の地割りの方向にはほぼ近いものである。山垣道路周辺の七日市・野村・棚原地域の圃場整備以前の地割りに条里制地割りを復元したものが図版2である。特に山垣道路の調査区の含まれる1町分を示したのが第18図となる。



第18図 字山垣地域周辺丈量図

この第18図を見ると、SD-0の北界付近が想定界線(Cライン)の位置にあり、SD-3の南界が半町に当たるEラインより1坪北で東西に走る。さらにSD-5が里間の半町を示すEラインに重複している。かつての地形を見ても、SD-5の東には竹田川によって形成された小さな段丘崖があり、確認調査によっても調査区の南北の範囲を含めて造構は確認できなかったことは、自ずと塗り固まれた道路の範囲を、約半町四方=1町の北西側約4分の1の範囲として限定することができる。ただ、かつての水田地割り図では、西側の里界線になっているAラインには幹線の水路があり、圃場整備後もその痕跡はクロップ・マップとして見ることができるが、SD-2とSD-3の西延長部分のクロップ・マップが、この推定里界線のクロップ・マップラインを越えてかなり西へ伸びている事から、南北約半町、東西はAライン=推定里界線を中心として約1町の東西に長い領域をその範囲としていた可能性も若干残されている。ただ、東西方向を取る流によって固まれた道路で、2対1の東西長の古域形態は非常に稀であり、平面プランからも均整が取れないため、やはり半町四方の方形プランを考える方がより妥当と思われる。

塗の各溝の本来の形状を復元しながらその幅を見ると、SD-0・SD-2・構梁部分さらにSD-3の各溝の幅は約 $\frac{1}{6}$ 坪分となる。SD-1は他の部分と異なりその幅が約 $\frac{1}{6}$ 坪と広くなるが、SD-2



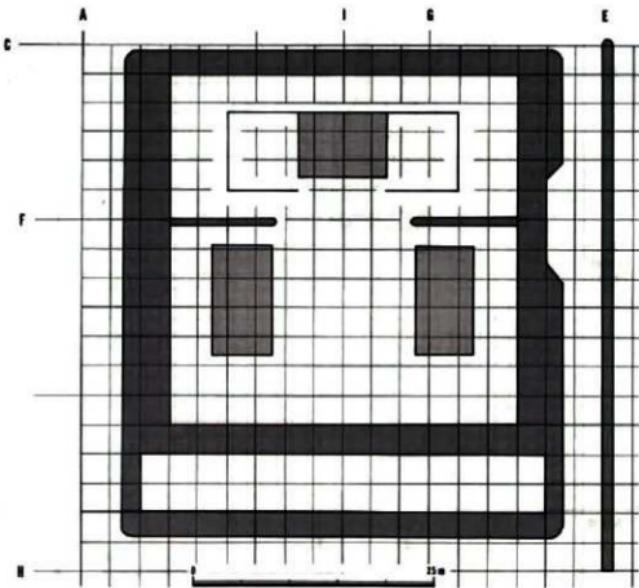
第19図 調査区内坪割り想定図

とSD-3をつなぐ東溝は $\frac{1}{4}$ 坪と狭いものとなる。

濠の配置位置とその規模を見ると、SD-1内側の南北の各コーナー（a点とb点）は、a点がCラインから $\frac{1}{4}$ 坪南でさらに東に $\frac{1}{4}$ 坪の位置にあり、d点はa点から南に2坪離れる。またSD-2とSD-3を結ぶ南北溝の内刷（c-dライン）はa-bラインから東に $\frac{1}{4}$ 坪ずれ、c-d間の幅は約 $\frac{1}{4}$ 坪となる。つまり、 $\frac{1}{4}$ 坪から $\frac{1}{4}$ 坪の幅の溝によって囲まれた、南北2坪・東西現長 $\frac{1}{4}$ 坪の区画の南側に、南北幅 $\frac{1}{4}$ 坪・東西現長 $\frac{1}{4}$ 坪の前庭域が付属する形態となる。

SD-1に作り出される橋梁部付近は大きく後世の擾乱を受けて削平されているが、本来は東溝が $\frac{1}{4}$ 坪の幅を持ってCラインから $\frac{1}{4}$ 坪まで南に伸び、そこから屈曲して $\frac{1}{4}$ 坪幅を狭めて右下がった所で、c-dラインの延長線上に当たるEから $\frac{1}{4}$ 坪分西のラインに沿って $\frac{1}{4}$ 坪分南下した後、北側と同じ形態を取って再びSD-1の東刷に取り付いていたものと想像できる。ちなみにSD-1の東刷は、半町線に相当するSD-5から $\frac{1}{4}$ 坪隔だる。

内郭南の前庭域には西端に若干の遺構が見られるが、基本的にはほとんど遺構はないものと思われる。北の内郭は布堀状のSD-6によって北区を南北 $\frac{1}{4}$ 坪、南区を $\frac{1}{4}$ 坪分に二分される。この地点はSD-1の橋梁部の南北長を二分割する位置にもなる。この不均等に分割された内郭の北区には東西に長い槽窓があり、その東の柱列がGラインから $\frac{1}{4}$ 坪東の、南がFラインから $\frac{1}{4}$ 坪北のラインに沿う。調査区の西端には南北3間分の柱列があり、槽列北柱列の西端の柱穴がこの南北柱列の北端の柱穴と切り合う関係にある。南区には梁間3間・桁行5間の南北棟



第20図 造構復元試案

掘立柱建物址が1棟あり、その北塀柱列がFラインから $\frac{1}{4}$ 坪南にあり、櫛開い・掘立柱建物址とともにSD-6から $\frac{1}{4}$ 坪の間隔を置く。掘立柱建物址の桁行柱列は西がGラインから $\frac{1}{2}$ 坪西にあり、東が $\frac{1}{4}$ 坪東にある。この西桁行柱列はSD-6の西端（終息地点）と一致する。

この様に、各造構が条里制地割りの基準に従って計画的に、かなり整然と配されている。仮にこの状態で4分の1町になるIラインを中心として反転させ、東西約 $\frac{1}{4}$ 坪の規模に展開したものが第20回の復元試案図である。この造構配置は、佐渡の国府道路のものに類似した形態であるが、より広義に考えると国府・郡等地方官衙道路の政府の造構配置に基本的には類似している。正庁に相当する東西棟建物址に関しては、前記した調査区西辺の3間分の南北柱列が正庁建物址の東塀柱列に相当し、Iラインを中心に反転すれば桁行が4間程度の東西棟建物址を想定することができる。北柱列から東西に伸びた櫛列が「コ」の字型に展開し、建物址前面は門状に開いていたとも考えられる。

この様に地方官衙道路の性格を念頭に置いて考えると、多くがそうである様に南面が道路の正面に当たる。ただこの道路の場合地形的に南側が高いために、正庁城（内郭）を見下げる格好となる。このため正庁城の陥絶性を高め奥域を出すために、SD-2の南にSD-3を設けたとも考えられる。さらに立地的要因から北に下がる地形であるため、正庁城の北辺に合わせて城内を水平面にすると一層南城外との高低差が大きくなるため、SD-3を設けて階段状とする事でその矛盾を解決しようとした結果とも言える。SD-3から少量の土器片しか出土していないのは、SD-3が本来的に濠として意識されておらず、内郭の中心があくまでもSD-0.1.2によって囲まれる範囲であった事によるためであろう。またSD-1の突出部であるが、橋が架かっていたとするならば、正庁城への東からの出入り口になる可能性が高い。南正面が政治的・形式的な「門」とするならば、この東門はその東に竹田川を控えているために、水運を利用した物資がここから運び込まれた経済的な「門」になる。本道路の場合この「門」の役割がかなり重要な要素であったようにも思われる。東側=竹田川が重要であるがために、溝の幅にしても北と南が $\frac{1}{4}$ 坪であるのに対して、この東の幅が意識的に $\frac{1}{4}$ 坪広く設計されたものと思われる。

以上のように造構の状況から見て、本道路が一般的な地方集落道路の類に含まれるものではなく、非常に中央を強く意識した地方官衙的な性格を持った道路であると言える。

2. 土器に関して

須恵器については、生産遺跡の調査がまったく行われていないため、塗内出土の土器を机上の操作によって形式分類および編年した。

型式の設定は形態的な変化を追い易い須恵器杯蓋を基本器種として3型式を設けたが、他の器種も概ねこの設定に沿うものであるため、本遺跡出土の土器を第1期型式から第3期型式の3型式に分類した。ここで「期」を用いたのは、各型式が時間的変化を示すものであり、第1期型式→第2期型式→第3期型式という変化をする事を示すものである。

先ず須恵器に関して見てみたい。杯蓋に関しては「丹波周山窯址」の型式変化にはば沿うものであるが、他の器種についてはほとんど独自の形態的変化を辿っている。

第1期型式の杯蓋は天井部が高く、口縁部に大きな屈曲を持つ。口縁端部は多くが断面三角形であり、少数内傾して長く伸びるものがある。第2期型式になると天井部は若干低くなり、丸味もなくなる。口縁部の屈曲がなくなるのが大きな変化であり、口縁端部もまっすぐ下方に長く伸びる。第3期型式では口縁端部が大きく外側に、さらには外反するものも見られる。

蓋とセットになる杯Bの第1期型式は高台からの体部の張り出しが大きく、高台が内付きのように見える。さらに底体部境を高い位置まで回転ヘラケズリする。第2期型式は体部の張り出しが小さくなるものの丸味を持ち、底体部境を回転ヘラケズリする。第3期型式になると体部下半の丸味もなくなり、直線的に開き、器高も若干低いものが現れる。

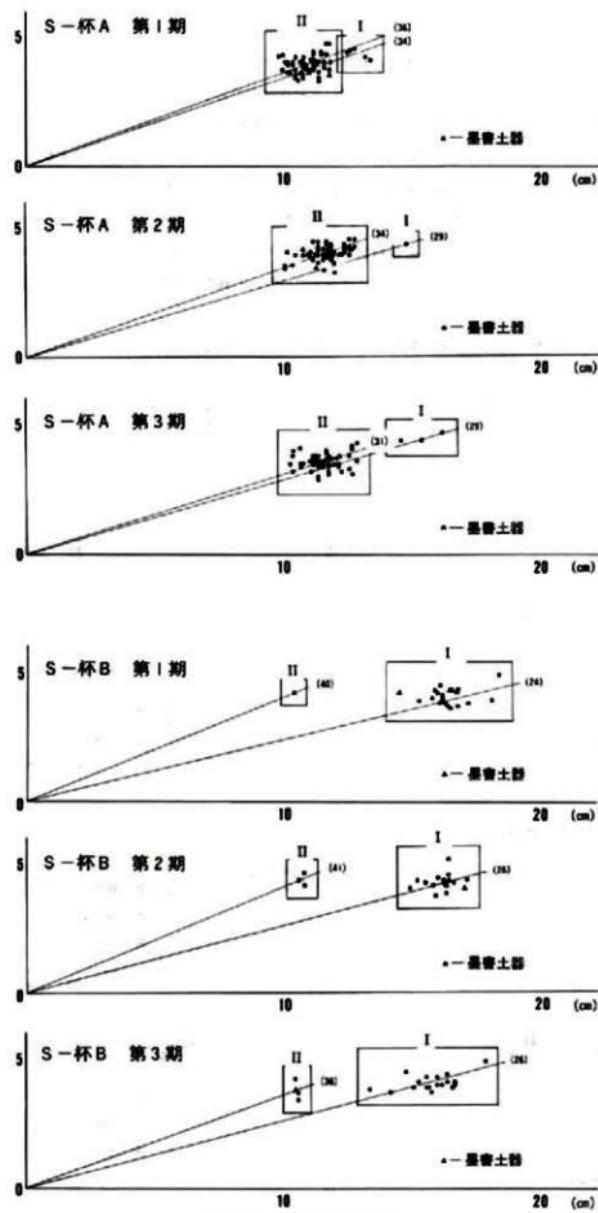
口径によって細分すると、各期型式とも14~18cm前後のI型式と11cm前後のII型式に細分できるが、II型式は各期型式とも3点までであり、その主体はあくまでI型式である。

第1期型式の杯Aは器高が高く、体部が丸味を持つ。杯Hの形態または杯Gの形態から次第に器高が低くなり、杯Aの形態に移行していく過渡的な形態にあたっているものと思われる。前代の杯Gの形態的特徴を継承するものはごくわずかであり、大勢としてはすでに杯Aの粗形となっている。ただ、杯Hの継続形態としたものが異質であり、むしろ偏的形態としたほうが良いかと思われる。「丹波周山窯址」などと比較すると底体部の境が丸味を持つことが特徴的であり、第3期型式になって底径が大きくなり、ようやく本来の杯Aらしくなる。こちらも口径差から各期型式が2型式に細分でき、I型式は13~14cm前後、II型式が10~13cm前後となる。杯Aの場合にはその中心はII型式であり、I型式はごくわずかである。

以上比較的特徴を捉え易い器種について述べたが、「丹波周山窯址」では長頸壺に波状文が比較的遅くまで残っていたが、本遺跡の場合には同器種に波状文はまったく見られない。ただ、壺の口縁部には第3期型式までそれを見ることができる。

土師器は出土数が少ないため、各期型式的特徴を捉えるには困難な点もある。特に杯・皿類で特徴的に見られる暗文の時期的手法差をとらえる事ができず、ほとんどが一段の斜放射状暗文を施している。土師器も須恵器同様、3型式に分類できる。

杯Aには底体部境が丸味を持つA形態と境の明確なB形態がある。第1期型式の杯A-A形態は底部が小型で杯Cに近い形態をし、体部は「S」字もしくは内湾形態を取るものが多い。B形態は口縁端部を外方に巻き込んで肥厚させる。体部内面の暗文は一段の放射状暗文である。

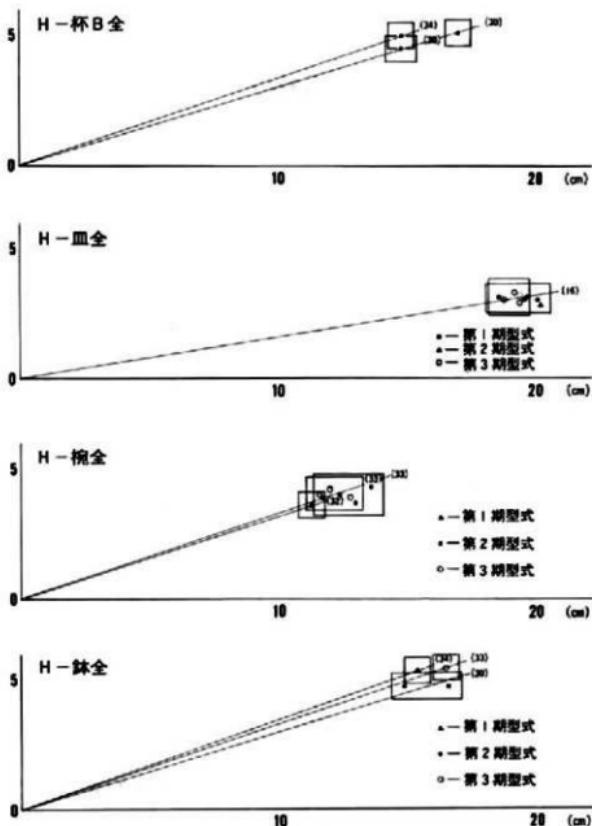


第21図 壺形器径高指數図

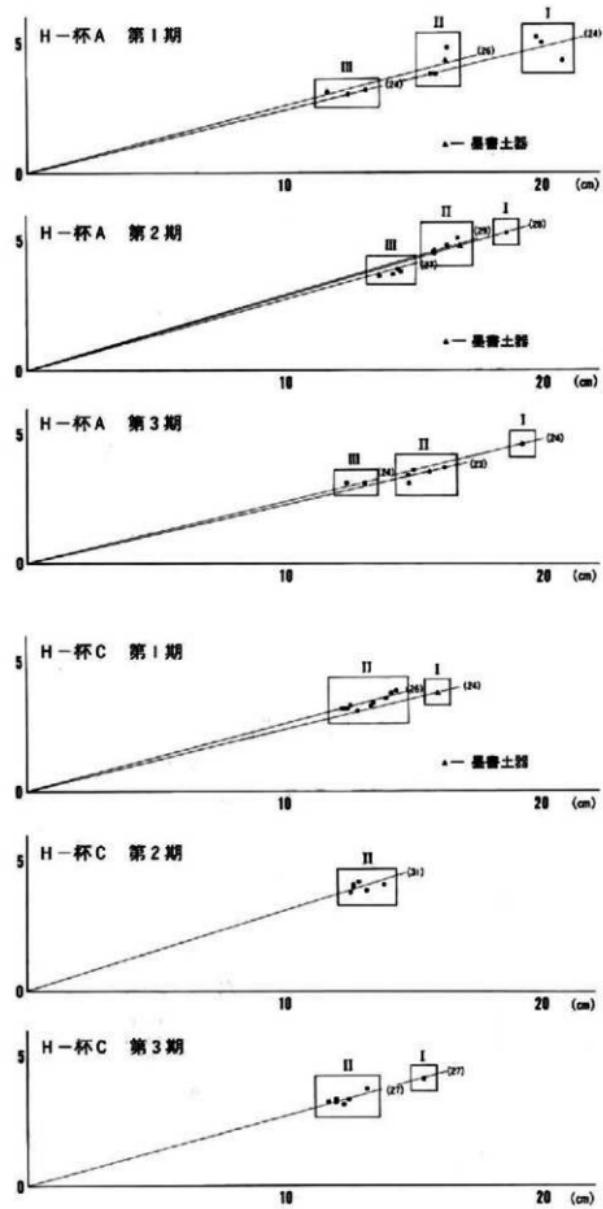
第2期型式でもA、B形態とも基本的形態は大きく変わらないが、A形態では底部が少し大きくなる。基本的な体部内面の暗文は一段の斜放射状暗文であるが、1点二段のものを見る事ができる。第3期型式になると底部が大きくなり、B形態などは特徴的に器高が低くなる。体部内面の暗文はいずれも一段の斜放射状暗文となる。口径差により、20cm前後のI型式・15cm前後のII型式・13cm前後のIII型式の型式に細分できる。口縁端部を内側に巻き込むようになる。

杯Bは各期型式とも1点ずつしかない。第1期型式では高台がかなり内側に付き、体部下半が大きく張る。第2期型式には第3期型式と逆転してもいいほど高台が外側に付くが、暗文は二段の斜放射となる。第3期型式の高台は若干高いが、口縁部の外側が小さくなり、口縁内面に連弧状暗文が付く。

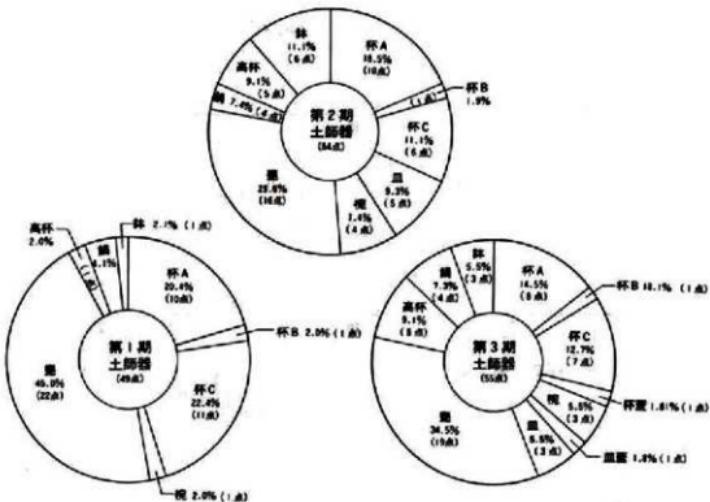
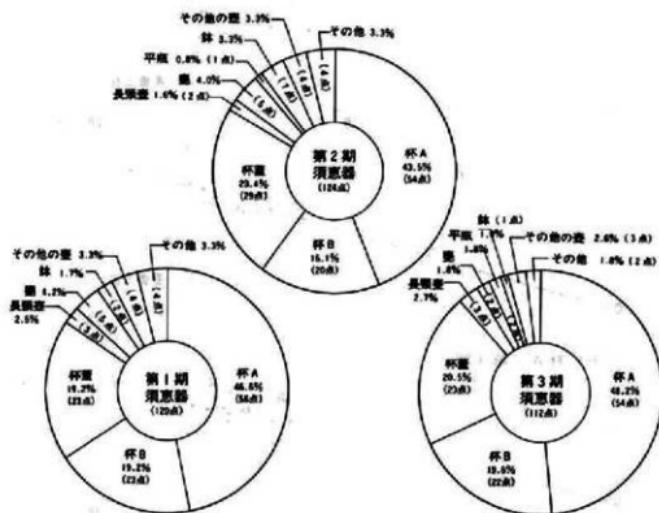
皿は第1期型式がなく、第2期型式から出現する。この期型式は体部が内側しながら大きな



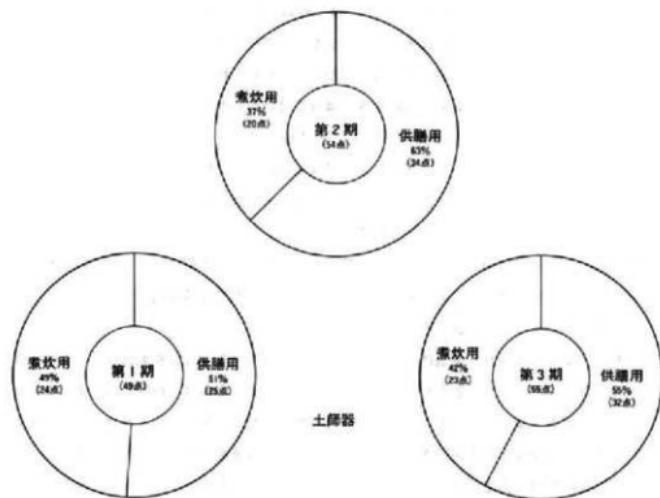
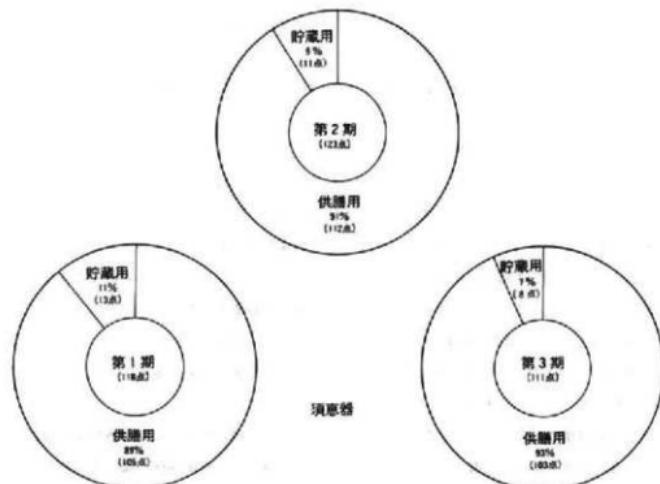
第22図 土師器径高指數圖(1)



第23图 土质特征指标图(2)



第24図 時期別器種構成図



第25图 土器用途别占有图

角度で立ち上がり、口縁端部が外方に肥厚する。第3期型式になると体部の開きが大きくなり、外反して端部は丸くおさまる。いずれの型式とも暗文は一段の斜放射状暗文であるが、第3期型式には斜格子状暗文がみられる。

表は口縁部の形態、鍋は頸部外面の稜線の形状等によってやはり3期型式に分類することができる。

以上主だった器種について型式ごとの特徴の変化をみたが、その相当する年代を考えると、最古の第1期型式には内面に返りの付く須恵器杯蓋がなく、口縁部に段を持つことから、飛鳥編年のN期でも後半に位置するものである。また最新の第3期型式には須恵器に皿・鉢・鉢形鉢・A形態の杯蓋等が見られない事から、少なくとも平城編年のIII期には決して下らないものと考える。ただ、土師器の暗文は一段の斜放射状暗文が主体であり、平城宮でみられるような暗文の時期的变化を追うことができないため、決して平城田の特徴を示すものではない。さらに、「丹波周山古窯址」の須恵器杯蓋の平城II想定型式のような摘みの分厚い形態は2点しかなく、平城I後半の口縁端部が大きく外反する形態のものばかりであるため、本道跡の第3期型式はこの時期にあたるものと考える。

土器の器種構成に関しては「土器に関する小結」で詳しく触れたが、これを各期型式毎に供給・貯蔵・煮炊の機能で分類したのが第25図である。平城宮など官衙遺跡の場合その割合は、概算で須恵器で85%：15%：0%、土師器では85%：0.5%：10%となっているが、本道跡の場合須恵器では約90%：10%：0%と官衙遺跡に非常に近い値を示し、土師器では60%：0%：40%となり、供給用形態の数値がかなり低くなっている。遺跡の官衙性と非官衙性が極端に示されている。

土器の法量に関しては、「丹波周山古窯址」では1種類1法量の原則が守られているが、本道跡の須恵器A・Bの場合、口径差によって2型式に細分できるが、器高は2型式とも大きく変わらないため、両型式間において指数に差が生じている。杯Aの場合には口径がそう大きく変わることがないため、指数も比較的大きく離れてはいないが、杯Bでは口径差が大きいため、その指数もかなりの隔たりとなっている。「丹波周山古窯址」とのこうした相違は、本道跡が消費遺跡であることによるものと思われる。杯AではII型式、杯BではI型式が数量的に多いため地元の生産地から供給されたものであり、杯AのI型式、杯BのII型式は別の地域（生産地）から持ち込まれた舶入品と考えられる。

これに対し、土師器は指数が比較的近い状態にある。碗・皿は各期型式とも同一の指数であり、杯A・杯Cは各期型式間は若干異なっているが、期型式内ではほぼ均一な数値となっている。杯Bは点数が少ないので指数に若干の開きがある。

この様に土器で見る限り、本道跡の存続年代は飛鳥N後半（A.D.700年前後）から平城I後半（A.D.720年頃）のかなり限られた時間帯の中であり、その組成は官衙的土器要素と非官衙的とも言える要素を兼ね備えたものといえる。ただ第3期型式に含まれる「春マ里長」の墨書きを持つ杯蓋と、円面鏡・転用鏡の多さ、木簡の出土さらには造構の性格等いずれの要素から考えても、官衙的性格は否定できないものである。土器組成に非の部分があるのは、官衙性を否定するものではなく、本道跡を特徴付けるものと考えられる。

第IV章 3.は
公開していません

結語

筆内より出土した多数の墨書き器と20点にのほる木簡の文字の中に、「里」および「里長」の文字がみられることから、本道路を「里」および「里長」の存在を裏付ける道路として認定できよう。またこのことは、道構の配置状態が非常に計画的であり、都衛をはじめとする地方官街道路の正序の平面形態に類似しており、官衙的な色彩が濃い事からも間接的に肯定できる。

本道路から出土した土器等は、飛鳥Ⅳの後半から平城Ⅰの終末の間にほぼ収まる。飛鳥Ⅳが7世紀末から8世紀初頭、平城ⅠがA.D.710~725年であるため、土器編年の地域的な時間差を考慮に入れたとしても、本道路が8世紀初頭に造営され、A.D.730年前後までの約20数年間存在していたと思われる。この開始の年代は、比較的早い時期に營まれた都衛道路に続く時期であり、言わば第1期の律令制地方行政組織整備の波に乗って設置されたものと思われる。こうした土器の編年からして本道路の設置の契機となったのは、大宝元年(701)の大宝令の施行によって再び整備された五十戸一里制(郡里制)に基付くと思われる。「里」自体の終息は公式的には天平11年(739)年の都制の実施であろうが、本道路の状態等からみて、A.D.730年頃には垂亀元年(715)に出された郷里制がすでに有名無実な状況に落ち入っており、その対策として天平11年に都制が実施されたものと思われる。

郷里制によって里が郷に改められ、「郷家」には「郷長」、「里」には「里正」を置いたとしているが、本道路の場合にはA.D.715年以降に当たる平城Ⅰ後半に属する第3期型式の土器に「春マ里長」の墨書きがみられるのは、五十戸一里制当時の呼称が引き続いて残ったものか、この地域における郷里制実施がこの時期以降となつたためかと思われる。ただ、「郷家」関係の道路と考えられる春日・七日市道路から出土している「春部郷」の墨書き土器を平城Ⅰの前半とするならば、前者の解釈を取らざるを得ない。さらに、春日・七日市道路の墨書き土器は、前記したように木簡がいずれも郡里制(715年以前)下のものであることも傍証しているため、本道路が715年を境として、以前が郡里制下の「里」、以後が郷里制下の「里」として存在していたものと思われる。しかし一方では、土器編年の地方における時間的な遡進の可能性も高いので、一概に断定はできない点もある。いずれにしろ山垣道路が衰弱し、郷里制が施行されて後の政治的中心である「郷家」は、西隣の高地上に所在する春日・七日市道路に移ってしまったようである。

このように本道路の開始と廃止の年代は、律令制下における地方支配の政治的施策の変遷と一致するものであり、これは中央政府による地方支配行政がかなり強力に押し進められた事を示すものである。ただ都衛の開始時期に各都によってずれがある事からも分かるように、その波及の仕方は各地域によってかなり異なる。その要因は中央政府側と各地域との関連の度合いによるもので、その状態の違いによって地方官衛が設置される時期も異なったものと思われる。春部郷の場合は、比較的早い時期に「里」が設置されたのは、「里」成立以前に「部(部民)」等として中央の政府と密接な状態にあったために、早い時期に「里」が設置されたのでは

ないかと考える。さらには丹後道が通過する一方で、播磨・山陰地域への分岐点にあたり、水陸の交通の要所になっていることもその一因であったと思われる。

「都」の司にはかつての国造クラスの在地有力者が世襲的にその職に当たるが、「里」の長官である「里長」の場合、都衙より下級組織であるため「都」以上に強く在地に根差した者がその職に付いたことであろう。そのため、「里」の中心的施設（「里家」とでも呼ぶか）の平面形態は地方棲閑であるごとく、官衙としての「国府」・「都衙」の正庁の配置を模していくながらも、その土器組成は非官衙的色彩が強く、特に木器に至っては未製品・未使用のものを漆を利用して水漬けにしていたような状態にある。こうした表裏一体の状況は「里」の実態を特徴的に現わしているように思われる。つまり、中央政府の地方支配に対する政策と在地の意識との間に大きなギャップがあるが、決してそのギャップが中央政府の政策の妨げになっていたのではなく、むしろそのギャップを中央政府側が容認し巧みに利用して戸を掌握していくからこそ、「里」も存在し得たのではないかろうか。遺物の状態があまりに非官衙的であるのはこのような理由によるものであり、決して本遺跡が日常的な居住地であった事によるものではない。居住地としてふさわしくない事は、遺構の形態からも先に述べたとおりである。

また本遺跡が「里」の行政域の中にあってこの場所に置かれた要因は、地理的にみて先ず洪水の被害を受け難い段丘を東側に持った微高地に位置する事。次に微高地の東側に竹田川があり、遺跡の真東の部分が灘状地形になって水運用の船舶の着岸が容易だった事。次に領域内でも最も広い平野部の中央部分に位置する事。次に付近を丹後道が走ると共に、播磨・但馬地域への分岐点となる事。等々々の要素が考えられるが、もう一つ重要なのは西側の微高地上に位置する春日・七日市遺跡との関係である。同遺跡は上記したように春部の「郷家」とも考えられる遺跡であり、時期的には山垣遺跡とも重複している。今後この遺跡の整理結果を得たなくてはならないが、山垣遺跡が春部の「里家」であった時期、春日・七日市遺跡が「里長」の居住道路であり、「里」衰退の後は居住区域に「郷家」=官衙を取り込んでしまったとすると、そこには「都衙」に近い行政組織の在り方を想像することができる。

山垣遺跡の調査によって「里家」の存在が明確になったが、この事は701年に施行された大宝令が、中央集権的国家体制整備の最終段階であったことを示すものと言える。ただこうした性格を持った遺跡の実例がまだ少ないため、本遺跡の状況が丹波の一定地域の特定な現象であることも考えられる。今後、本遺跡のような性格を示す遺跡が全国的に発見されるならば、一層律令制国家形成および完成期の状況が史実に近いものになると思われる。

今回の報告では、木簡に関する考察にはまったく触れていない。第2回の「木簡編」ではその文章の内容に関して考察を頂き、上記の考古学的な分析を踏まえた上で「里」の実態に迫ってみたいと思う。

表5 漢字墨書き土器一覧

No	口径	器高	指数	調査および備考
第1期形式				
杯A				
1	11.7	3.7+	—	見込調整は不明、底外面はヘラキリ後周囲ナデ、右回転、底部外面に「仮」の墨書
2	11.3	3.4	30	見込は一定方向ナデ、底外面はヘラキリ後ナデ、右回転、底部外面に「春マ」の墨書
杯B				
3	18.6	3.4	*	体部の1/2回転へラケズリ、見込調整不明、右回転、墨書は不明、内面に墨付着
4	15.4	3.0	*	体部の2/3回転へラケズリ、右回転、内面の一部に墨付着、内面に「珠杯」の墨書
杯B				
5	16.6	4.3	26	体部2/3回転へラケズリ、底外面回転へラケズリ後ナデ、右回転、体外面「春マ」墨書
6	不明	3.5+	—	体部3/4回転へラケズリ、底外面回転へラケズリのまま、右回転、底外面「春マ」墨書
7	16.5	4.3	26	体部2/3回転へラケズリ、底外面回転へラケズリ後ナデ、右回転、底部外面「井」墨書
8	14.5	4.2	29	体部2/3回転へラケズリ、底外面回転へラケズリのまま、右回転、体外面「春マ」墨書
9	16.8	4.3	26	体部2/3回転へラケズリ、底外面回転へラケズリ後ナデ、右回転、底部外面「併」墨書
第2期型式				
杯A				
10	11.0	3.6	28	底外面へラキリ後周囲ナデ、右回転、体外面「上影榮」墨書、見込「へ」字へテ記号
11	11.8	3.5	30	見込一定方向ナデ、底外面へラキリ後ナデ、右回転、底部外面に「上影榮」の墨書
12	(10.7)	3.6	34	見込ヨコナデ、底外面へラキリ後周囲をナデ、右回転、体部外面に「春マ」かの漢文字
13	11.4	3.3	29	見込一定方向ナデ、底外面へラキリ後周囲をナデ、右回転、体部外面に「仮」の墨書
杯B				
14	18.2	3.1	*	体部2/3回転へラケズリ、天井部「春マ」墨書三箇所、内面墨付着（転用鏡）
15	17.8	1.9	*	天井部回転へラケズリ、右回転、内面に「春マ」の墨書
16	(16.8)	2.7+	*	体部1/2回転へラケズリ、右回転、内面墨付着（転用鏡）、天井部「春部」墨書
17	18.2	1.9+	*	体部2/3を回転へラケズリ、見込調整は不明、右回転、天井部に「井」の墨書
杯B				
18	(17.0)	4.0	24	体部2/3回転へラケズリ、底外面へラケズリ後回転ナデ、体部外面「春□」墨書
19	16.3	4.1	25	体部3/4回転へラケズリ、底外面へラケズリ後回転ナデ、見込墨付着、底外面「井」墨書
第3期型式				
杯A				
20	—	—	—	見込みはヨコナデ、底外面はヘラキリ後ナデ、右回転、底部外面に「春マ」の墨書
21	(12.2)	3.8	31	見込みはヨコナデ、底外面をヘラキリ後周囲ナデ、右回転、見込みに「富貴」の漢文字
杯B				
22	18.0	1.5	*	体部1/2回転へラケズリか、見込ヨコナデ、右回転、内面に「林」の墨書
23	17.9	3.2	*	天井部回転へラケズリ、見込一定方向ナデ、右回転、内面中央部に「春マ」の墨書
24	(17.9)	1.1+	*	体部の1/3を回転へラケズリ、見込調整は不明、左回転、内面に「春マ」の墨書
25	17.5	3.0	*	体部1/2回転へラケズリ、見込「一」方向ナデ、右回転、内面に「春マ黒」、「春マ」の墨書
26	18.2	1.6	*	天井部回転へラケズリ、右回転、内面に「春マ黒」、「春マ」の墨書
27	16.7	1.8	*	体部1/2回転へラケズリ、見込みは一定方向にナデ、右回転、内面に「得」の墨書
28	(12.8)	(1.7)	*	体部1/4回転へラケズリ、右回転、内面墨付着（転用鏡）、内面「春マ」墨書
杯B				
29	10.5	3.8	36	体部3/4回転へラケズリ、底部回転へラケズリ後ナデ、底外面「春マ」墨書、内面墨
型式不明				
杯A				
30	7.5	4.0+	—	見込み調整・底外部調整とも不明、右回転、体部外面に「春マ」の墨書
33	--	--	--	見込み調整・底外部調整とも不明、右回転、体部外面に「大」の墨書
杯B				
31	--	--	*	外縁調整・見込み調整とも不明、右回転、内面に「春□」の墨書
32	--	--	*	外縁調整・見込調整とも不明、右回転、内面に「□□」の墨書
34	--	--	*	外縁調整不明、見込みは一定方向にナデ、内面に「玉」の漢文字
35	--	--	*	外縁調整・見込調整とも不明、右回転、内面に「□」墨書、内面墨付着
杯B				
36	--	--	--	体部調整不明、底外面回転へラケズリ後回転ナデ、底部外面「春マ」墨書

表6 土師器墨書き一覧

No	口径	器高	指数	調整および備考
第1期型式				
杯A				
1	(16.8)	4.3	26	体部2/3横方向へラミガキ、底部へラケズリ後へラミガキ、底外面「春マ」墨書き
杯C				
3	(16.0)	3.8	24	体部1/2へラケズリ後へラミガキ、底部ケズリ後へラミガキ、底外面「春マ」墨書き
第2期型式				
杯A				
2	16.8	4.8	29	体部1/2横方向のへラミガキ、底部へラケズリ後へラミガキ、体外面「春マ」墨書き
第3期型式				
皿				
4	20.2	2.8	14	体部1/2へラミガキ、底部へラケズリ後へラミガキ、底外面中央部「春」墨書き

表7 漢字器(杯A)一覧

No	口径	器高	指数	調整および備考
第1期型式				
杯G				
1	10.2	3.9	38	見込みは中央部を指圧、底部はへラケズリ、右回転
2	(10.0)	4.8	48	見込みは不定方向のナデ、底部はへラケズリ、右回転
3	11.1	4.1	35	見込みは一定方向のナデ、体部の1/3までへラキリ、右回転
4	10.2	3.6	35	見込みは一定方向のナデ、体部の1/3までへラキリ、右回転
杯Gの後続形態				
5	13.2	4.2	32	見込みはヨコナデ、底部はへラキリ、右回転
6	(12.8)	4.5	34	見込一定方向ナデ、体部1/3までへラキリ、右回転、内面に朱・外面墨付着
7	12.5	4.4	35	見込みは一定方向のナデ、底部はへラキリ、右回転、内外面に墨付着
8	(11.4)	3.4	30	見込み調整は不明、底部はへラケズリ、右回転、内面一部に墨付着
9	11.3	4.0	35	見込みヨコナデ、体部は1/3までへラキリ、右回転
10	11.2	3.7	33	見込み調整は不明、体部は2/3までへラキリ、右回転、内面に墨付着
11	(11.2)	3.7	35	見込み調整は不明、体部は1/3までへラキリ、右回転
12	10.8	3.8	35	見込みヨコナデ、体部は1/3までへラキリ、右回転
13	10.8	3.5	32	見込みヨコナデ、体部は1/3までへラキリ、右回転、底外面に墨付着
14	(10.7)	(4.0)	37	見込み調整は不明、体部は2/3までへラキリ、右回転
15	10.6	3.3	31	見込み中央指圧圧、底部はへラキリ、右回転
16	10.5	3.7	35	見込みヨコナデ、体部は1/3までへラキリ、右回転
17	(10.5)	3.5	33	見込み調整は不明、体部は1/3までへラキリ、右回転、内底部に墨付着
18	10.4	3.9	38	見込みヨコナデ、底部のみへラキリ、右回転
19	10.3	3.6	35	見込みヨコナデ、底部のみへラキリ、右回転、内外面に墨付着
20	10.1	4.0	40	見込み一定方向のナデ、底部はへラキリ、右回転
体部が内側する形態				
21	(13.4)	(4.1)	34	見込みヨコナデ、体部は1/3までへラキリ、右回転、内外面に墨付着
22	12.4	4.4	35	見込調整不明、体部1/3までへラケズリ、右回転、内外面墨・内面墨付着
23	12.0	4.0	33	見込調整不明、体部は1/3までへラキリ、右回転
24	11.8	3.7	31	見込みは一定方向のナデ、底部はへラケズリ、右回転、外面上に墨付着
25	11.6	4.0	34	見込みは一定方向のナデ、体部は1/3までへラケズリ、右回転、
26	11.6	3.8	33	見込みは一定方向のナデ、底部はへラケズリ、右回転
27	11.4	4.0	35	見込「×」ナデ、底部はへラキリ、右回転、内面墨付着・外面上部「×」へラ記号
28	(11.4)	3.6	32	見込調整不明、底部はへラキリ、左回転
29	11.2	4.0	36	見込みは「一」字にナデ、体部は1/3までへラキリ、右回転
30	11.2	3.9	35	見込みはヨコナデ、体部は1/3までへラキリ、右回転
31	10.9	3.8	35	見込みはヨコナデ、底部はへラケズリ、右回転
32	10.8	4.0	37	見込みはヨコナデ、底部調整は不明、右回転、内外面の一部に墨付着
33	10.8	3.9	36	見込みはヨコナデ、体部は1/2までへラキリ、右回転
34	10.8	3.4	32	見込みはヨコナデ、体部は1/3までへラキリ、右回転、内外面に墨付着
35	10.5	3.4	32	見込みは一定方向のナデ、底部はへラキリ、右回転

36	10.2	4.0	39	見込みは一定方向のナデ、底部をヘラキリ、右回転、内面の一部に墨付着
口縁端部が屈曲する形態				
37	(11.8)	4.7	41	見込みはヨコナデ、体部は2/3までヘラキリ、右回転、内外面の一部に墨付着
38	11.7	4.3	38	見込みはヨコナデ、底部をヘラキリ、右回転
39	11.7	4.7	41	見込みは不定方向のナデ、底部をヘラキリ、右回転、内外面の一部に墨付着
40	(11.5)	4.4	38	見込みは一定方向のナデ、底部をヘラキリ、右回転
41	11.5	4.3	37	見込みは調整は不明、底部をヘラキリ、右回転
42	11.3	3.9	35	見込みはヨコナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転
43	(11.2)	4.4	39	見込みは一定方向のナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転
44	11.2	4.3	38	見込みは「一」字にナデ、底部をヘラキリ、右回転、内外面の一部に墨付着
45	11.2	4.1	37	見込みは調整は不明、底部をヘラキリ、右回転
46	11.1	3.7	33	見込みは不定方向にナデ、底部をヘラキリ、右回転
47	10.9	3.8	35	見込みは不定方向にナデ、体部を1/3までヘラキリ、右回転
48	(10.8)	4.2	39	見込みはヨコナデ、底部をヘラケズリ、右回転、外面上に墨付着
49	10.5	4.2	40	見込みはヨコナデ、底部をヘラキリ、右回転、内外面に墨付着
50	(10.4)	(3.9)	38	見込みはヨコナデ、体部を1/3までヘラキリ、右回転
51	10.0	4.3	37	見込みは不定方向ナデ、体部を1/3までヘラキリ、右回転
52	9.8	4.3	44	見込みはヨコナデ、底部をヘラケズリ、右回転、外面上に墨付着
第2期型式				
体部が外反する形態				
53	14.8	4.3	29	見込みはヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ、右回転、内面の一部に墨付着
54	12.8	4.5	35	見込み調整は不明、底部はヘラケズリ、右回転
55	(12.8)	4.2	33	見込み調整は不明、底部はヘラケズリ、右回転、外面上に墨付着
56	(12.7)	4.1	32	見込み底部と墨も調整は不明、右回転
57	12.6	4.5	38	見込みはヨコナデ、体部は1/3までヘラケズリ、右回転
58	(12.6)	4.1	32	見込み調整は不明、底部はヘラケズリ、右回転
59	12.4	4.3	35	見込み調整は不明、底部はヘラケズリ、右回転
60	12.4	4.0	36	見込みは一定方向のナデ、右回転
61	(11.9)	4.2	35	見込み調整は不明、底部はヘラケズリ、右回転
62	(11.9)	4.2	35	見込み調整は不明、体部は1/3までヘラキリ、右回転、内面一部に墨付着
63	11.6	3.9	34	見込みは一定方向のナデ、底部はヘラキリ後ナデ、右回転
64	11.1	3.8	34	見込みは一定方向のナデ、底部はヘラケズリ、左回転
体部が直伸し口縁端部が屈曲する形態				
65	11.8	4.0	30	見込みは一定方向のナデ、底部はヘラキリ後ナデ、右回転
66	11.4	4.1	36	見込「△」にナデ、底部はヘラケズリ、右回転、底部外面上に「×」のヘラ記号
67	11.7	3.8	32	見込みは一定方向のナデ、底部はヘラケズリ、右回転
68	(11.0)	3.9	35	見込みは一定方向のナデ、底部は1/3までヘラキリ、右回転
体部が直伸する形態				
69	11.9	3.8	32	見込みは一定方向のナデ、底部は1/3までヘラキリ、右回転
70	11.8	3.9	33	見込みはヨコナデ、底部ヘラキリ、右回転
71	(11.8)	3.8	32	見込み調整は不明、底部は1/3までヘラキリ、右回転、内外面に墨付着
72	11.7	4.3	37	見込みは一定方向のナデ、底部をヘラキリ、右回転、内外面に墨付着
73	11.7	3.8	32	見込みは中央指頭圧、底部は1/2までヘラキリ、右回転
74	10.8	3.9	36	見込みは一定方向のナデ、底部をヘラケズリ、右回転
体部が内側する形態				
75	12.6	4.1	33	見込一定方向ナデ、体部1/2までヘラキリ、右回転、底部外面上「一」ヘラ記号
76	12.6	3.9	31	見込みはヨコナデ、底部はヘラケズリ、右回転
77	(12.4)	4.1	33	見込みはヨコナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転
78	12.3	3.9	32	見込みはヨコナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転
79	12.2	3.9	32	見込みはヨコナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転
80	12.1	3.0	33	見込みはヨコナデ、底部はヘラケズリ、右回転
81	12.0	4.0	33	見込みはヨコナデ、体部は1/3までヘラキリ、左回転
82	12.0	3.9	33	見込みはヨコナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転
83	12.0	3.6	30	見込みは一定方向のナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転
84	11.9	3.7	31	見込みはヨコナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転
85	11.8	4.1	35	見込は一定方向のナデ、底部ヘラケズリ、右回転、底部と体部外面上に墨

86	11.8	4.0	34	見込みは一定方向のナデ、底部へラケズリ、右回転、内面に墨付着
87	11.7	4.3	37	見込みは調整は不明、底部をヘラキリ、右回転、内面に墨付着
88	11.6	4.1	35	見込みは一定方向のナデ、底部をヘラキリ、左回転
89	11.6	3.7	32	見込みは一定方向のナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転、底部外側墨付
90	11.6	3.3	28	見込みはヨコナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転、内外面に墨付着
91	(11.4)	4.4	39	見込み調整は不明、体部は1/3までヘラキリ、右回転
92	11.4	4.2	37	見込みは△にナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転
93	11.4	3.9	34	見込みはヨコナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転
94	11.4	3.6	32	見込みは一定方向のナデ、体部はヘラケズリ、右回転
95	11.3	3.9	35	見込みは一定方向のナデ、体部はヘラケズリ、右回転、内面の一部に墨付着
96	11.2	3.7	33	見込みは「十」にナデ、底部をヘラキリ、右回転
97	11.1	4.0	36	見込みは一定方向のナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転
98	10.4	3.5	34	見込みは不定方向のナデ、底部をヘラケズリ、右回転
99	(10.1)	3.5	35	見込みはヨコナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転
100	(10.1)	3.4	35	見込みは不定方向のナデ、底部をヘラケズリ、右回転
現形に近い形態				
101	(11.2)	4.4	39	見込み調整は不明、体部を2/3までヘラキリ、左回転、内面に墨
102	(10.8)	4.1	38	見込み調整は不明、体部を1/3までヘラキリ、左回転
103	10.5	3.9	37	見込みは「一」にナデ、底部をヘラケズリ、右回転
104	10.2	4.0	39	見込みはヨコナデ、底部をヘラキリ、右回転
第3期型式				
体部が内側する形態				
105	12.6	3.8	30	見込みはヨコナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転
106	(12.6)	(3.3)	26	見込み調整は不明、底部をヘラキリ、右回転
107	12.3	3.2	26	見込みは一定方向にナデ、体部は1/3までヘラキリ、右回転
108	12.2	3.4	27	見込み調整は不明、底部をヘラケズリ、右回転
109	12.1	3.7	31	見込みは一定方向にナデ、底部をヘラキリ、右回転
110	11.9	3.7	31	見込みはヨコナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転
111	11.8	3.4	29	見込みは一定方向にナデ、底部をヘラキリ、右回転
112	11.8	3.2	27	見込みは一定方向にナデ、底部をヘラキリ、右回転
113	11.8	3.1	26	見込みはヨコナデ、底部をヘラケズリ、右回転
114	11.7	3.9	33	見込みはヨコナデ、底部をヘラキリ後ナデ、右回転
115	11.6	3.5	30	見込みはヨコナデ、底部をヘラケズリ、右回転
116	11.6	3.4	29	見込みは一定方向にナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転
117	11.4	3.5	31	見込みは一定方向にナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転、内面に墨付着
118	11.4	3.4	30	見込み調整は不明、底部をヘラケズリ、右回転、内面に墨付着
119	11.4	2.9	25	見込みはヨコナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転
120	11.2	3.6	32	見込み調整は不明、底部調整も不明、右回転、外側に墨付着
121	11.1	3.6	32	見込みは一定方向にナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転、外側に墨付着
122	10.7	3.5	33	見込みはヨコナデ、底部をヘラケズリ、右回転、底外側に墨付着
123	10.7	3.4	32	見込みは一定方向にナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転
124	10.4	3.2	31	見込みは一定方向にナデ、底部をヘラケズリ、右回転
体部が直伸する形態				
125	16.2	4.7	29	見込みは「×」にナデ、底部を回転へラケズリ、右回転、内面に墨付着
126	15.4	4.4	29	見込みはヨコナデ、底部を回転へラケズリ、右回転、内面に墨付着
127	14.4	4.3	30	見込みは一定方向にナデ、底部を回転へラケズリ、右回転、内外面一部に墨付着
128	(12.9)	4.3	33	見込みはヨコナデ、底部調整不明、右回転
129	12.7	4.2	33	見込みはヨコナデ、底部を回転へラケズリ、右回転
130	12.7	4.1	32	見込みは「▽」にナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転、内外面に墨付着
131	12.2	3.5	29	見込みは一定方向にナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転
132	(12.0)	(3.5)	29	見込みは不定方向にナデ、底部をヘラキリ、右回転
133	11.8	3.8	32	見込みは一定方向にナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転
134	11.7	3.9	33	見込み△にナデ、体部の1/3までヘラキリ、右回転
135	11.7	3.7	32	見込み調整は不明、体部1/3までヘラキリ、右回転、底部外側に「+」ヘラ記号
136	(11.6)	3.6	31	見込みは一定方向にナデ、体部1/3までヘラキリ、左回転、内面に墨付着

137	11.5	3.6	31	見込みは「一」にナデ、底部をヘラキリ、右回転、内面に墨付着
138	11.4	3.8	33	見込みは一定方向にナデ、底部をヘラキリ、右回転
139	11.4	3.6	32	見込み調整は不明、体部1/3までヘラキリ、右回転
140	(11.4)	3.5	31	見込み調整は不明、底部をヘラキリ、右回転
141	(11.3)	3.8	34	見込みは「十」にナデ、体部1/3までヘラキリ、右回転
142	11.3	3.7	33	見込みは一定方向にナデ、底部をヘラケズリ、右回転、内外面に墨付着
143	11.2	3.5	31	見込みはヨコナデ、体部1/3までヘラキリ、右回転、内外面に墨付着
144	11.2	3.7	33	見込みは一定方向にナデ、底部をヘラキリ、右回転、内外面に墨付着
145	11.2	3.7	33	見込みは一定方向にナデ、底部をヘラキリ、右回転
146	11.2	3.6	32	見込みは「△」にナデ、底部をヘラケズリ、右回転
147	11.1	3.2	29	見込み調整は不明、体部1/3までヘラキリ、右回転、内面に墨付着
148	10.8	3.5	32	見込みは一定方向にナデ、底部をヘラケズリ、右回転、内外面に墨付着
149	10.7	4.1	38	見込みは一定方向にナデ、底部をヘラケズリ、右回転
150	10.3	3.5	34	見込みは「日」にナデ、底部をヘラキリ、右回転、内面に墨付着
体部は直伸するが脛の低い形態				
151	(12.9)	3.6	28	見込み調整は不明、体部1/3までヘラキリ、右回転
152	(12.8)	2.9	23	見込み調整は不明、底部をヘラケズリ、右回転
153	(11.8)	3.5	30	見込みは一定方向にナデ、体部1/3までヘラキリ、右回転、底外面に墨付着
154	11.4	3.0	26	見込みは一定方向にナデ、底部をヘラケズリ、右回転
側に近い形態				
155	10.4	4.0	38	見込みはヨコナデナデ底部をヘラケズリ、右回転
156	(10.4)	3.8	38	見込みは「V」にナデ、底部をヘラキリ、右回転

表8 備考器(杯蓋)一覧

No. 口径 器高 調整および備考

第1期- I型式

157	19.4	2.7	天井部の1/3回転ヘラケズリ、見込みはヨコナデ、右回転、内面に墨付着(転用鏡)
158	19.0	3.3	天井部は回転ヘラケズリ、見込みは一定方向のナデ、右回転、内面に墨付着(転用鏡)
159	18.8	2.9	天井部の1/2回転ヘラケズリ、見込みは一定方向のナデ、右回転、内面に墨付着(転用鏡)
160	18.4	3.0	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向のナデ、右回転、内面中央部墨付着(転用鏡)
161	18.0	2.0	天井部の2/3回転ヘラケズリ、見込みは「十」にナデ、右回転
162	18.0	3.0	天井部の1/3回転ヘラケズリ、見込み調整は不明、右回転、内面一部に墨付着
163	17.7	2.9	天井部の1/2回転ヘラケズリ、見込みは一定方向ナデ、右回転、内面に墨付着(転用鏡)
164	17.5	3.2	天井部は回転ヘラケズリ、見込みは一定方向ナデ、右回転、内面に墨付着(転用鏡)
165	17.5	3.2	天井部の1/2回転ヘラケズリ、見込みは一定方向ナデ、右回転
166	17.4	2.8	天井部の2/3回転ヘラケズリ、見込みは一定方向ナデ、右回転。
167	17.2	3.4	天井部の2/3回転ヘラケズリ、見込みは「V」にナデ、右回転、内面に墨付着(転用鏡)
168	17.1	3.8	天井部の2/3回転ヘラケズリ、見込みは「十」にナデ、右回転
169	17.1	3.0	天井部の1/2回転ヘラケズリ、見込みは一定方向ナデ、右回転
170	16.8	3.4	天井部の1/2回転ヘラケズリ、見込み調整は不明、右回転、内面に墨痕跡(転用鏡)
171	16.8	3.5	天井部の1/3回転ヘラケズリ、見込みは一定方向ナデ、右回転、内面に墨と朱(転用鏡)
172	16.7	3.6	天井部の2/3回転ヘラケズリ、見込みは「一」にナデ、右回転
173	16.6	3.1	天井部の2/3回転ヘラケズリ、見込みは不定方向のナデ、右回転、内面に墨(転用鏡)
174	16.5	2.9	天井部の2/3回転ヘラケズリ、見込みは「□」にナデ、右回転、内面に墨(転用鏡)
175	15.5	3.5	天井部の1/2回転ヘラケズリ、見込みは「×」にナデ、右回転、内面に墨付着(転用鏡)
176	14.4	3.0	天井部の1/3回転ヘラケズリ、見込みはヨコナデ、右回転、内面に墨付着(転用鏡)

第1期-II型式

177	(12.6)	1.6+	天井部は回転ヘラケズリ、見込み調整は不明、右回転、内面に返りの痕跡、転用鏡
-----	--------	------	---------------------------------------

第2期- I型式

196	18.9	3.1	天井部の2/3回転ヘラケズリ、見込みは「十」にナデ、左回転
197	18.7	2.6	天井部は回転ヘラケズリ、見込みは一定方向にナデ、右回転、内面に墨付着(転用鏡)
198	18.5	3.3	天井部は回転ヘラケズリ、見込みは「一」にナデ、右回転、内面に墨付着(転用鏡)
199	18.3	2.4	天井部の1/2回転ヘラケズリ、見込みは「一」にナデ、右回転
200	(18.2)	2.7	天井部の1/3回転ヘラケズリ、見込みはヨコナデ、右回転
201	18.1	3.3	天井部の2/3回転ヘラケズリ、見込みは「十」にナデ、右回転、内面に墨(転用鏡)

202	17.9	2.2	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みはヨコナデ、右回転
203	17.8	3.7	天井部の2/3回転へラケズリ、見込みは一定方向にナデ、右回転
204	18.8	2.6	天井部の1/3回転へラケズリ、見込みは「-」にナデ、右回転
205	17.7	2.0	天井部の2/3回転へラケズリ、見込みはヨコナデ、右回転、内面に墨付着（転用鏡）
206	17.4	2.2	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みは「+」にナデ、右回転
207	17.3	3.3	天井部の2/3回転へラケズリ、見込みは一定方向にナデ、右回転、内面に墨（転用鏡）
208	17.1	4.2	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みは「-」にナデ、右回転
209	17.0	3.2	天井部の2/3回転へラケズリ、見込み調整は不明、右回転、内面に墨付着（転用鏡）
210	(16.8)	3.8	天井部の2/3回転へラケズリ、見込みは一定方向にナデ、右回転、内面に墨（転用鏡）
211	16.7	3.1	天井部の1/3回転へラケズリ、見込みは一定方向にナデ、右回転、内面に墨（転用鏡）
212	(16.7)	3.5	天井部の1/2回転へラケズリ、見込み調整は不明、右回転、内面に墨付着（転用鏡）
213	(16.6)	2.6	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みは「-」にナデ、右回転、内面に墨付着（転用鏡）
214	16.5	2.7	天井部の2/3回転へラケズリ、見込みは「-」にナデ、右回転、内面に墨付着（転用鏡）
215	16.4	3.3	天井部の1/3回転へラケズリ、見込みは一定方向にナデ、右回転
216	16.3	1.7+	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みは不定方向にナデ、右回転、内面に墨（転用鏡）
217	15.7	3.0	天井部の1/3回転へラケズリ、見込みはヨコナデ、右回転
218	15.4	2.9	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みは「+」にナデ、右回転
第2期-II型式			
219	11.6	3.2	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みはヨコナデ、右回転、内面に墨付着（転用鏡）
第3期-I型式			
238	(20.6)	2.8	天井部の1/3回転へラケズリ、見込みは「-」にナデ、右回転
239	18.8	2.6	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みは一定方向にナデ、右回転
240	18.7	1.8	天井部は回転へラケズリ、見込みは一定方向にナデ、右回転、内面に墨付着（転用鏡）
241	18.4	2.8	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みは「-」にナデ、右回転
242	18.2	2.2	天井部の1/3回転へラケズリ、見込みは「-」にナデ、右回転
243	18.2	3.0	天井部の2/3回転へラケズリ、見込み調整は不明、右回転、内面に墨付着（転用鏡）
244	(18.0)	3.1	天井部の1/3回転へラケズリ、見込みは「-」にナデ、右回転
245	17.9	1.5	天井部の1/3回転へラケズリ、見込み調整は不明、右回転、転用鏡の可能性あり
246	17.8	3.5	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みは「△」にナデ、右回転
247	(17.6)	3.2	天井部の1/3回転へラケズリ、見込み調整は不明、右回転
248	17.3	2.2	天井部の1/3回転へラケズリ、見込みは「+」にナデ、右回転
249	17.2	2.2	天井部の1/3回転へラケズリ、見込みは「-」にナデ、右回転
250	(16.6)	2.1	天井部の1/3回転へラケズリ、見込みは一定方向にナデ、右回転
251	(16.5)	2.4	天井部の2/3回転へラケズリ、見込みは「-」にナデ、右回転
252	15.3	3.7	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みは一定方向にナデ、右回転、内面に墨痕（転用鏡）
253	15.0	3.2	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みは「-」にナデ、右回転、内面に墨付着（転用鏡）
第3期-II型式			
254	13.1	2.3	天井部の1/2回転へラケズリ、見込みは「▽」にナデ、右回転

表3 現在器(杯B)一覧

No	口径	高さ	指標	調査および備考
第1期-I型式				
178	18.4	4.9	26	体部2/3回転へラケズリ、底部回転へラケズリ、右回転、底部外面墨付着（転用鏡）
179	18.1	3.9	22	体部回転へラケズリ、見込ヨコナデ、底外面回転へラケズリ、右回転、内面墨付着
180	17.2	3.8	22	体部2/3回転へラケズリ、見込「-」にナデ、底外面回転へラケズリ後ナデ、右回転
181	(16.8)	3.7	22	体部回転へラケズリ、見込一定方向にナデ、底外面回転へラケズリ後ナデ、右回転
182	16.8	4.3	26	体部2/3回転へラケズリ、底外面回転へラケズリ後ナデ、底部内面に墨痕（転用鏡）
183	(16.5)	3.6	22	体部2/3回転へラケズリ、見込「-」にナデ、底外面回転へラケズリ後ナデ、右回転
184	(16.4)	3.7	23	体部1/2回転へラケズリ、底外面回転へラケズリ後ナデ、右回転、底部外面上に墨付着
185	16.3	3.8	23	体部2/3回転へラケズリ、見込「□」にナデ、底外面回転へラケズリ後ナデ、右回転
186	(16.2)	4.1	25	体部2/3回転へラケズリ、底外面回転へラケズリ、底部外面上に墨付着（転用鏡）
187	(16.2)	3.9	24	体部2/3回転へラケズリ、見込一定方向ナデ、底外面回転へラケズリ後ナデ、右回転
188	(16.2)	4.0	25	体部2/3回転へラケズリ、底外面回転へラケズリ、右回転、底外面墨付着（転用鏡）
189	16.1	4.5	28	体部2/3回転へラケズリ、底外面回転へラケズリ、右回転、底外面墨付着
190	(16.1)	3.8	24	体部2/3回転へラケズリ、見込不定方向にナデ、底外面回転へラケズリ、右回転

191	(16.0)	4.2	26	体部2/3回転へラケズり、見込み一定方向ナデ、底外面回転へラケズり後ナデ、右回転
192	15.9	4.3	27	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、底部外面墨付着（転用鏡）
193	15.8	4.0	25	体部2/3回転へラケズり、見込み・底外面調整は不明、右回転
194	15.3	3.9	25	体部1/2回転へラケズり、底外面回転へラケズり、右回転、内外面墨付着（転用鏡）
第1期一日型式				
195	19.4	4.2	40	底部のみ回転へラケズり、底外面回転へラケズり後ナデ、底部外面に墨付着（転用鏡）
第2期一日型式				
220	17.1	4.3	25	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、内面底外面に墨付着（転用鏡）
221	16.6	4.2	25	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり後ナデ、底部外面に墨付着（転用鏡）
222	16.4	5.1	31	体部2/3回転へラケズり、見込み一定方向にナデ、底外面回転へラケズり、右回転
223	16.4	4.5	27	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり後ナデ、底部外面に墨付着（転用鏡）
224	16.4	4.3	26	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、右回転、内面墨痕跡（転用鏡）
225	16.3	4.2	26	体部2/3回転へラケズり、見込み一定方向にナデ、底外面回転へラケズり、右回転
226	16.3	3.8	23	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、底部外面に墨付着（転用鏡）
227	16.2	4.3	27	体部2/3回転へラケズり、見込み一定方向にナデ、底外面回転へラケズり、右回転
228	16.2	4.2	26	底部のみ回転へラケズり、底外面回転へラケズり後ナデ、底部外面に墨付着（転用鏡）
229	16.0	4.4	28	体部2/3回転へラケズり、見込み一定方向にナデ、底外面回転へラケズり、右回転
230	(15.9)	3.7	23	体部2/3回転へラケズり、見込み「+」にナデ、底外面回転へラケズり、右回転
231	15.8	4.1	26	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、右回転、内外面墨付着（転用鏡）
232	15.5	4.2	27	底部のみ回転へラケズり、見込み一定方向ナデ、底外面は回転へラケズり、右回転
233	15.2	4.3	28	体部2/3回転へラケズり、底外面は回転へラケズり、内面底外面に墨付着（転用鏡）
234	(14.9)	4.0	27	体部1/2回転へラケズり、底外面回転へラケズり後ナデ、底部内外面墨付着（転用鏡）
第2期一日型式				
235	(10.5)	4.2	40	底部のみ回転へラケズり、見込み調整は不明、底外面回転へラケズり、左回転
236	(10.8)	4.1	38	体部の2/3を回転へラケズり、見込み調整は不明、底外面は回転へラケズり、右回転
237	10.6	4.3	41	体部の2/3を回転へラケズり、見込みはヨコナデ、底外面は回転へラケズり、右回転
第3期一日型式				
255	17.9	4.9	27	体部2/3を回転へラケズり、見込み「+」にナデ、底外面回転へラケズり、右回転
256	16.7	4.0	24	体部2/3を回転へラケズり、底外面回転へラケズり、右回転、底部外面に墨付着
257	16.7	4.1	25	体部2/3を回転へラケズり、底外面回転へラケズり、底部内外面に墨付着（転用鏡）
258	16.6	3.9	23	体部2/3を回転へラケズり、底外面回転へラケズり、内面に墨の痕跡（転用鏡か？）
259	16.4	4.4	27	底部のみ回転へラケズり、見込み「V」にナデ、底外面調整は不明、右回転
260	16.4	4.1	25	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、底部外面墨付着（転用鏡）
261	16.2	4.0	25	底部のみ回転へラケズり、底外面回転へラケズり、底部外面に墨痕跡（転用鏡）
262	(16.0)	4.0	25	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、内面底部に墨付着（転用鏡）
263	16.0	4.3	27	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、底部外面に墨付着（転用鏡）
264	(15.8)	3.7	23	底部のみ回転へラケズり、底外面回転へラケズり、右回転、内面に墨付着（転用鏡）
265	15.7	3.9	25	底部のみ回転へラケズり、見込み「+」にナデ、底外面回転へラケズり、右回転
266	(15.6)	4.3	28	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、左回転、底部外面墨付着
267	15.6	3.9	25	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、内面に墨の痕跡（転用鏡か？）
268	15.3	4.1	27	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、底部外面に墨付着（転用鏡）
269	15.1	3.9	25	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、右回転、底部外面墨痕（転用鏡）
270	14.8	4.5	30	底部のみ回転へラケズり、底外面回転へラケズり後ナデ、底部内外面墨付着（転用鏡）
271	(14.2)	3.7	26	底部のみ回転へラケズり、見込み一定方向にナデ、底外面回転へラケズり、右回転
272	(13.4)	3.8	28	体部2/3回転へラケズり、底外面回転へラケズり、右回転、底外面墨付着（転用鏡）
第3期一日型式				
273	10.8	4.6	43	体部の2/3を回転へラケズり、見込みはヨコナデ、底外面は回転へラケズり、右回転
274	10.6	3.4	32	底部のみ回転へラケズり、見込み一定方向にナデ、底外面回転へラケズり、左回転
275	10.6	3.7	35	底部のみ回転へラケズり、見込み一定方向にナデ、底外面回転へラケズり、右回転

表18 潜意器(その他)一覧

Na	口径	器高	指數	調整および参考
長潜意				
第1期型式				
276	19.4+	12.4	16.2	体部の1/3回転へラケズリ、底部は回転へラケズリ、左回転、頭部と体部に沈黙
277	23.2	13.3	15.8	体部1/3と底部を手軸へラケズリ、右回転、叩きを残す、頭部と体部に沈黙
278	9.1+	9.1+	15.0	体部の2/3回転へラケズリ、底部は回転へラケズリ、右回転、叩きを一部残す。
第2期型式				
279	13.6+	13.6+	19.7	体部の1/3と底部を回転へラケズリ、右回転
280	20.3+	13.3	18.3	体部は頭部までと底部を回転へラケズリ、右回転
第3期型式				
281	14.8+	11.7	16.4	体部は頭部までと底部を回転へラケズリ、右回転
282	11.5+	11.3	16.9	体部の1/2までと底部を回転へラケズリ、右回転
283	12.1+	12.1+	16.5	体部の1/2までと底部を回転へラケズリ、右回転、内面に墨付着
舌付き 瞳				
287	3.0+	8.0		体部はヨコナデ、底部はヨコナデ後中央部を指頭圧、右回転、内面と底外面に墨付着
吸手付蓋				
288	16.6+	25.3		体外面叩き後ヨコナデ、内面同心円文、底部不定方向ナデ、左回転、底内部付近墨付着
直口蓋				
291	(5.1)	8.5		体部の1/3回転へラケズリ、底部は全体をナデ、右回転
292	4.6	5.3		体部の1/3回転へラケズリ、底部は不定方向にナデ、右回転
第2期型式				
293	5.8	6.7		体部は1/2回転へラケズリ、底部は周囲をナデ、右回転
294	(8.1)	5.7+		体部・底部とともに調整は不明、右回転
第3期型式				
295	6.3	5.7		頭部まで回転へラケズリ、底部は「□」字にナデ、左回転、外外面に墨が付着
296	(7.2)			(11.6) 体部・底部ともに調整は不明、右回転
短瓶使用蓋				
297	17.1	5.8		体部はヨコナデ、見込みを「×」にナデ、左回転、内面に墨の痕跡。
第2期型式				
298	16.8	3.9+		体部はヨコナデ、見込みを不定方向にナデ、右回転。
第3期型式				
299	—	—		体部はヨコナデ、見込みを「×」にナデ、右回転、天井部内面に墨付着。
短瓶底				
第1期型式				
300	10.0	9.8+		体部はヨコナデ後横方向撥目、底部調整は不明、右回転
第2期型式				
301	不明	13.8+		体部は1/3までヘラケズリ、底部調整は不明、右回転
広口蓋				
第3期型式				
302	(12.2)	4.6+		体部・底部調整とも不明、左回転
四耳壺				
303				体外面縦方向叩き後横方向撥目、内面同心円文、右回転、双耳壺の可能性有
304				体外面は縦方向の叩き、内面は同心円文、右回転
錐A				
第1期型式				
309	15.7	6.2		体部外面は1/2まで回転へラケズリ、見込みを「+」にナデ、底部は不定方向へラケズリ
第2期型式				
310	15.6	7.8		体部は回転ナデ、底部を回転へラケズリ、底部外面はヘラケズリ、右回転
311	17.4	8.9+		体部は1/2まで回転へラケズリ、見込み底部調整とも不明、右回転
312	25.9	6.3+		体部・底部調整不明、右回転
第3期型式				
313	15.1	6.4+		調整は不明、右回転

体B

第1期型式

315 13.4 5.4 体外側2/3まで回転ヘラケズリ、見込みは一定方向にナデ、底外面は不定方向ヘラケズリ

第2期型式

314 15.4 8.0 体外側はヨコナデ、見込みは不定方向にナデ、底外面は回転ヘラケズリ、右回転

体C

316 26.9 10.3 体部ヨコナデ、見込み一定方向ヘラケズリ、底面ヘラケズリ後ナデ、右回転、内面に墨の痕跡

高杯

No. 器高 腕部高 杯部高 調整および備考

289 16.3 7.9 4.5 杯部外側1/2まで回転ヘラケズリ、見込みは「×」にナデ、右回転

290 不明 3.8+ 不明 杯部の調整は不明、右回転、見込み一部に墨付着

円面鏡

No. 体部径 海部高 器高 形態状的特徴

305 17.6 20.6 6.8 長方形透を2箇所(推定)。陸部周囲に墨を持つ。脚部は歯足状形態。

306 16.9 -- 2.6+ 脚部以下欠損のため不明。海部はごく浅く、陸部は周囲に墨を持つ。

307 -- 18.7 2.8+ 脚部以上欠損のため不明、脚部は脚部の外側に墨り付けられ大きな棗をなす。

308 -- 20.6 6.5+ 下方広がりの長方形透を9箇所(推定)持つ。

横瓶

No. 器高 体部高 最大長 最大径 調整および備考

第1期型式 318 不明 不明 不明 体部外側に一部叩きを残すが調整不明、右回転

第2期型式

317 21.9+ 19.3 29.2 19.3 体外側は格子状叩き後端方向クシガキ、右回転、口縁部直下に墨付着

319 3.7+ ---- ---- 体部の調整不明、右回転

平瓶

No. 口径 器高 体部高 調整および備考

第2期型式

320 11.8 16.2 10.1 体部1/3回転ヘラケズリ、底外面回転ヘラキリ後周間回転ナデ、右回転、体部内外面と底部に墨付着、体部外側に墨付着

第3期型式

321 不明 不明 6.9+ 体外側回転ヘラケズリ、底外面回転ヘラキリ後周間回転ナデ、右回転、内面に墨付着
322 不明 3.0+ 3.0 体外側を1/2回転ヘラケズリ、底外面は一方向ヘラキリ後全体をナデ、右回転

カメ

No. 口径 器高 指数 調整および備考

第1期型式

323 19.0 43.3 39.0 施文は無い。体部外側は縦方向の叩き後横方向刷毛目、左回転。

324 45.3 44.5+ 83.2 類部は2-2条沈線間に2条波状文、体外側は縦方向平行叩き、右回転

325 35.0 65.9 60.9 類部2-2条沈線間に2条波状文、体外は左斜平行叩き後横方向刷毛目左

第2期型式

326 28.8 6.6+ 不明 類部に2-1条の沈線、体部外側調整は不明。

327 42.1 78.1+ 72.4 類部は2-1-1条の沈線間に3条の波状文、体部外側は縦方向平行叩き。

328 38.7 65.7+ 61.8 類部は2-1条の沈線間に二段の放射状文、体部外側は縦方向平行叩き。

第3期型式

329 27.9 11.4+ 不明 施文は無い。体部外側は縦方向平行叩き後横方向刷毛目。

330 17.2 23.7+ 26.6 施文は無い。体部外側は左右傾斜平行叩き後横方向刷毛目。

331 35.2 30.9+ 64.6 類部に沈線上段に粗波状文、体外側縦方向平行叩き横刷毛目、下段カキ目

332 46.2 69.4+ 74.2 類部に2-2状の沈線、体部外側は右傾斜平行叩き、左回転。

表II 土器類(杯A)一覧

No.	口径	器高	指数	調整および備考
杯A (A形態)				
第1期-I型式				
1	20.8	4.3	21	口縁部付近まで横方向へラミガキ、底部へラミガキ
2	(20.0)	5.0	25	剥離のため調整不明
第1期-II型式				
3	15.9	3.8	24	体部1/3横方向へラミガキ、底部へラケズリ後へラミガキ体部内面放射状暗文
4	15.7	3.8	24	体部ヨコナテ、底部不定方向へラミガキ、体部内面一段斜放射状暗文
第1期-III型式				
5	(13.2)	3.1	23	体部1/2横方向へラミガキ、底部指頭圧後へラミガキ、内面放射状・螺旋暗文
6	12.5	3.0	24	体部1/2へラケズリ後横方向へラミガキ、底部へラケズリ後一方へラミガキ
第2期-I型式				
7	(18.6)	5.3	28	体部1/3横方向へラミガキ、底部指頭圧後へラミガキ、内面一段斜放射状・螺旋暗文
第2期-II型式				
8	15.8	4.6	29	体部ヨコナテ、底部調整不明、体部内面一段斜放射状暗文
9	(15.8)	(4.5)	28	体部1/2横方向へラミガキ、底部調整不明、体部内面一段斜放射状暗文
第2期-III型式				
10	(14.4)	(3.9)	27	体部1/3横方向へラミガキ、底部調整不明、体部内面斜放射状暗文
11	14.4	3.7	26	口縁部付近まで横方向へラケズリ、底部指頭圧後へラミガキ
12	(14.7)	3.9	27	体部ヨコナテ、底部調整不明、体部内面斜放射状暗文
13	(13.4)	3.6	27	体部2/3へラケズリ後横方向へラミガキ、底部指頭圧後へラミガキ
14	(12.1)	2.8+	--	体部横方向へラミガキ、底部指頭圧後不定方向へラミガキ
15	11.7	3.1	26	体部1/2へラケズリ後横方向へラミガキ、底部へラケズリ後不定方向へラミガキ
第3期-I型式				
16	(19.2)	4.6	24	体部2/3へラケズリ後横方向へラミガキ、底部へラケズリ後「□」へラミガキ、体部斜放射状暗文
第3期-II型式				
17	(15.0)	3.6	24	体部ヨコナテ、底部調整不明、体部内面に一段の斜放射状暗文
18	14.8	3.4	23	体部2/3へラケズリ後横方向へラミガキ、底部へラケズリ後へラミガキ、全体に剥離が著しい
19	14.8	3.1	21	体部2/3へラケズリ後横方向へラミガキ、底部調整不明、体部内面斜放射状暗文
第3期-III型式				
20	13.2	3.1	23	体部ヨコナテ、底部へラケズリ後「□」へラミガキ、体部内面斜放射状暗文、剥離著しい
21	(12.4)	3.1	25	体部2/3横方向へラミガキ、底部へラミガキか、体部内面斜放射状・螺旋暗文
杯A (B型式)				
第1期-I型式				
22	(19.8)	5.2	26	体部ヨコナテ、底部へラケズリ後へラミガキ、体部内面放射状暗文
第1期-II型式				
23	(16.4)	4.8	29	体部ヨコナテ、底部へラケズリ後へラミガキ、体部内面斜放射状暗文
第2期-II型式				
24	16.7	5.1	31	底体部横方向へラミガキ、底部へラケズリ後不定方向へラミガキ、内面二段斜放射状暗文
25	16.3	4.8	29	体部ヨコナテ、底部へラミガキ、見込みに短い斜放射状暗文
第3期-II型式				
26	(16.2)	3.7	23	底体部横方向へラミガキ、底部調整不明、剥離著しい
27	15.6	3.5	22	体部1/3横方向へラミガキ、底部指頭圧後へラミガキ、体部内面斜放射状暗文

表12 土器器(杯C)一覧

No	口径	器高	指数	調整および備考
杯C				
第1期-II型式				
40	(14.0)	3.9	27	体部外面1/3をヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、底部は指頭圧後ヘラミガキか
41	14.2	3.8	27	体部外面1/3をヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、底部は指頭圧後ヘラミガキ体部内面一段斜放射状暗文・見込みに短い放射状暗文
42	(14.0)	3.6	26	口縁部付近までヘラケズリ、底部はヘラケズリ後不定方向のヘラミガキ
43	(13.5)	3.4	25	体部外面1/3をヘラケズリ、底部外面調整不明
44	(13.4)	(3.3)	25	体部外面1/3をヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、底外面指頭圧後不定方向ヘラミガキ
45	12.9	3.1	24	体部、底部外縁ともヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、底部中央は指頭圧
46	12.6	3.3	26	体部外面は横方向のヘラミガキ、底部はヘラケズリ後不定方向のヘラミガキ
49	12.5	3.2	26	体部外面1/2を横方向のヘラミガキ、底部外面をヘラケズリ後不定方向のヘラミガキ
48	12.4	(3.2)	26	体部外面1/2を横方向のヘラミガキ、底部外面の調整は不明
49	12.3	3.2	26	体部外面口縁部まで横方向のヘラミガキ、底外面ヘラケズリ後不定方向のヘラミガキ
第2期-I型式				
50	13.4	4.1	31	口縁部付近までヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、底部不定方向のヘラミガキ
51	(13.2)	(3.9)	30	体部外面1/3を刷毛目調整、底部調査は不明
52	12.9	4.2	33	体部外面1/3を横方向のヘラケズリ、底部は一方向にヘラケズリ
53	12.7	4.0	32	口縁部付近まで横方向のヘラケズリ、底部外面調査は不明
54	12.7	4.0	32	口縁部付近まで横方向のヘラケズリ、底部はヘラケズリ後不定方向のヘラミガキ
55	12.6	3.8	30	体部1/2を横方向のヘラケズリ、底部はヘラケズリ後刷毛目調整
第3期-I型式				
56	15.4	4.1	27	体部外面口縁部付近までヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、底外面ヘラケズリ後不定方向のヘラミガキ
第3期-II型式				
57	13.2	3.7	28	体部外面は横方向のヘラケズリ、底部外面は不定方向のヘラケズリ
58	(12.5)	(3.3)	26	体部外面1/2を横方向のヘラミガキ、底部外面は指頭圧後不定方向のヘラミガキ
59	12.3	3.1	25	体部外面1/2をヘラケズリ後横方向のヘラケズリ、底部外面調査は不明
60	12.0	3.3	28	体部外面は口縁部付近まで横方向のヘラケズリ、底部外面は一方向の後ヘラケズリ
61	12.0	3.3	28	体部外面は口縁部付近までヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、底部は指頭圧
62	11.7	3.2	27	体部外面は指頭圧、底部も指頭圧か

表13 土器器(杯B・皿・鉢)一覧

No	口径	器高	指数	調整および備考
杯B				
第1期型式				
28	(14.8)	5.0	34	剥離が著しく調整不明
第2期型式				
29	(14.8)	4.5	30	体部1/2をヘラケズリ後ヘラミガキ、底部指頭圧後ヘラミガキ、連弧状暗文
第3期型式				
31	17.0	5.1	30	体部ヨコナデ、底部調整不明、体部内面斜放射状暗文
皿				
第2期型式				
33	20.1	3.0	15	体部1/2をヘラミガキ、底部一方向にヘラミガキ、体部・見込みに斜放射状暗文
34	19.7	3.1	16	体部1/2をヘラミガキ、底部「□」にヘラミガキ、内面斜格子状・螺旋状文
35	19.6	3.0	15	体部1/2をヘラミガキ、底部ヘラケズリ後不定方向ヘラミガキ、体部内面斜放射状暗文
36	18.6	3.1	16	体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ後不定方向ヘラミガキ
第3期形態				
37	19.4	(2.9)	15	体部1/2ケズリ後ヘラミガキ、底部ケズリ後ヘラミガキ、底部内面斜格子状暗文
38	(19.2)	(3.3)	17	体部1/2をヘラミガキ、底部ケズリ・指頭圧後不定方向ヘラミガキ、内面斜格子状暗文
39	(18.8)	3.0	16	体部1/2をヘラミガキ、底部ケズリ・指頭圧後不定方向ヘラミガキ、内面斜格子状暗文
鉢				
第1期型式				
63	11.3	3.6	32	口縁部付近までヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、底部は一方向のヘラミガキ

第2期型式			
64	13.6	(4.3)	32 体部1/3まで刷毛目調整、底部調整不明
65	13.0	4.7	36 口縫部付近までヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、底部は不定方向ヘラミガキ
66	12.4	(4.0)	32 体部外側1/2と底部外側を刷毛目調整
67	(11.8)	3.9	33 口縫部付近まで横方向のヘラケズリ、底部は一方向のヘラケズリ
第3期型式			
68	12.8	3.9	30 口縫部付近まで横方向のヘラケズリ、底外面も不定方向ヘラケズリ
69	12.0	4.2	35 体部1/3を横方向のヘラケズリ、底部は不定方向ヘラケズリ
70	(11.6)	(4.1)	35 体部1/2を横方向のヘラケズリ、底部は「+」字にヘラケズリ
休			
第1期型式			
71	(15.4)	(5.3)	34 口縫部付近までヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、体部内面に放射状暗文
第2期型式			
72	(19.0)	5.5+	-- 体部はヘラケズリ後横方向のヘラミガキか、体部内面に斜格子状暗文
73	16.6	(4.7)	28 口縫部付近まで横方向ヘラケズリ、底部調整不明、外側に懸付着
74	14.9	(4.7)	32 口縫部付近までヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、底部不定方向のヘラミガキか
76	19.3	7.2+	-- 口縫部付近まで横方向のヘラミガキ、体部内面には斜放射状暗文
第3期型式			
75	16.5	5.4	33 口縫部付近まで横方向のヘラケズリ、底部はヘラケズリ後不定方向の刷毛目調整

表14 土蔵器(東)一覧

No.	口径	器高	調整および備考
變			
第1期型式			
頸部に段を持つ形態			
91	(19.5)	4.6+	口縫部ヨコナデ、体部外側横方向ヘラケズリ、体部下半調整不明、外側スス付着
92	(16.7)	3.9+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
93	(16.2)	7.1+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ、外側スス付着
94	(15.6)	4.9+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ、外側スス付着
95	(13.0)	8.0+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
96	(12.6)	3.6+	口縫部ヨコナデ、内面横方向ヘラケズリ、外側スス付着
段の無い形態			
97	22.2	9.9+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ、外側スス付着、頸部沈線
98	21.1	6.2+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
99	(18.4)	5.5+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
100	(18.0)	5.8+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
101	(16.4)	4.3+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
102	15.8	6.4+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
103	(15.6)	7.7+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
104	(15.4)	5.6+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
105	(14.9)	6.2+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
106	(14.0)	4.8+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ、外側スス付着
第2期型式			
107	(25.6)	9.7+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向
108	(24.7)	7.1+	口縫部・体部外側ヨコナデ
109	23.8	10.6+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
110	(24.6)	5.2+	口縫部・体部外側ヨコナデ、体部内面ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ
111	(24.3)	5.6+	口縫部・体部外側ヨコナデ、体部内面横方向ヘラケズリ
112	22.6	9.5+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
113	(22.0)	5.7+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
114	(15.8)	6.2+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ハケメ、下半横方向ヘラケズリ
115	(15.6)	6.2+	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面調整不明、外側スス付着
116	(14.7)	17.4	口縫部ヨコナデ、体部外側縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ

第3期型式

- 117 22.8 9.0+ 口縁部ヨコナデ、頭部外面指頭圧、体部外面縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
 118 (22.1) 13.5+ 口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面指頭圧
 119 (18.4) 6.8+ 口縁外面ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面口縁部から横方向ハケメ
 120 (16.1) 7.5+ 口縁部ヨコナデ、頭部外面指頭圧、体部外面縦方向ハケメ、内外全面横方向ハケメ
 121 (15.9) 6.2+ 口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
 122 15.9 15.1 口縁部外面ヨコナデ、内面横方向ハケメ、体部外面縦方向ハケメ内面横方向ヘラケズリ
 123 (15.6) 6.2+ 口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ、外面スス付着
 124 (15.6) 6.3+ 口縁部・体部内面ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、外面上スス付着
 125 (14.2) 7.1+ 口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面指頭圧、外面上スス付着
 126 15.2 16.7+ 口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面上半指頭圧・下半横方向ヘラケズリ
 127 (13.8) 15.3+ 口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面不定方向ヘラケズリ

表15 土器部(その他)一覧

No.	口径	器高	調整および備考
深鉢			
第2期型式			
77	(19.4)	9.0+	口縁部ヨコナデ、体部外面下半横方向ハケメ後ナデ、内面下半横方向ヘラケズリ
第3期型式			
78	(25.8)	13.4+	口縁部ヨコナデ、体部内外面は剥離が著しく調整不明
取手付鉢			
第1期型式			
79	(25.0)	9.2+	体部上半内外面ヨコナデ、内面下半指頭圧、外面上の剥離著しい、棒状取手
第2期型式			
80	(26.4)	9.2+	内外面ともヨコナデ、平面三角形状取手、口縁部外面に粗面圧
桶			
第1期型式			
81	(38.0)	7.3+	口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面調整不明
82	(32.0)	6.6+	口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ
第2期型式			
83	(40.0)	8.3+	口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ、外面上スス付着
84	(39.8)	8.6+	口縁部ヨコナデ、体部外面調整不明、内面横方向ヘラケズリ
85	(38.6)	8.3+	口縁部ヨコナデ、体部外面調整不明、内面横方向ヘラケズリ、外面上スス付着
86	(36.6)	5.5+	口縁部ヨコナデ、体部外面調整不明、内面横方向ヘラケズリ、剥離著しい
第3期型式			
87	(38.2)	5.6+	口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ、外面上スス付着
88	(36.8)	9.2+	口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ、外面上スス付着
89	(33.8)	10.5+	口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ、外面上スス付着
90	(34.2)	6.2+	口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面調整不明
No.	器高	口径	備考
高杯			
第1期型式			
128	5.8+	(16.7)	——杯部調整剥離のため不明、円盤充填技法
第2期型式			
129	6.2+	不明	不明 腿柱部10角面取、脚柱部ハケメの後ヨコナデ、同内部へラケズリ後ナデ
130	6.2+	不明	12.0 腿柱部ハケメ後10角面取、同内部へラケズリ後ナデ
第3期型式			
131	7.6+	不明	不明 腿柱部ハケメ後10角面取、同内部へラケズリ後ナデ
132	8.1+	不明	不明 腿柱部ハケメ後10角面取、同内部ハケメ後ナデ
133	6.3+	不明	不明 腿柱部9角面取、同内部へラケズリ後ナデ、杯頭と脚部墨付着
134	7.7+	不明	不明 腿柱部10角面取、同内部へラケズリ後ナデ
135	8.3+	不明	不明 腿柱部8角面取、同内部へラケズリ後ナデ
136	7.2+	不明	不明 腿柱部10角面取、同内部へラケズリ後ナデ

表16 SD-4・5出土土器一覧

No.	器種	口径	器高	指標	調整および備考
SD-5出土土器					
432	須恵杯蓋	12.5	4+	—	外側の約2/3を回転ヘラケズリ、見込みはヨコナデ、天井に2段のカキメ
433	須恵杯蓋	不明	4.5+	—	外側の約2/3を回転ヘラケズリ、見込みはヨコナデ、天井に1段のカキメ
605	須恵杯?	11.0	2.5+	—	外側面の調整は不明
604	須恵杯?	10.5	1.8+	—	外側面の調整は不明
1	須恵杯A	9.8	4.1	42	底部を回転ヘラキリ、見込みは一定方向にナデ
606	須恵杯B	不明	2+	—	底部を回転ヘラケズリ、見込み調整は不明
493	須恵甕	22.2	4.5+	—	体部内外面の調整は不明
SD-4出土土器					
481	須恵杯蓋	12.8	3.7+	—	底部の1/2を回転ヘラケズリ、見込みは不定方向にナデ
475	須恵杯身	11.1	5.0	45	受部は水平、体部の2/3を回転ヘラケズリ、見込みは一方向にナデ
489	須恵杯身	12.1	3.8	31	受部は水平、体部の1/2を回転ヘラケズリ、見込みは一方向にナデ
462	須恵高杯	14.0	4.0+	—	受部は内脇、体部の2/3を回転ヘラケズリ、見込みは一方向ナデ
423	須恵高杯	14.1	15.8	—	受部は内脇、体部の1/2を回転ヘラケズリ、見込み調整は不明
496	須恵甕	20.1	8+	—	体部外面は平行叩き後横クシメ、内面はヨコナデ
126	先生甕	19.0	5.1+	—	体部内外面の調整は不明

表17 濃内出土古墳時代土器一覧

No.	口径	器高	指標	調整および備考
土器類				
132	19.7	13.0	*	体部外面を縱方向の刷毛目、内面をナデ仕上げ、頭部をヨコナデ
117	20.0	7.6+	*	体部外面縱方向刷毛目、内面へラケズリ、頭部縱方向刷毛目後ヨコナデ
125	22.4	5.4+	*	体部外面をヨコナデ、内面を縱方向のヘラケズリ、頭部をヨコナデ
120	22.4	7.2+	*	体部外面・内面・頭部ともヨコナデ
162	19.5	5.4+	*	体部外面を縱方向の刷毛目、内面を指頭圧、頭部をヨコナデ
須恵器・杯蓋				
486	15.0	4.5+	—	外側の1/2を回転ヘラケズリ、天井部の調整は不明、右回転
474	15.1	5.2	34	外側の2/3を回転ヘラケズリ、天井部内面を「十」にナデ、右回転
601	14.4	4.5	31	外側の1/2を回転ヘラケズリ、天井部内面を一定方向にナデ、右回転
479	14.5	4.5	31	天井部外側のみ回転ヘラケズリ、天井部内面を一定方向にナデ、右回転
168	11.7	3.8	26	天井部外側のみ回転ヘラケズリ、天井部内面を一定方向にナデ、右回転
80	11.5	3.7	32	天井部外側のみ回転ヘラケズリ、天井部内面を一定方向にナデ、右回転
須恵器・杯身				
485	13.2	3.8	29	受部は水平、体部の1/2を回転ヘラケズリ、見込み調整は不明
476	13.0	4+	—	受部は水平、体部の2/3を回転ヘラケズリ、見込み調整は不明
487	12.2	3.8	31	受部は水平、体部の1/2を回転ヘラケズリ、見込みは一定方向にナデ
473	13.4	4.1	31	受部は水平、底部のみ回転ヘラケズリ、見込みは一定方向にナデ
472	7.3	4.6	63	受部は水平、底部の2/3を回転ヘラケズリ、見込み調整は不明
488	11.1	4.6	41	受部は水平、底部の2/3を回転ヘラケズリ、見込み不定方向にナデ
須恵器・高杯				
434	13.1	8.4+	—	体部の2/3を回転ヘラケズリ、脚部はヨコナデ、長方形三方透を設ける
439	11.0	9.4	—	体部の2/3を回転ヘラケズリ、脚部はヨコナデ、長方形三方透を設ける
425	12.8	8.2	—	体部1/2を回転ヘラケズリ、脚部ヨコナデ、透ナシ、見込みは一定方向ナデ、右回転
431	11.7	7.8	—	体部2/3回転ヘラケズリ、脚部ヨコナデ、方形三方透、見込み「+」ナデ、右回転
435	不明	7.7+	—	体部2/3回転ヘラケズリ、脚部ヨコナデ、円形三方透、見込み一定方向ナデ、右回転

No.	口径	器高	調整および参考								
須恵器 風											
415 不明	15.2+		頭部まで回転ヘラケズリ、沈線間にカキメ、底部回転ヘラケズリ右回転、頭部と肩部に沈線								
414 不明	1.7+		体部1/3回転ヘラケズリ、沈線間にカキメ、底部回転ヘラ、体部と頭部に沈線、右回転								
410 不明	8.4+		体部の1/3を回転ヘラケズリ、頭部は欠損、底部を回転ヘラケズリ、右回転								
413 不明	6.6+		体部はココナデ、頭部は欠損、底部を不定方向にヘラケズリ、右回転								
須恵器 提瓶											
429 不明	15.4+		体部外面を回転ヘラケズリ後片面にクシメ、内面をヨコナデ、頭部はヨコナデ、右回転								
須恵器 瓶											
600 24.2	8.1+		体部外面を縦方向の平行叩き、内面に同花円文が残る、頭部はヨコナデ								
443 13.2	11.1+		体部外面を縦方向平行叩き後横方向クシメ、内面をヨコナデ、頭部は平行叩き後ヨコナデ								

表14 木器(容器)一覽

曲物蓋

No.	出土遺構	側板径	器高	穿孔数	本取	遺存	No.	出土遺構	側板径	器高	穿孔数	本取	遺存
-----	------	-----	----	-----	----	----	-----	------	-----	----	-----	----	----

第Ⅰ型式

2 SD-0	(25.3)	---	(4)	板目	不良
--------	--------	-----	-----	----	----

第Ⅱ-1型式

3 北東隅	17.4	6.3	4	板目	良好
-------	------	-----	---	----	----

第Ⅱ-2型式

5 SD-1	17.8	4.0	(4)	板目	良
--------	------	-----	-----	----	---

第Ⅱ-3型式

6 SD-1	17.8	3.2	4	板目	良好
--------	------	-----	---	----	----

第Ⅲ-1型式

10 SD-1	16.6	5.4	(4)	板目	良好
---------	------	-----	-----	----	----

第Ⅲ-2型式

11 SD-1	17.0	4.4	(5)	板目	良
---------	------	-----	-----	----	---

第Ⅲ-3型式

12 SD-1	16.8	3.0	4	板目	良好
---------	------	-----	---	----	----

有孔底板

No.	出土遺構	口径	器高	板厚	本釘数	本取
-----	------	----	----	----	-----	----

13 SD-1	16.6	---	0.9	5	板目	
---------	------	-----	-----	---	----	--

14 "	16.4	---	0.5	(5)	板目	
------	------	-----	-----	-----	----	--

曲物身

第Ⅱ-1型式						
--------	--	--	--	--	--	--

16 SD-1	18.0	4.4	---	7	板目	
---------	------	-----	-----	---	----	--

第Ⅲ-2型式

17 SD-1	16.9	2.4	---	6	板目	
---------	------	-----	-----	---	----	--

18 "	17.0	2.1	---	5	板目	
------	------	-----	-----	---	----	--

曲物身底板

21 SD-1	15.2	---	0.7	4	板目	
---------	------	-----	-----	---	----	--

桶底板

23 SD-1	20.3	---	3.2	(6)	板目	
---------	------	-----	-----	-----	----	--

御敷底板

22	(41.7×26.4)	---	0.7	---	板目	
----	-------------	-----	-----	-----	----	--

槽 SD-1

No.	出土遺構	全長	最大幅	最小幅	最大厚	最小厚	木取り	遺存	備考
-----	------	----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----

24 SD-1	(54.2)	16.4	---	7.2	6.6	タテ木	良		取手が付くか
---------	--------	------	-----	-----	-----	-----	---	--	--------

27 "	(14.2)	---	---	6.7	---	タテ木	良好		
------	--------	-----	-----	-----	-----	-----	----	--	--

No.	出土遺構	口径	器高	木取	遺存	No.	出土遺構	口径	器高	木取	遺存
-----	------	----	----	----	----	-----	------	----	----	----	----

ロート形木器											
--------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

25 SD-1	18.0	3.1	横木	良好							
---------	------	-----	----	----	--	--	--	--	--	--	--

盤

No	出土遺構	口径	器高	木取り	遺存	No	出土遺構	口径	器高	木取り	遺存
第I-b型式						第I-c型式					
28	SD-1	(23.1)	1.6	横木	良好	29	SD-1	(23.7)	1.8	横木	良好
第II-a型式						第II-b型式					
30	SD-1	23.6	1.5	横木	良好	31	SD-1	(22.8)	1.6	横木	良好
第III-b型式						第III-c型式					
32	SD-1	(20.7)	2.0	横木	良好	33	SD-1	19.8	1.5	横木	良好
第IV-b型式											
34	SD-1	(18.2)	1.6	横木	良好						

表19 木器(農工具)一覧

馬頭	No	出土遺構	全長	最大径	最小径	木取り	遺存	備考
白木	35-1	SD-1	108.5	9.3	6.6	1/4割材	良好	
歯部			最大長	最小長	最大厚	最小厚	木取り	遺存 備考
	35-1.4		33.9	(32.4)	3.3	2.4	削り材	不良 総数4本
引手部			全長	最大幅	最小幅	最大厚	最小厚	木取り 遺存 備考
	35-2.3		60.1	4.2	2.0	2.4	1.2	板目 不良 同規模2本
歯	No	出土遺構	全長	最大幅	最小幅	最大厚	最小厚	木取り 遺存 備考
36	SD-1	26.0+	12.8+	3.8	2.3	1.9	板目取	不良 又歯の可能性
歯	57	SD-1	92.7	18.5	2.3	2.4	1.7	板目取 不良 未製品か
えぶり	37	SD-1	41.5	13.1	---	1.7	1.5	板目取 良好 歯部摩耗著しい
横棒	No	出土遺構	全長	最大径	最小径	木取り	遺存	備考
38	SD-1	42.5	7.2	3.3	芯待ち	良好	未使用品	
39	"	39.4	7.1	3.2	芯待ち	不良	体部に打痕有	
40	"	24.6	8.4	3.0	芯待ち	良	体部に打痕有	
41	"	25.1	6.7	2.9	芯待ち	良	体部に打痕	
42	"	20.1	6.2	2.5	芯待ち	不良	未使用品	
第2形態								
44	SD-1	26.9	5.1	2.9	芯待ち	良	体部に樹種・未製品	
45	"	28.4	6.2	3.3	芯待ち	不良	体部に打痕有	
46	"	34.7	5.6	2.9	芯待ち	良好	未製品	
47	"	37.1	7.6	2.7	芯待ち	良	体部に打痕有	
第3形態								
48	SD-1	23.7	5.7+	1.8	芯待ち	不良	体部に打痕有	
繩								
49	SD-1	104.8	10.1	3.7	芯待ち	良	体部に樹種・未製品	
50	"	35.5+ 38.2+	9.2	---	芯待ち	不良	体部に打跡	
51	"	47.5+	5.8	3.6	芯待ち	良好	未使用品	
52	"	44.2+	8.2	---	芯待ち	不良	半分残存	
53	"	39.7+	8.1	---	半截材	不良	未使用品か	
木綿								
54	SD-1	43.2+	6.3	---	芯待ち	良	半分残存	
第1型式								
55	SD-1	18.8	4.7	2.1	芯待ち	不良	一部に自然剥離	
56	"	17.8	4.9	2.4	芯待ち	不良	一部に自然剥離	
57	"	21.5	5.4	3.0	芯待ち	良好	一部に樹皮残	
58	"	23.9	5.2	4.1	芯待ち	良好		
59	"	21.9	4.2+	2.2	芯待ち	不良	全体的に剥離	

第2-a型式

63	SD-1	(21.6)	5.6	5.0	芯待ち	不良	半載状態で残
64	"	22.2	5.2	2.9	1/4割材	良好	調整著しく粗
65	"	21.5	5.2	2.7	芯待ち	不良	約半分が剥離
66	"	19.8	4.7+	2.6+	芯待ち	不良	全体的に剥離
67	"	18.2	4.1	1.8	半載材	良	
68	"	17.6+	5.2	2.8	芯待ち	良好	半分欠損
69	"	11.3+	4.2	2.2	芯待ち	良	一部に自然

第2-b型式

70	SD-1	21.6	5.7	4.4	芯待ち	不良	
71	"	10.8+	5.5	---	芯待ち	良好	半分欠損

第2-c型式

72	SD-1	15.2	10.0	5.6+	芯待ち	良	自然面残存
----	------	------	------	------	-----	---	-------

第2-d型式

73	SD-1	20.9	6.7	3.0	半載材	良好	若干扁平形
----	------	------	-----	-----	-----	----	-------

第3型式

74	SD-1	21.2	6.9	3.8	半載材	良	
----	------	------	-----	-----	-----	---	--

柄状木器

No.	出土遺構	全長	最大幅	最小幅	最大厚	最小厚	本取り	遺存	備考
唐物柄状									
55	SD-1	55.6+	6.6	2.8	3.2	2.1	板目	良好	枝割れ部使用か
79	"	16.3+	6.2+	---	3.7	---	極目	不良	枝割れ部使用か
80	"	29.4+	6.3	3.2	2.6	2.1	極目	良	枝割れ部使用か
縦の柄状									
75	SD-1	21.7+	3.8	3.2	3.3	2.6	板目	良	基部側を欠損
76	"	22.3+	3.4	2.2	2.1	2.0	極目	良	基部側を欠損
77	"	20.6+	2.9	2.1+	2.8	---	芯待ち	不良	基部側を欠損
78	"	17.4+	4.8	2.3	1.9	1.6	極目	不良	基部側を欠損

表28 木器(その他)一覧

No.	出土遺構	全長	最大幅	最小幅	最大厚	最小厚	本取り	遺存	備考	
竿										
81	SD-1	58.8	5.6	5.2	1.2	---	板目	良	縦掛け一部欠損	
葦草										
82	SD-1	59.8+	2.7	---	0.7	---	極目	良好		
83	北東隅	17.6	2.1	1.9	0.3	---	極目	良好	削りかけ無し	
人形										
85	SD-1	18.6+	3.6	3.2	1.0	---	板目	良好	顎の表現無し	
鳥形										
86	SD-1	7.6+	4.2	2.2	0.3	---	極目	良	他の器種か	
87	SD-1	18.4	2.3	2.0	0.3	---	極目	良好	表現なし	
羽子板										
88	SD-1	37.7	11.6	3.5	1.7	1.4	板目	不良		
鉗										
89	SD-1	10.5+	12.8	---	---	芯待ち	良			
下駄										
No.	出土遺構	全長	最大幅	最小幅	最大厚	最小厚	本取り	縫接	遺存	備考
90	SD-2	25.3	12.5	---	3.16	1.6	板目	縫接	遺存	良好

車状木器

No.	出土遺構	全長	最大径	木取り	遺存	No.	出土遺構	全長	最大径	木取り	遺存		
91	SD-1	50.1+	1.7	芯無し	良好	97	北東隅	25.6+	1.6	芯無し	良好		
92	"	30.8	1.4	芯無し	不良	98	SD-1	19.8+	1.4	芯無し	不良		
93	"	25.8	1.4	芯無し	良好	101	北東隅	13.8+	1.8	芯無し	良好		
94	"	22.9	1.9	芯無し	不良	102	SD-0	20.6+	1.2	芯無し	不良		
95	北東隅	21.9	1.4	芯無し	良好	103	SD-3	22.4+	1.4	芯無し	良好		
96	SD-1	26.3+	1.8	芯無し	不良								
	木針												
99	SD-0	21.7	1.3	芯無し	良好	106	SD-1	10.1	1.2	芯無し	良好		
100	SD-1	35.1	1.5	芯無し	良好	107	"	10.4	1.2	芯無し	良好		
	箸												
104	?-3	22.3	1.2	芯無し	良好	106	北東隅	14.5+	1.0	芯無し	良好		
No.	出土遺構	全長	最大幅	最小幅	厚さ	木取り	遺存				備考		
	自在												
108	SD-1	14.1	2.3	2.1	0.9	板目	良				使用率減なし		
	籠												
110	北東隅	33.1	2.6+	1.6	0.6	板目	良好				体部約3分の1残		
109	SD-0	7.2+	2.4	1.2	1.2	板目	良好				取手部分のみ		
	木印												
111	SD-1	20.4	3.6	2.2	3.5	割り材	良好						
	火薙臼												
112	北東隅	19.0	2.8	---	2.1	板目	良				未使用穴1つ有り		
113	SD-1	21.8	2.7	2.5	1.7	板目	良						
	齒器												
117	SD-1	24.6	4.8	3.5	2.6	1.4	板目	良			二分割		
	部材												
No.	出土遺構	全長	最大幅	最大厚	木取	遺存	No.	出土遺構	全長	最大幅	最大厚	木取	遺存
118	SD-1	46.8	3.5	4.0	板目	不良	120	SD-0	13.1+	1.3	0.8	板目	良好
119	"	23.4	1.4	0.9	板目	良好							
	用途不明												
121-1	SD-1	7.9	7.9	3.9	板目	良	127	SD-1	17.5	2.8	4.9	板目	良好
121-2	"	10.5	2.9	0.8	板目	良	128	SD-0	18.9	3.8	2.8	板目	良
122	北東隅	11.1	3.8	0.5	板目	良	129	SD-1	17.5+	4.8	4.4	芯待ち良	
123	SD-1	7.4+	2.2	1.7	板目	良	130	"	17.3	4.5	2.9+	芯待ち良好	
124	"	8.7+	3.1	2.3	板目	良好	131	SD-0	19.4	2.5	0.6	板目	良好
125	"	13.1+	4.4	2.9	板目	良好	132	SD-1	20.2+	2.4	1.1	板目	良好
126	"	31.9	3.8	2.1	板目	良							
No.	出土遺構	直徑	厚さ	木取り			No.	出土遺構	直徑	厚さ	木取り		
133	SD-1	11.0	1.3	板目			135	SD-1	14.7	3.4	板目		
134	"	15.1	0.8	板目									

表21 土器器(弥生時代~古墳時代)一覧

表				調整および備考
No.	口径	現高		
1	(20.1)	6.9+	口縁部ヨコナデ、体部外表面方向ハケメカ、内面ヘラケズリカ	
2	(16.8)	5.2+	口縁部ヨコナデ、体部外表面方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ、内面黒褐色付着	
3	(9.9)	12.5	口縁部ヨコナデ、体部外表面方向ハケメカ、内面ヘラケズリカ	
13	(13.8)	2.8+	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリカ、口縁端部に擬四線	
14	(14.9)	3.8+	口縁部ヨコナデ、体部外表面方向ハケメ、内面ヘラケズリ、外面スス付着	
15	(14.8)	6.7+	口縁部ヨコナデ、体部外表面方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ	
16	(12.8)	6.0+	口縁部ヨコナデカ、体部内外面調整不明	
29	(15.9)	4.8+	口縁部ヨコナデ、体部外表面方向ハケメ、内面横方向ヘラケズリ	
30	(16.4)	4.6+	口縁部ヨコナデ、体部外表面方向ハケメカ、内面横方向ヘラケズリ、外面スス付着	
31	(15.0)	4.5+	口縁部ヨコナデ、体部外表面調整不明、内面横方向板ナデ、外面スス付着	
32	(19.5)	4.7+	口縁部ヨコナデ、体部外表面方向ハケメ、内面ヘラケズリ、外面スス付着	
壺				調整および備考
No.	口径	現高		
7	(6.6)	6.1+	口縁部ヨコナデカ、体部外表面ナデ、内面ナデ	
9	(17.6)	8.1	口縁部ヨコナデ、頸部外表面ヘラミガキカ、内面ヨコナデカ	
10	(17.0)	7.4+	口縁部ヨコナデ、頸部外表面ハケメ、内面ヨコナデ	
11	(11.2)	4.1+	口縁部ヘラミガキ	
12	不明	7.0+	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	
鉢				調整および備考
No.	口径	現高		
8	(4.9)	3.1	口縁部ユビオサエ、体部外表面ナデカ、内面ユビオサエ	
17	(33.0)	6.4+	口縁部ヨコナデ、体部内外面ヨコナデ	
18	(20.8)	4.7+	口縁部ヨコナデ、体部内外面ヘラミガキカ	
高杯				調整および備考
No.	器高	口径	底部径	
6	6.5+	不明	(9.8)	脚柱部外表面ヘラケズリ、底部ナデ
19	5.0+	(14.1)	不明	杯底調整不明、外表面下半ヘラケズリカ
20	15.6+	不明	(14.8)	脚柱部外表面ヘラミガキ、底部外表面方向ヘラミガキ、内面横方向ハケメ
21	7.6+	不明	(13.4)	脚柱部外表面ナデカ、内面横方向ヘラケズリ、底部外表面ヨコナデ
26	9.2+	不明	(17.6)	脚柱部外表面ヘラミガキ、底部外表面ヨコナデ、内面ナデカ、透孔2個一列4方向
器台				調整および備考
No.	器高	口径	底部径	
22	6.7+	(18.6)	不明	杯部内外面調整不明
23	4.7+	(10.6)	不明	口縁部ヨコナデ、杯部内面横方向ヘラミガキ、外表面方向ヘラミガキ
27	9.2+	不明	(13.0)	脚柱部外表面ハケ後縦方向ヘラミガキ、内面横方向ヘラケズリ、底部内面横方向ハケメ
釜				調整および備考
No.	口径	器高		
5	(14.5)	7.8		天井部内外面ナデ、つまみ部下半横方向ヘラミガキ、上半ユビオサエ
24	(9.8)	4.5		天井部内外面横方向ヘラミガキ、つまみ部外表面ヨコナデ
25	(16.2)	7.6		天井部外表面ナデ、つまみ部外表面ヨコナデカ
28	(14.5)	6.0		天井部内外面ヨコナデ、つまみ部外表面横方向ヘラミガキ、中央部に穿孔
瓶				調整および備考
No.	器高	底部径		
4	8.9+	(8.2)		体部内外面横方向ハケメ、穿孔底部付近4方向



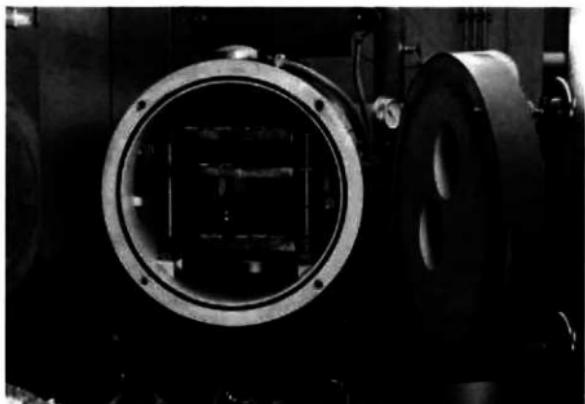
山垣造路造構全景(北より)

昭和58年8月31日



山垣造路造構埋め戻し風景

昭和59年1月19日



木簡の保存処理

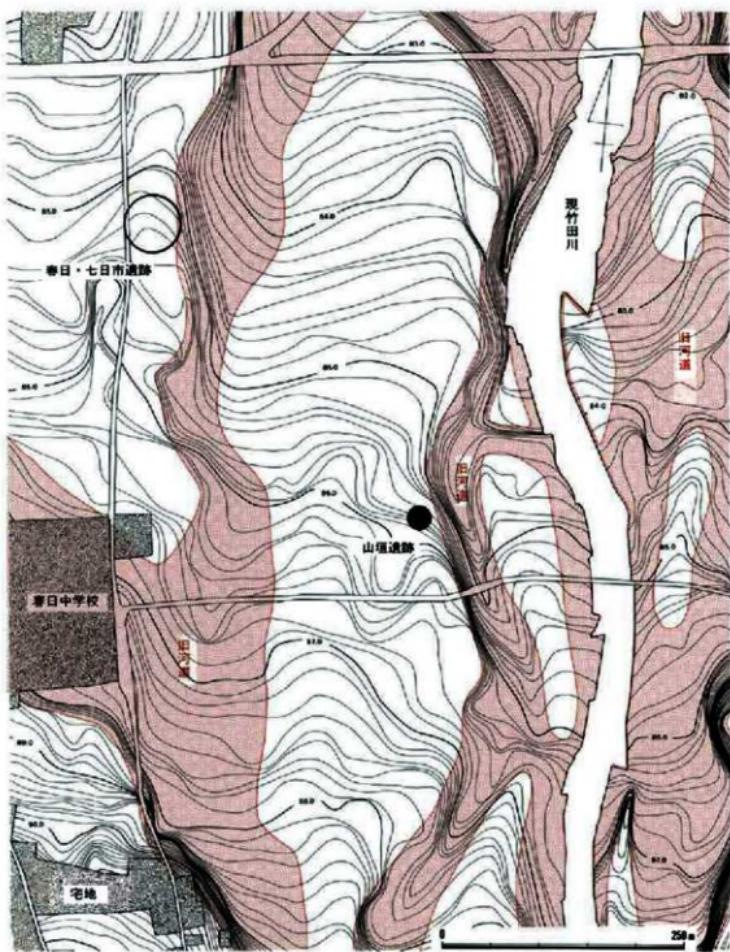
—真空凍結乾燥処理—

(昭和62年9月、奈良国立文化財研究所)

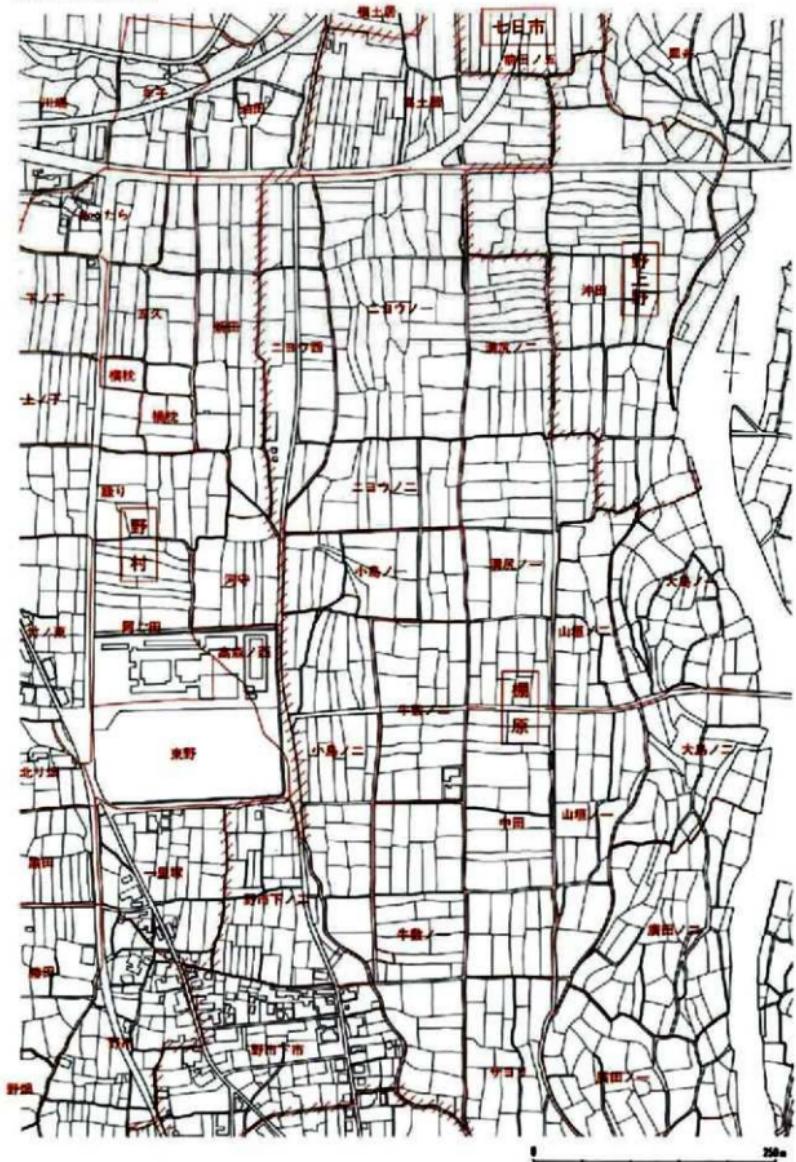


同 上

写 真 図 版



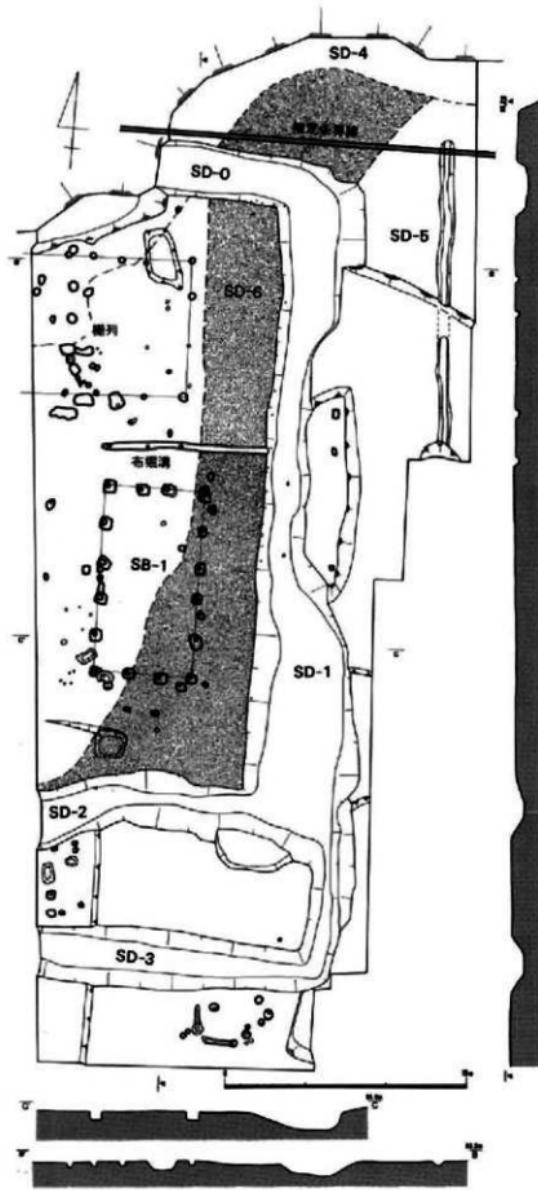
調査区周辺地形図





上. 南より
下. 東より

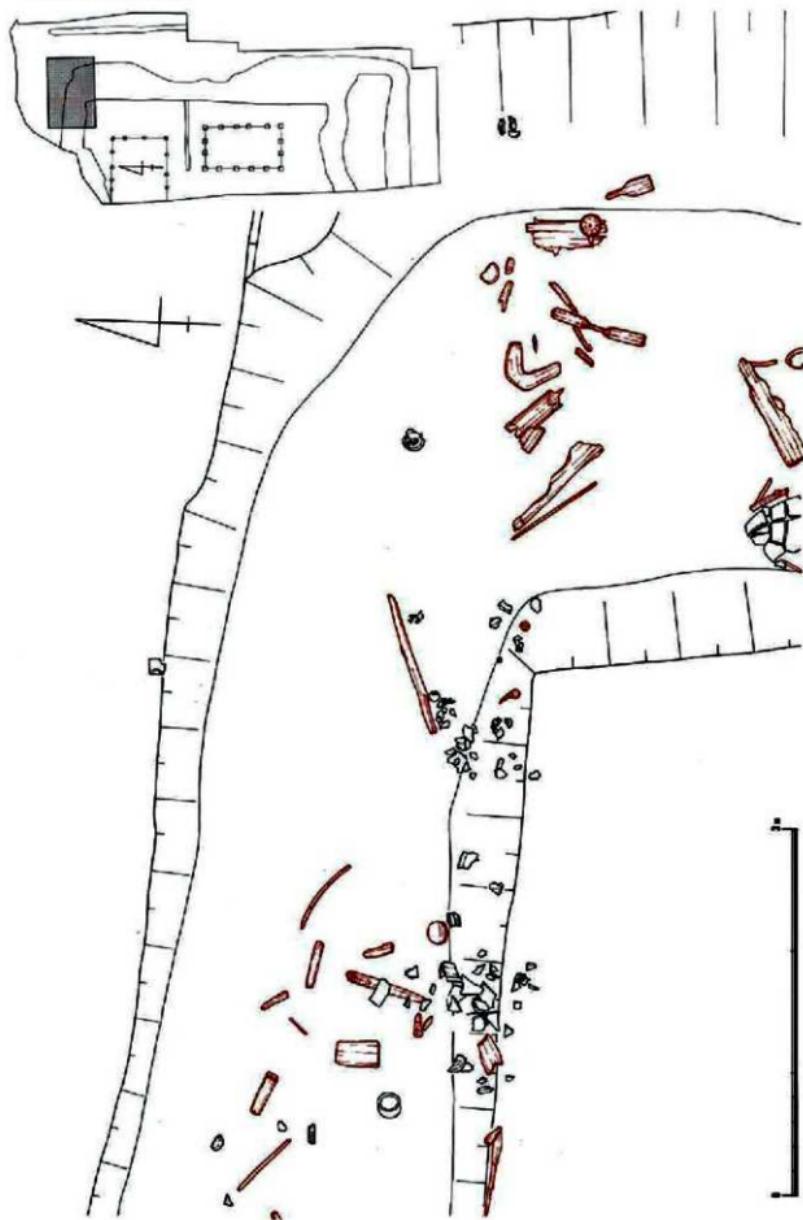
山垣遺跡遺構全景

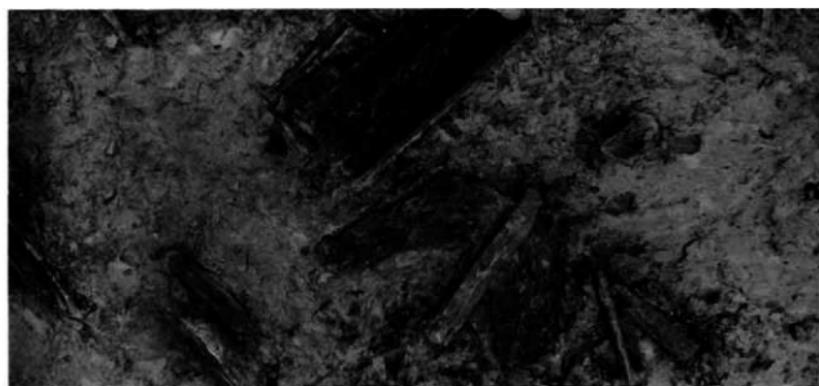




空中写真(ラジコンヘリコプターによる撮影)

漆内遗物出土状况(1)



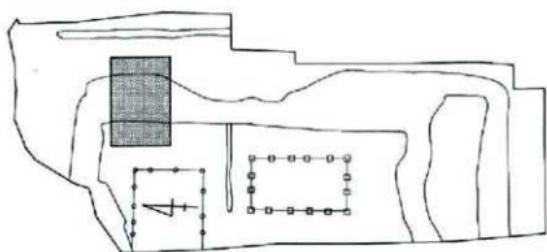
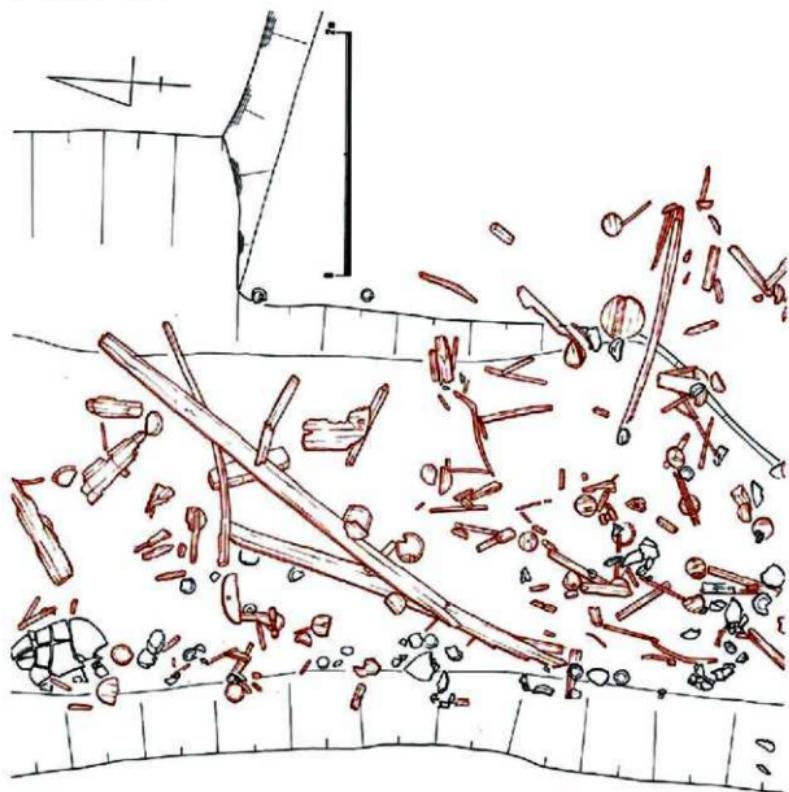


上. 漆北東隅遺物出土状況(南より)

中. 木簡2・櫛等出土状況(北より)

下. 同部拡大

墓内遗物出土状况(2)

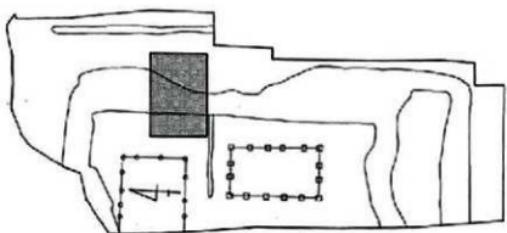
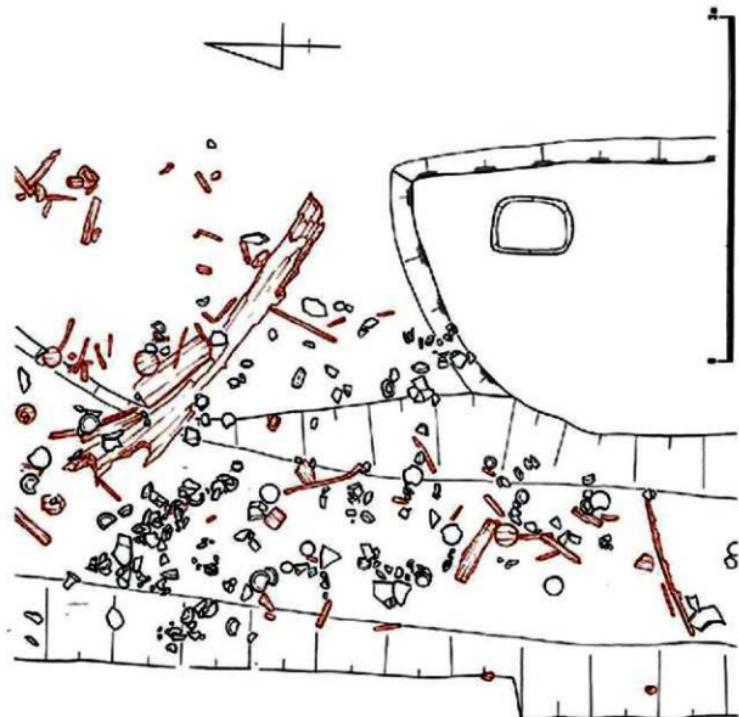




上. 橋梁部北側漆内遺物出土状況(南より)

下. 木簡12・えぶり等出土状況

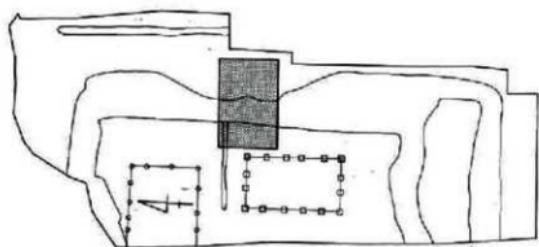
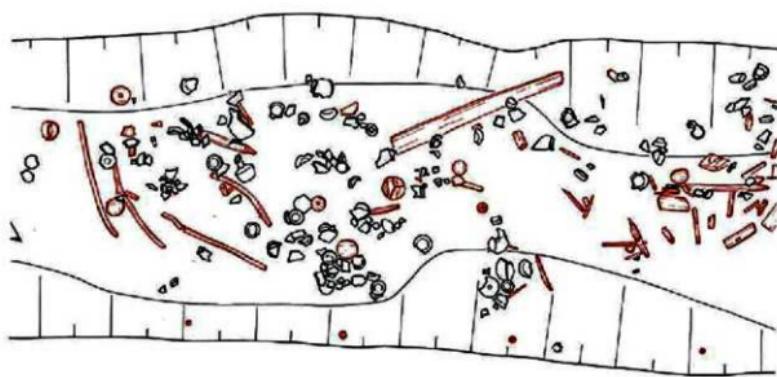
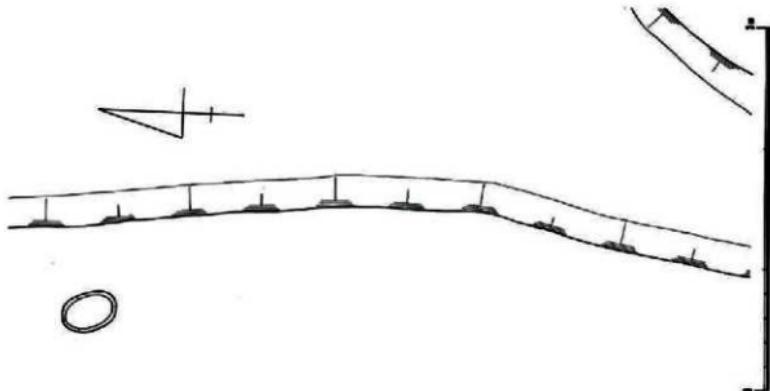
漆内遺物出土状況(3)





上. 橋梁部濠内遺物出土状況(南より)
下. 同上拡大

墓内遗物出土状况(4)



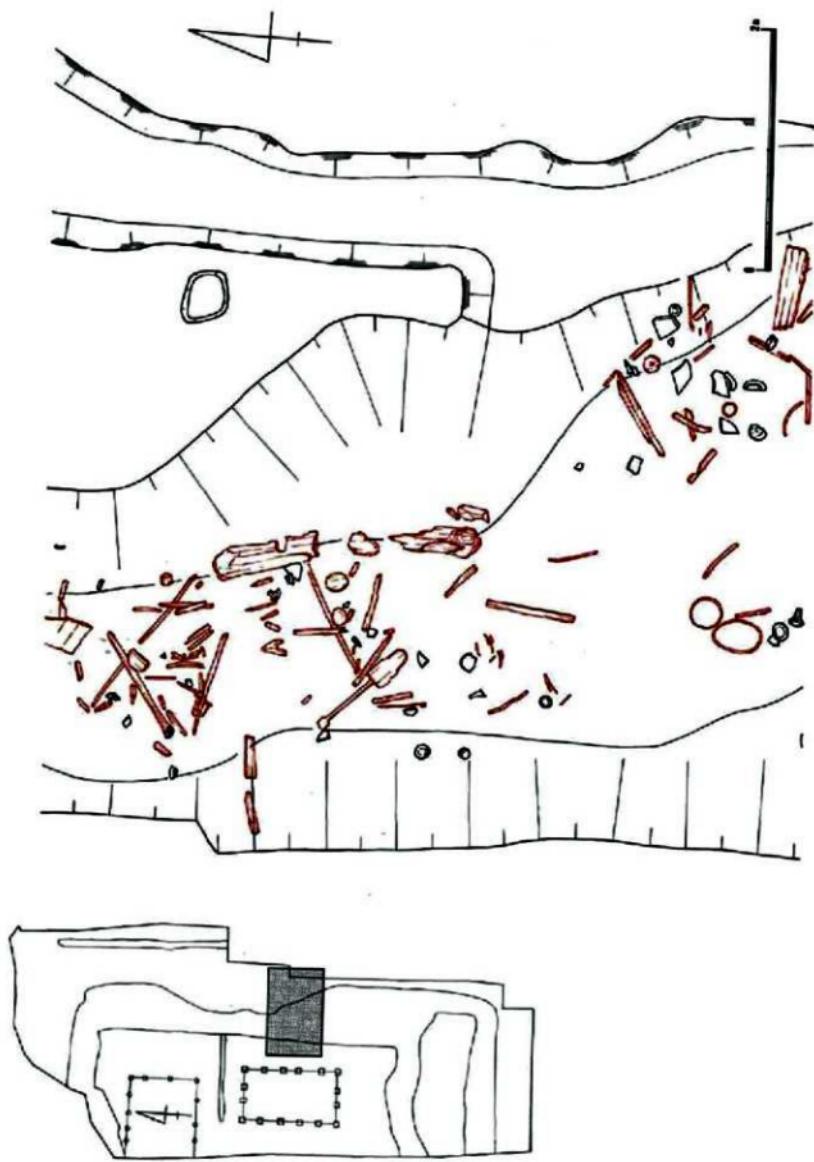


上. 橋梁部遺物出土状況(北より)

中. 木簡 9・飾板状木器出土状況

下. 橋杭検出状況(北より)

漆内遗物出土状况(5)



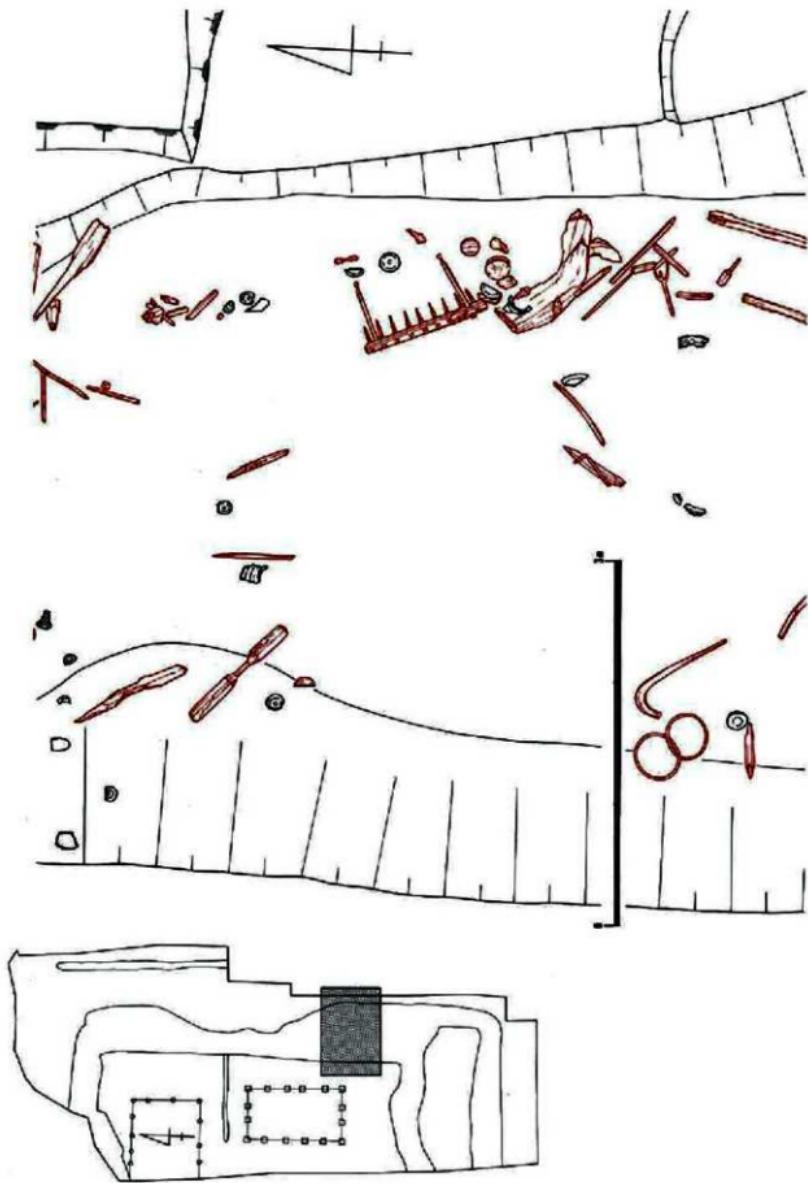


上. 橋梁部南側漆内遺物出土状況(北より)

中. 木簡 5 出土状況

下. 木器鉢出土状況

漆内遗物出土状况(6)





上. 橋梁部南側濠内遺物出土状況(北より)

中. 馬糞等出土状況(東より)

下. 縱枠48出土状況



上. 濠内遺物出土状況(西より)

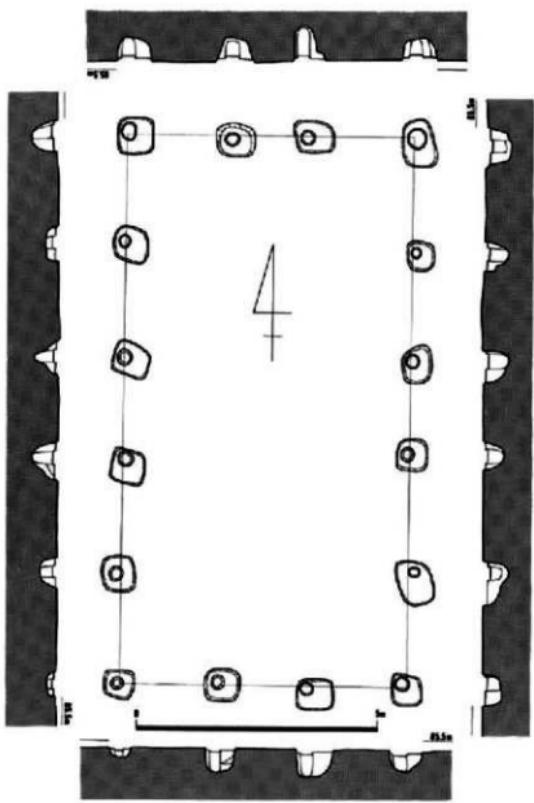
中. 木簡 8 出土状況

下. SD-1 と SD-3 遺物出土状況(空中写真)



図版11 上, SD-1 全景(南より)
中, SD-3断面(東より)
下, SD-3南端断面(南より)

据立柱建物址





上. 南より

下. 建物址と SD-1 (空中写真)



上. 溝(北より)

下. 溝内土器出土状況(南より)



上. Aトレンチ全景(南より)

中. 自然流路内遺物出土状況(南より)

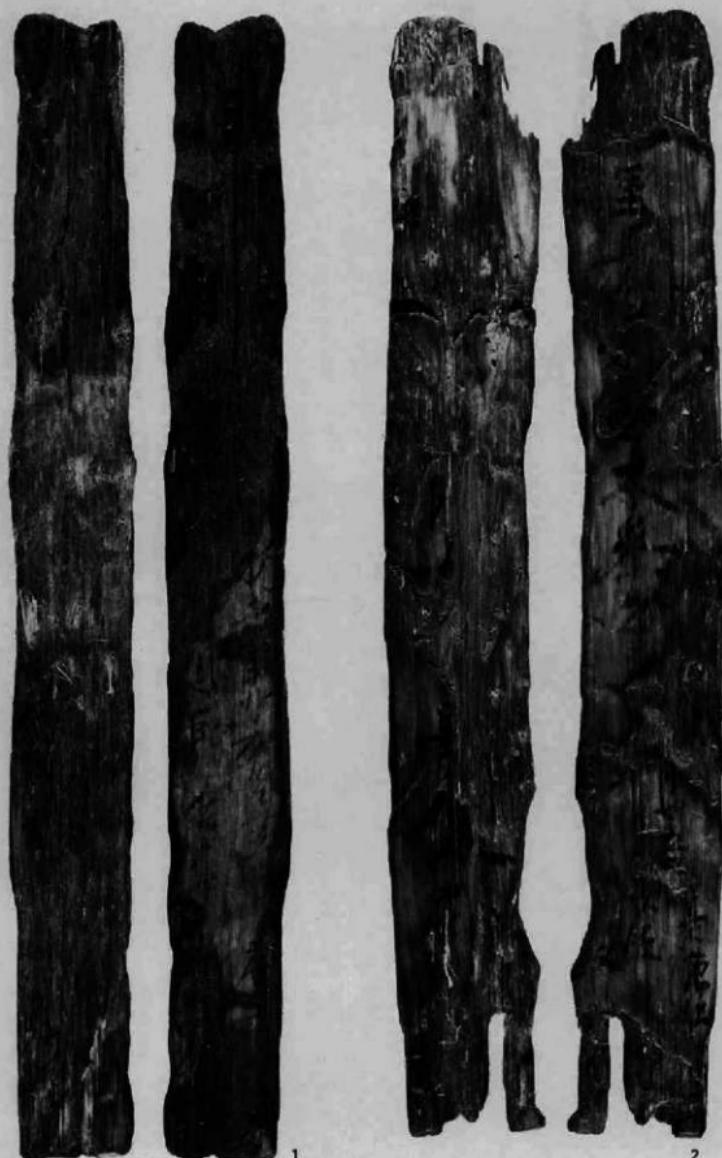
下. 同上拡大



〔中序〕
〔中音〕

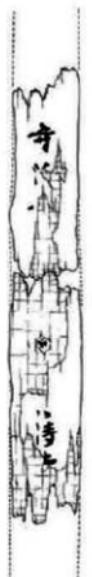
〔東ウ〕四月廿五日

口號



1

2



3

4

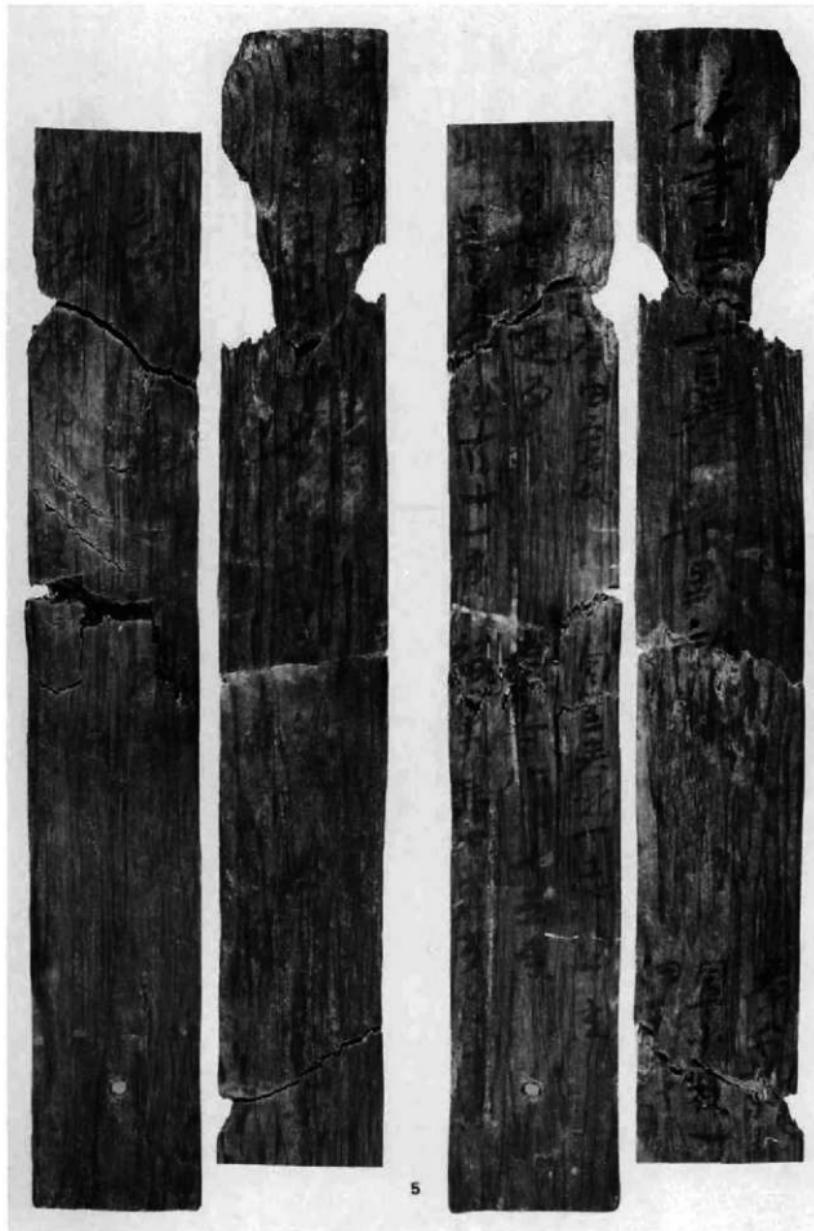
* × □□□ (給) 北至
□□□□□□□□□□□□
基方西用表上 □× <
十一月十三日 □<

* × □□□ □ □□□□□□□□

荀春都里長等 竹田里六人部 ×

春刀君唐稿 神直与
春刀君唐稿 右三人







6



7



8



9



10



11



(正り)
「□□」
神人マ加津良

「主神重利」

「奉文後利」

×前
松子
〔木々〕

(猪甘都等)
「□□□□□□□□□□□□」

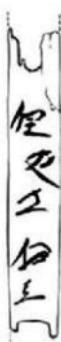
「丹波國冰上村」



11



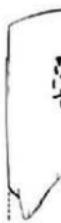
12



13



14



15



16



□□
□□
□□
□□
□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□
□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□
□□□□□□□□



12



13



15



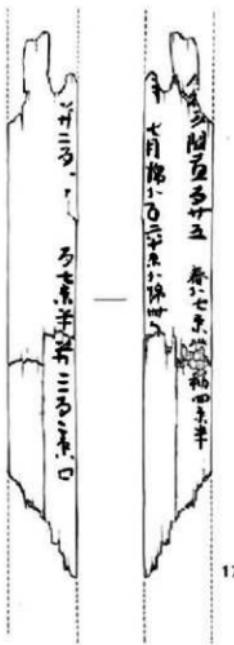
14



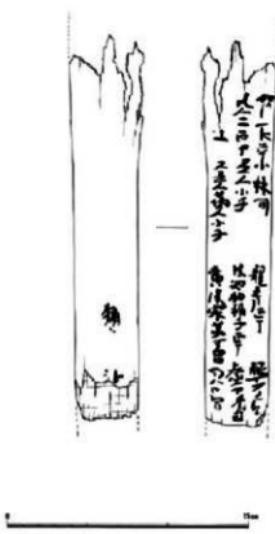
16



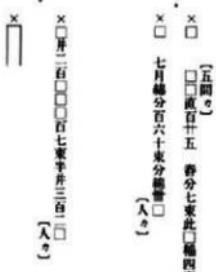
16



17



18



●□
○□
×□
○□
×□
○□
×□
○□
×□
○□
×□
○□
×

●□
○□
×□
○□
×□
○□
×□
○□
×□
○□
×□
○□
×

●□

●□

●

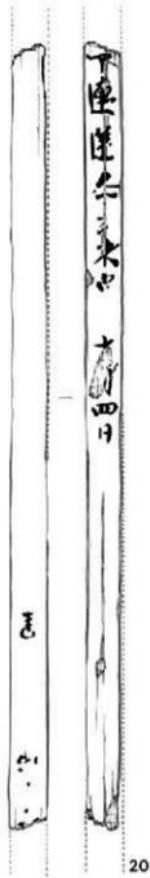


17

18



19



20



十一



21

真田信巳日世三東午日福春小田柳廿三東末日世八重^田橋^田八重福春小田柳廿中日百廿×
（分田福々）
×□□□□子日一〇十八東丑□□□百□□□□□日五十二東亥日巳日甘東□□□小田柳午

傳 注 記

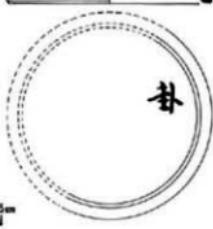
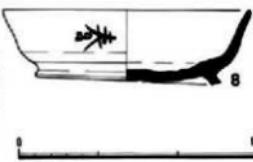
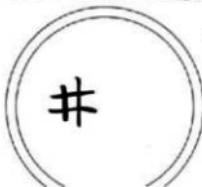
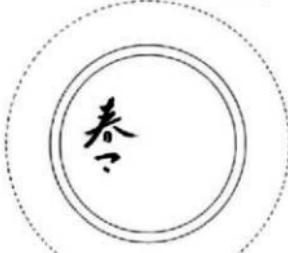
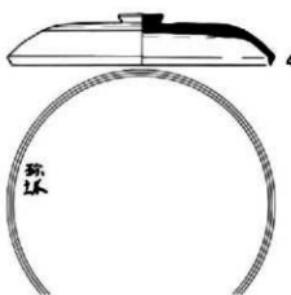
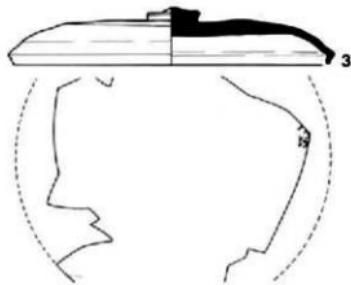
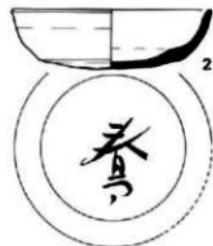
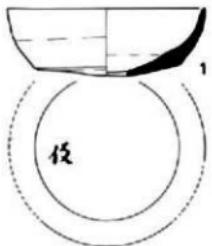


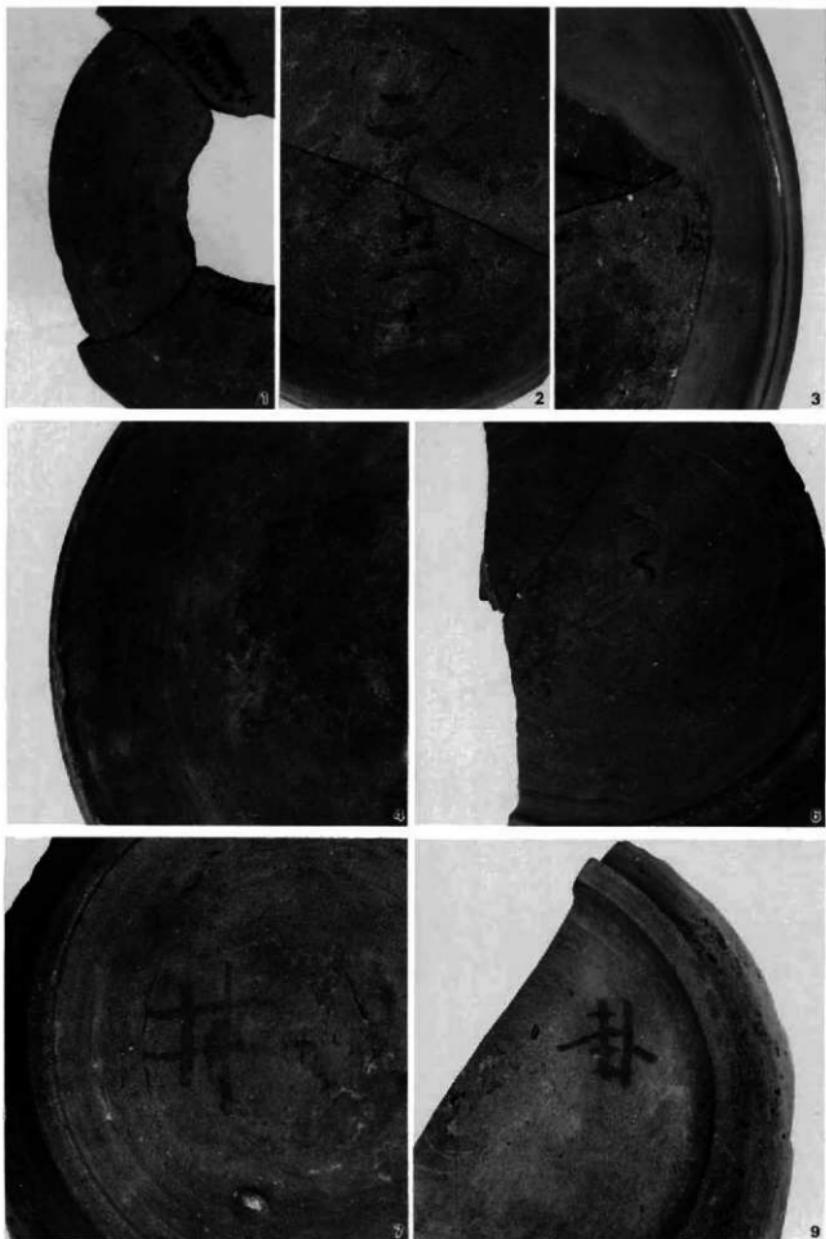
19

20

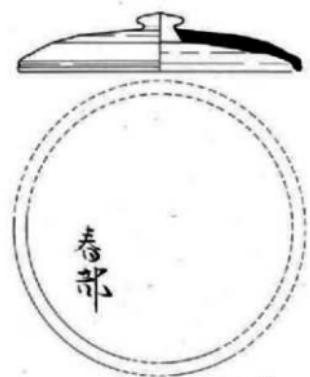
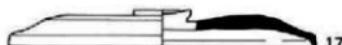
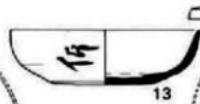
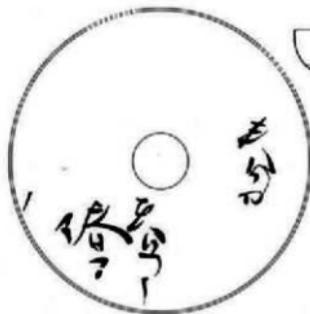
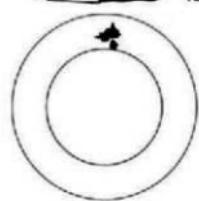
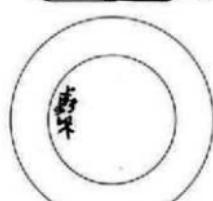
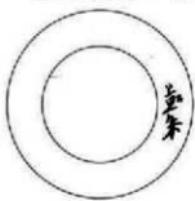
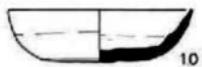
21

墨書き土器 1



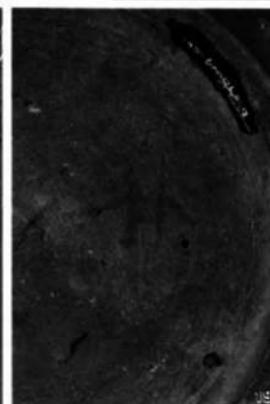
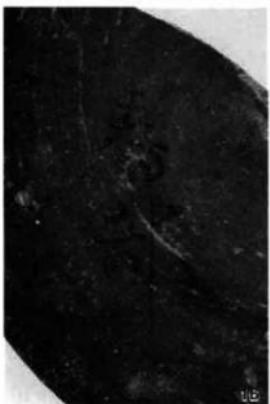
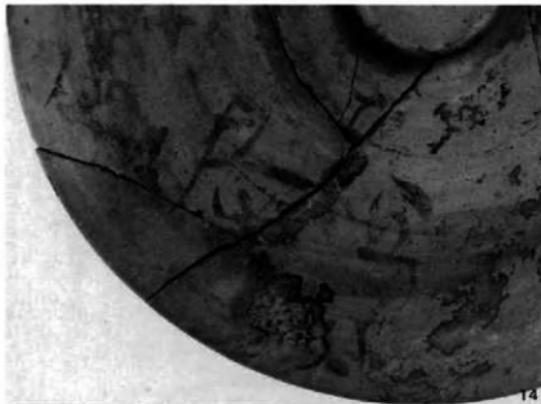


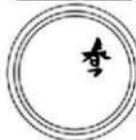
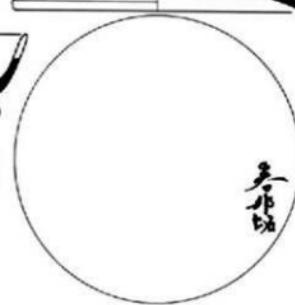
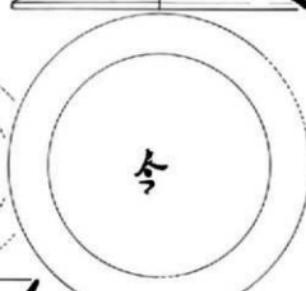
墨書土器 2



1 10mm



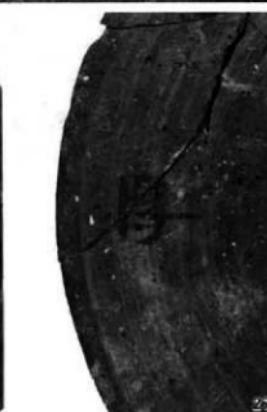
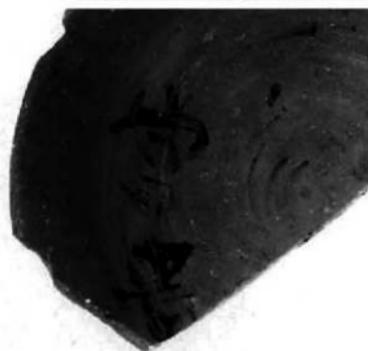
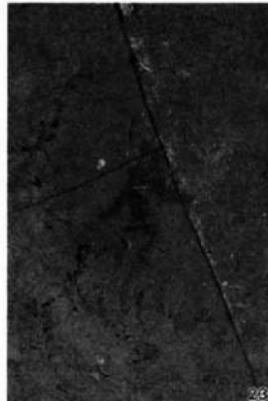




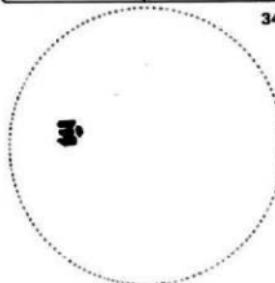
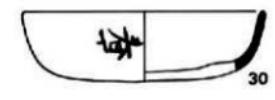
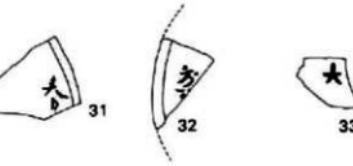
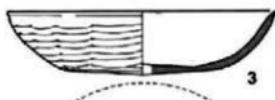
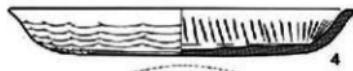
6



15cm



墨書土器 4



1 10



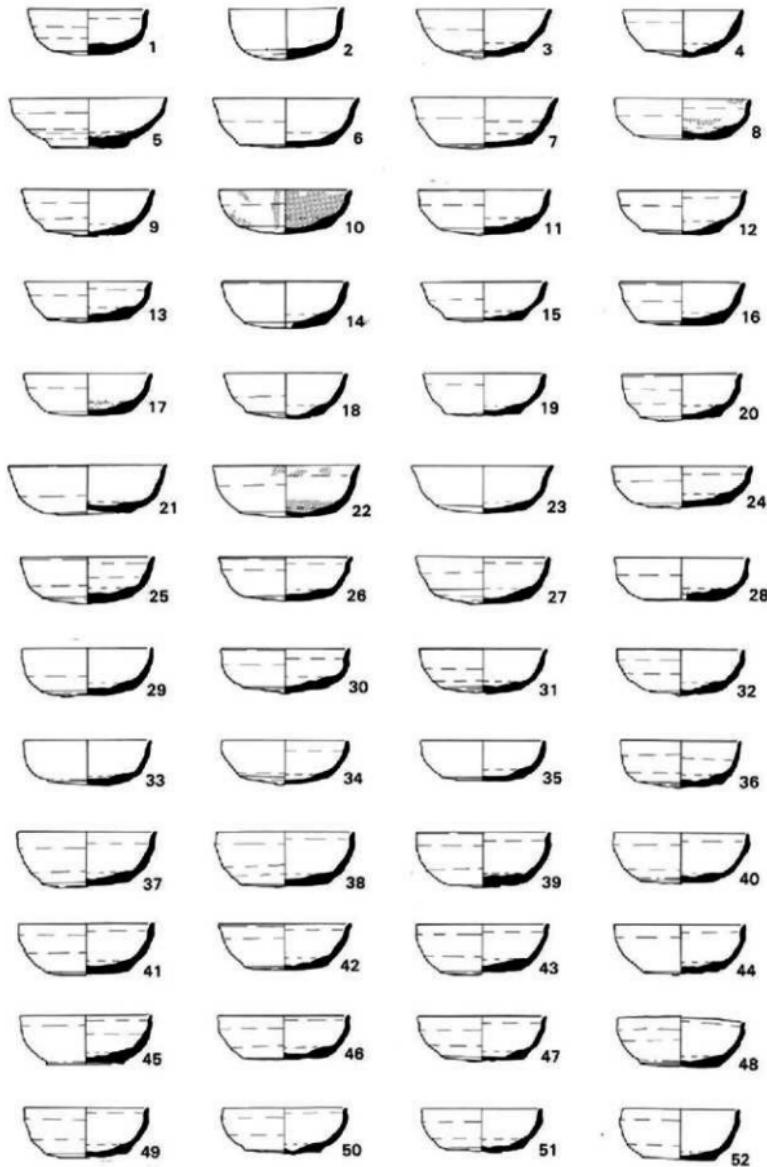
31

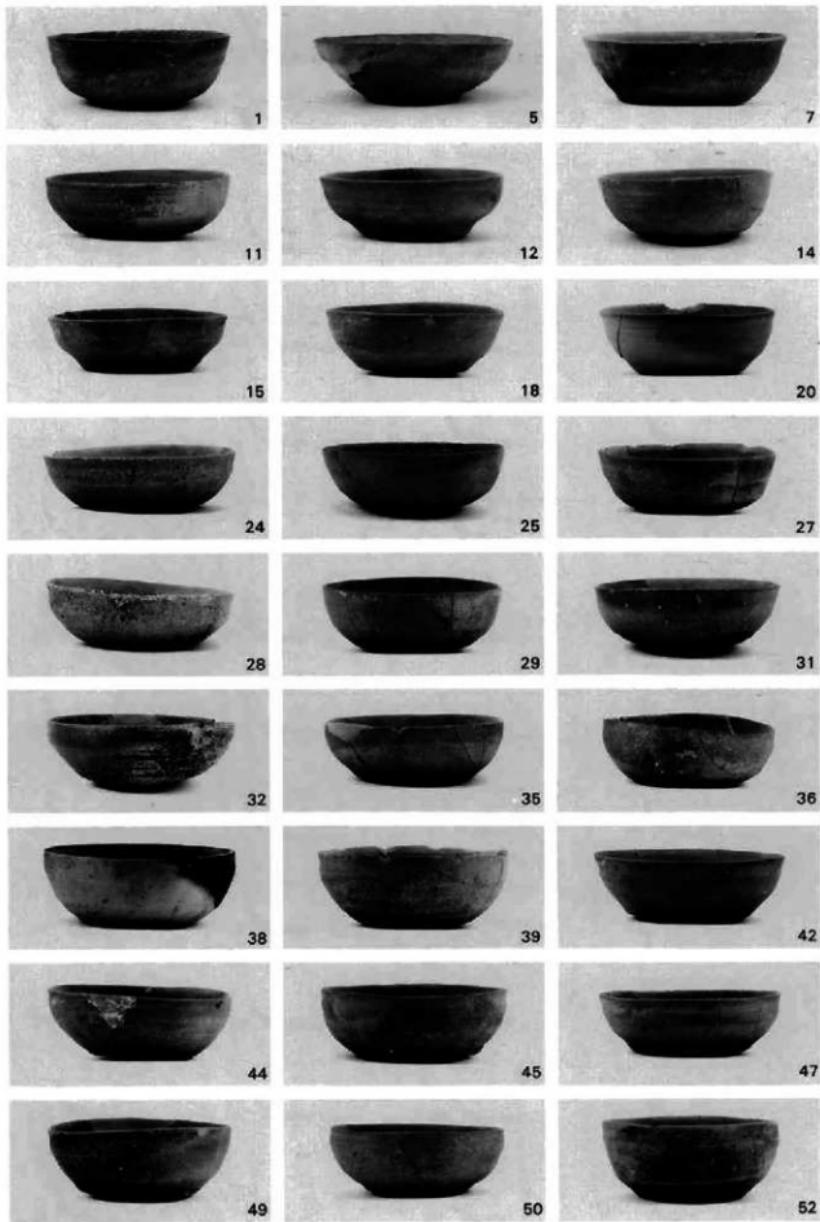
32

33

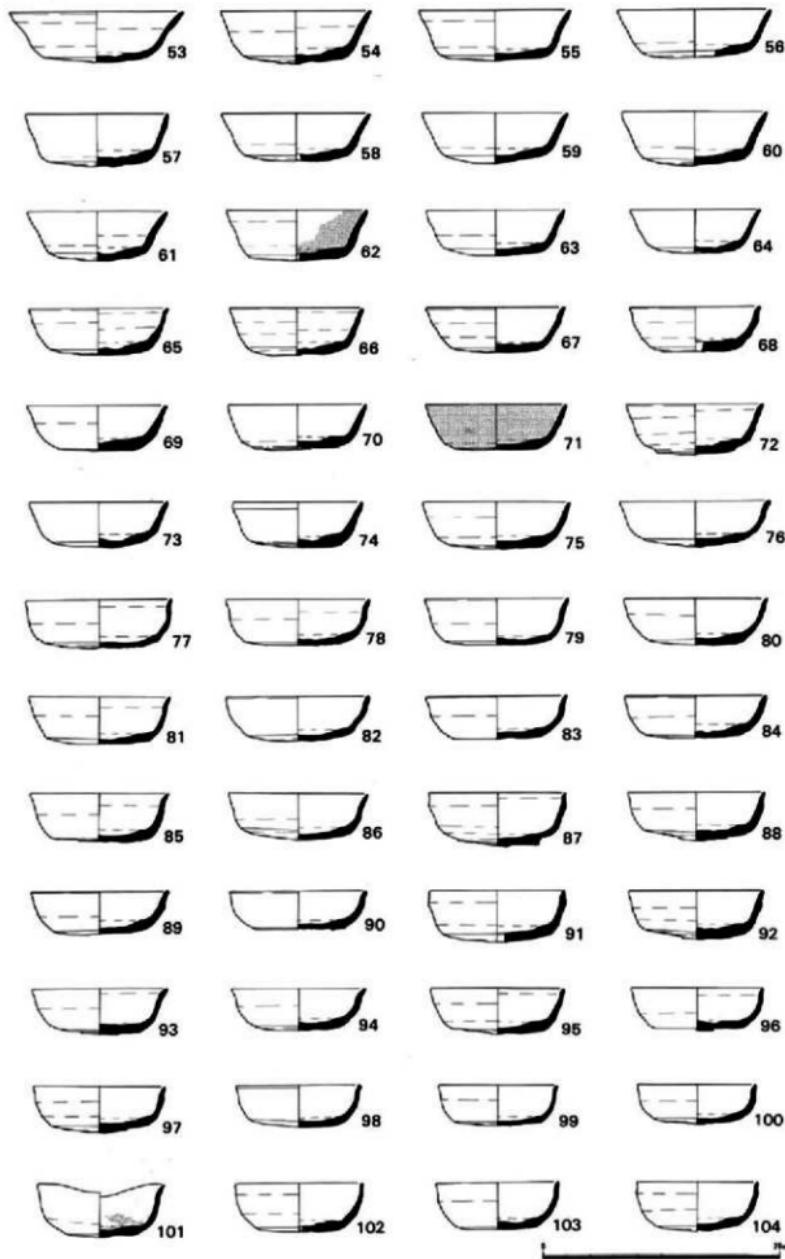
36

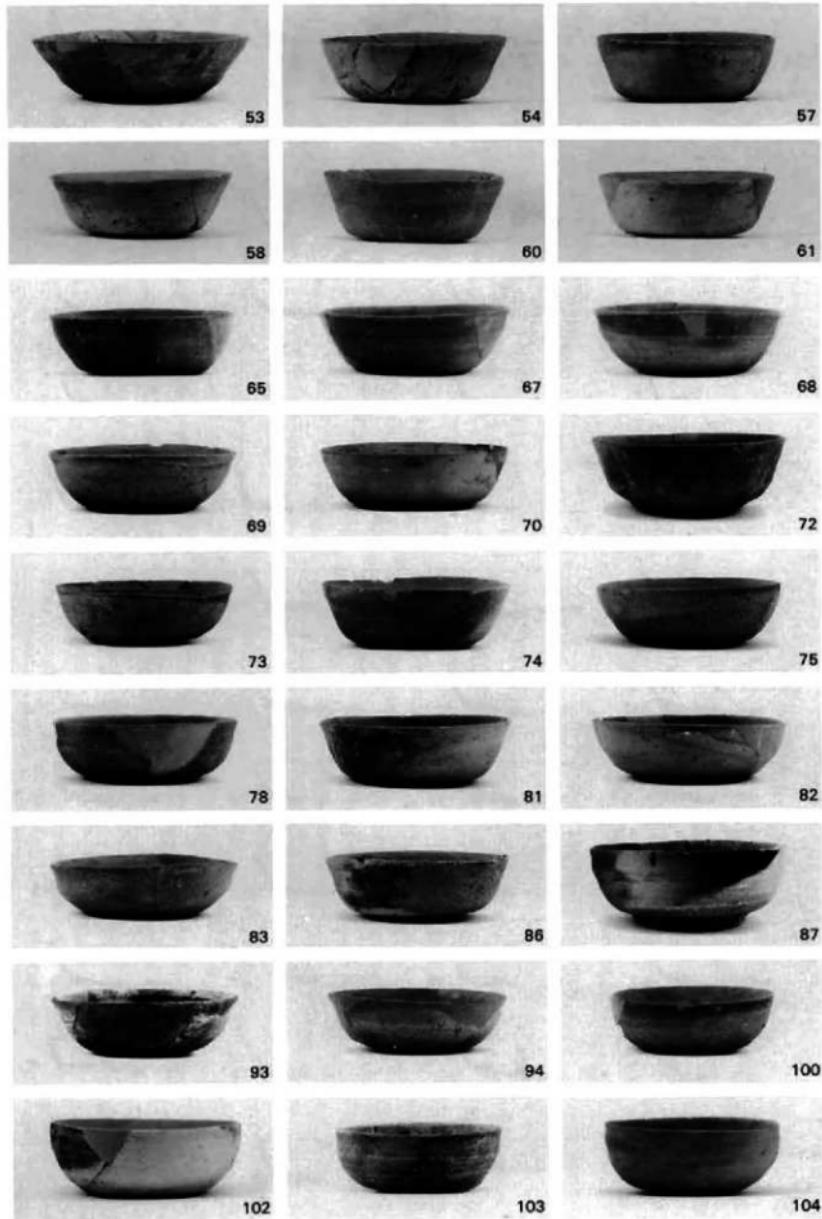
須恵器 1



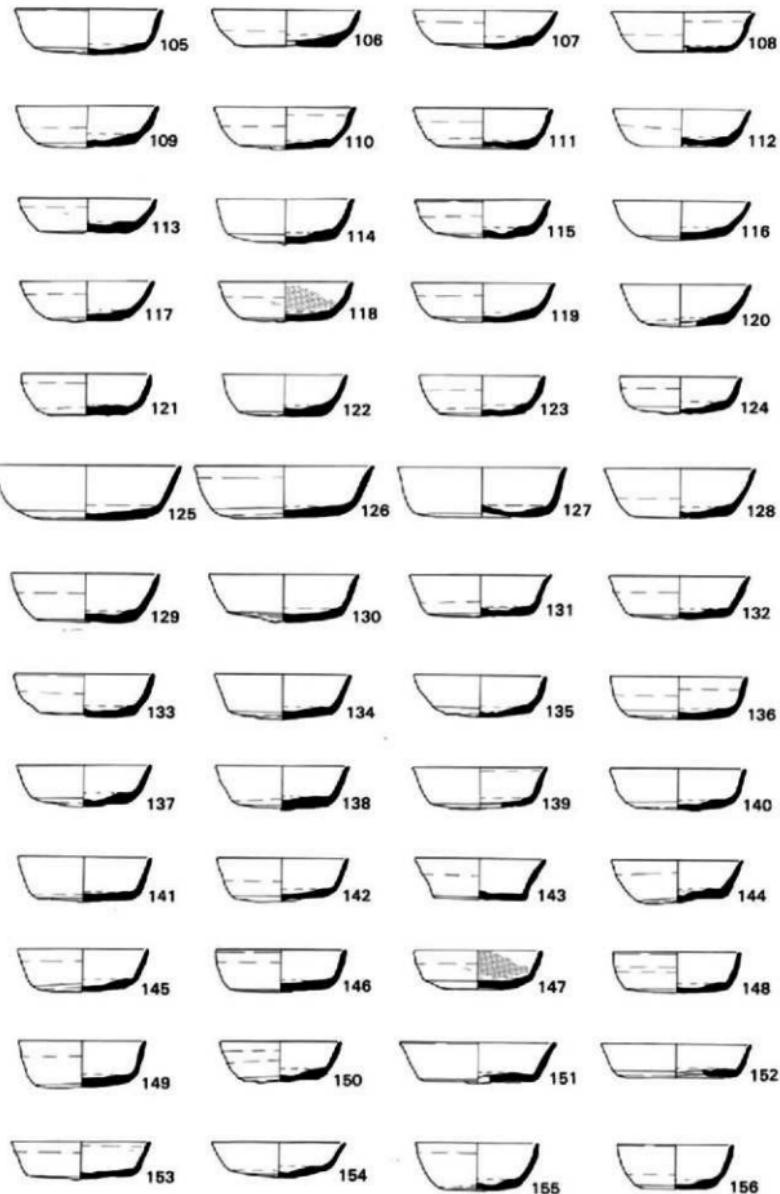


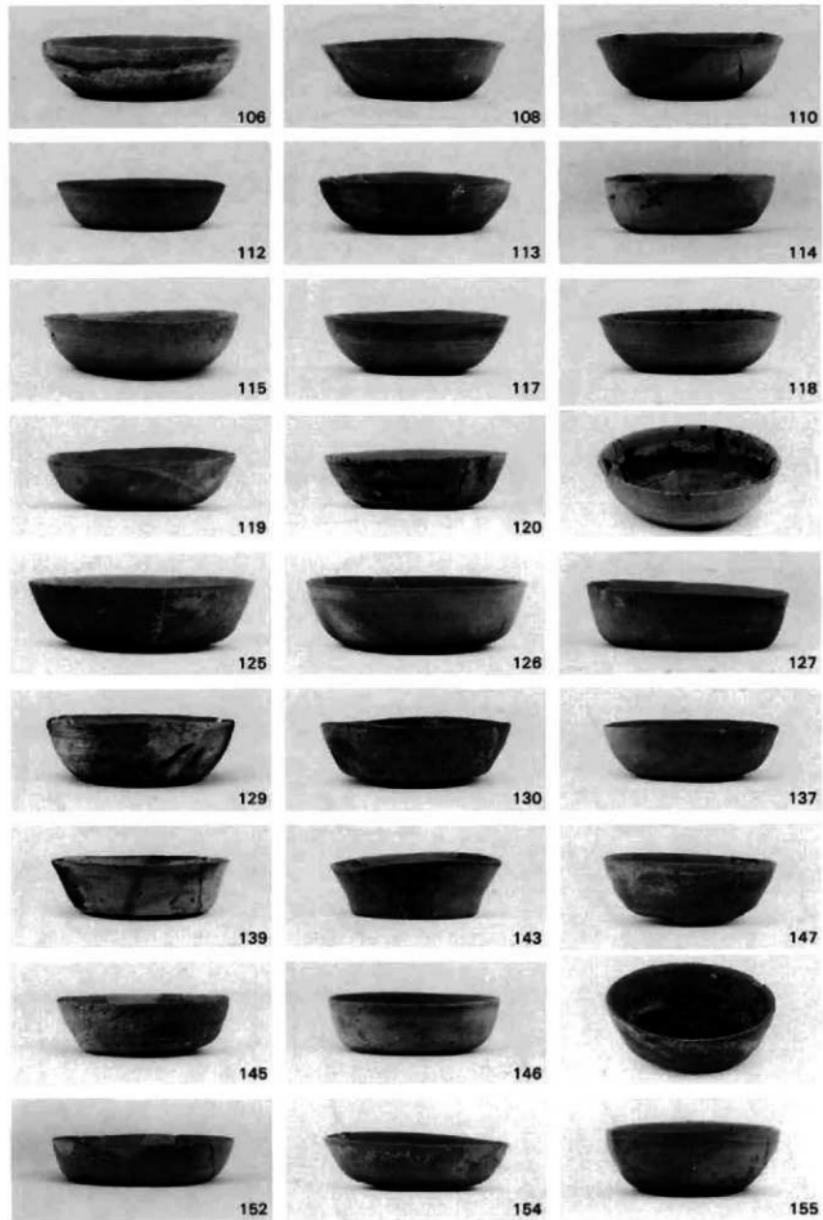
須惠器 2



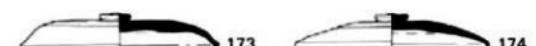
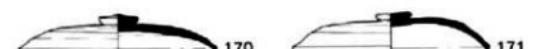
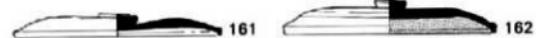


須恵器 3

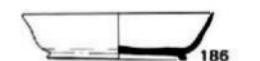
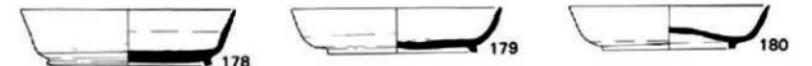


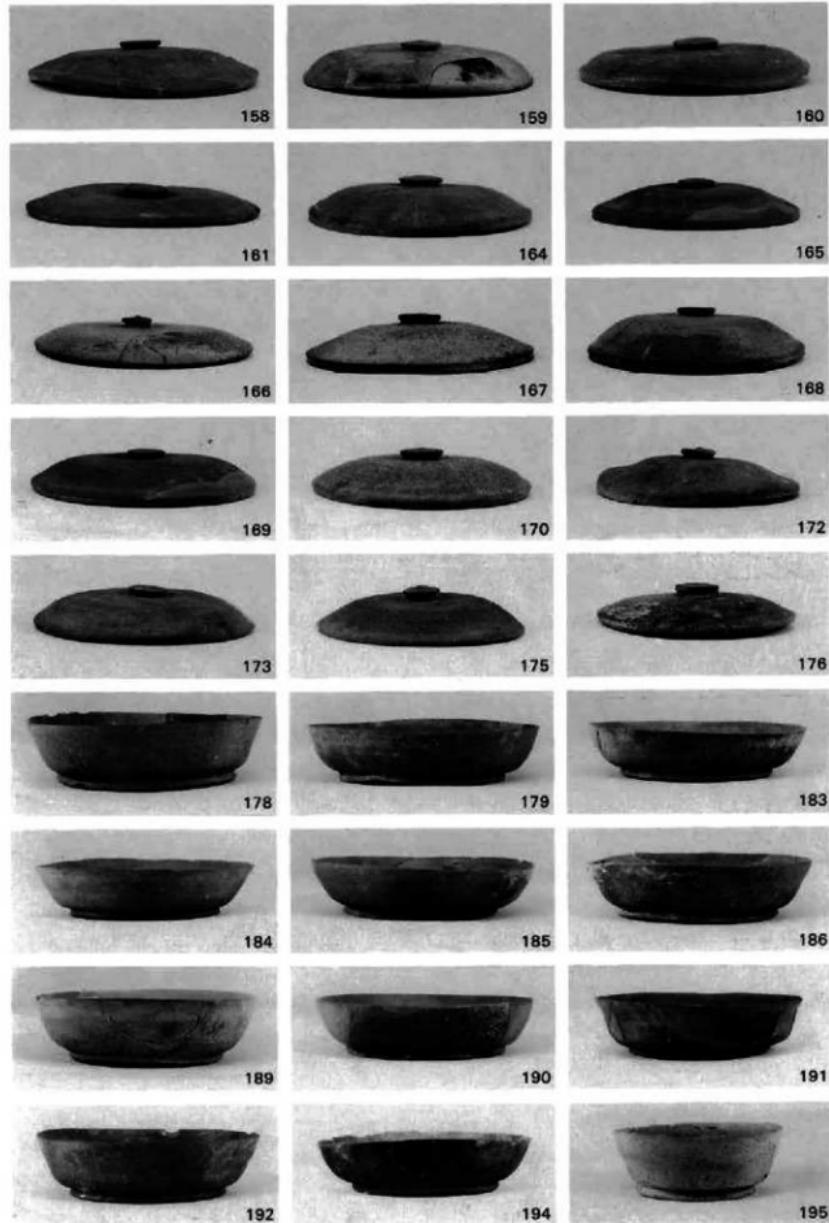


須惠器 4

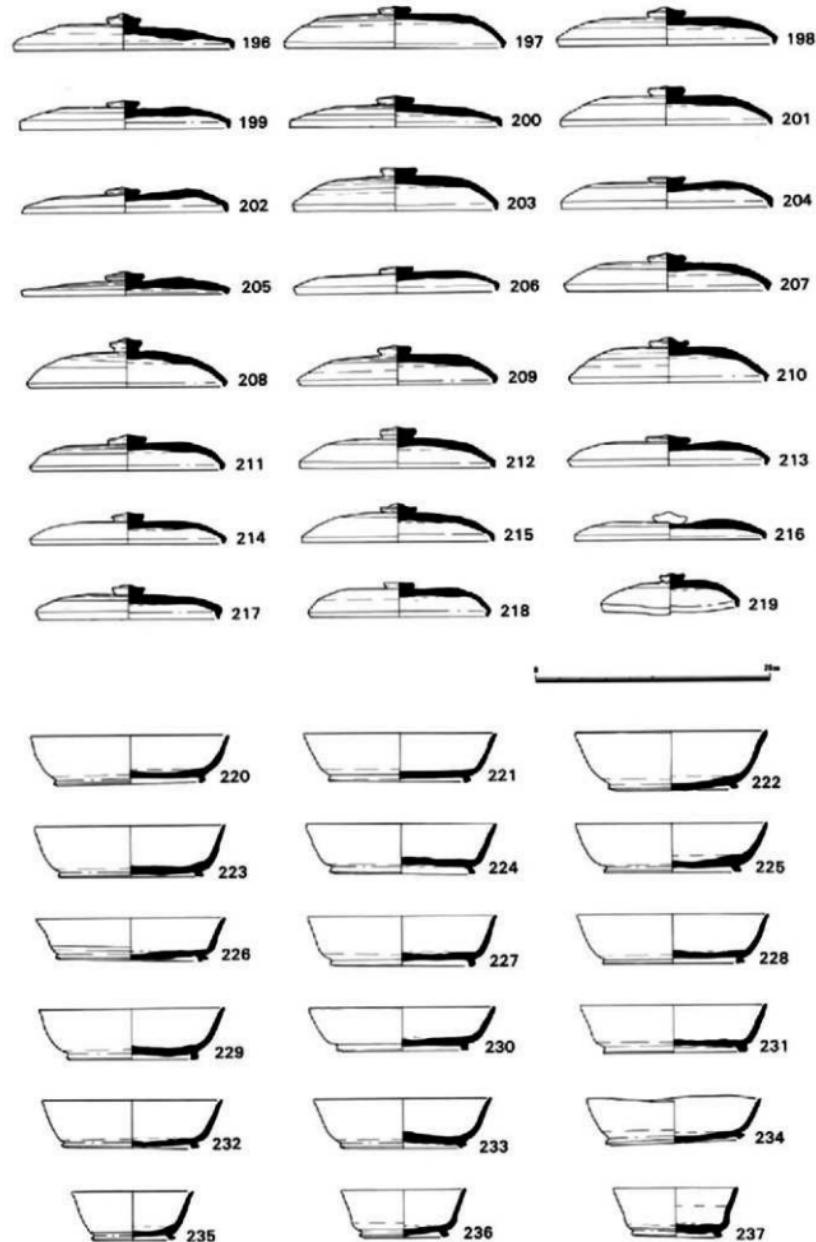


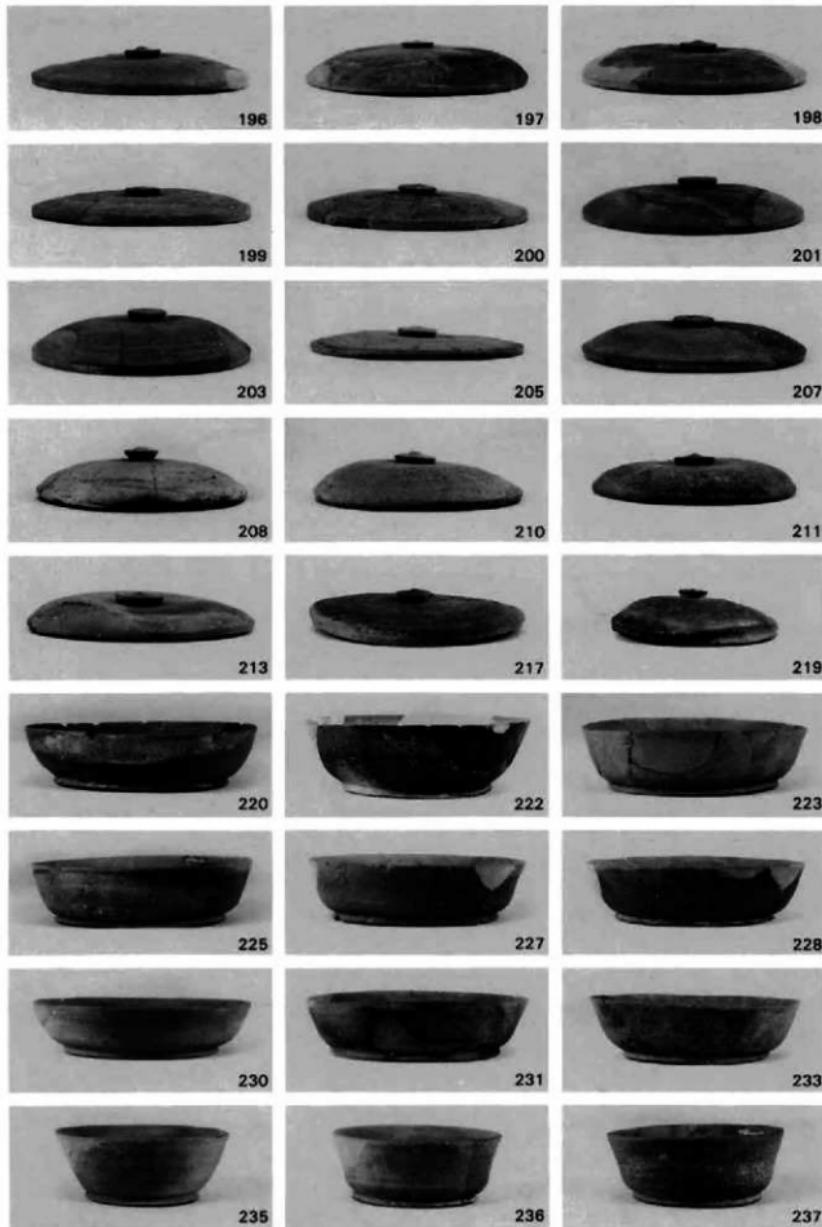
1 2 3 4



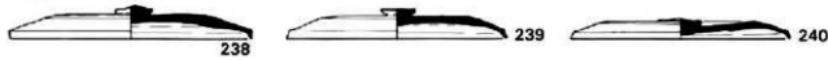


須惠器 5

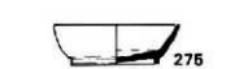
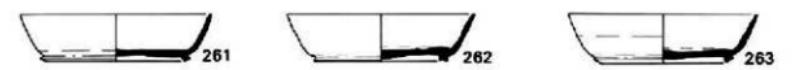
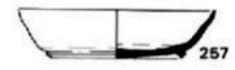
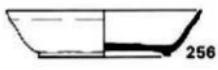


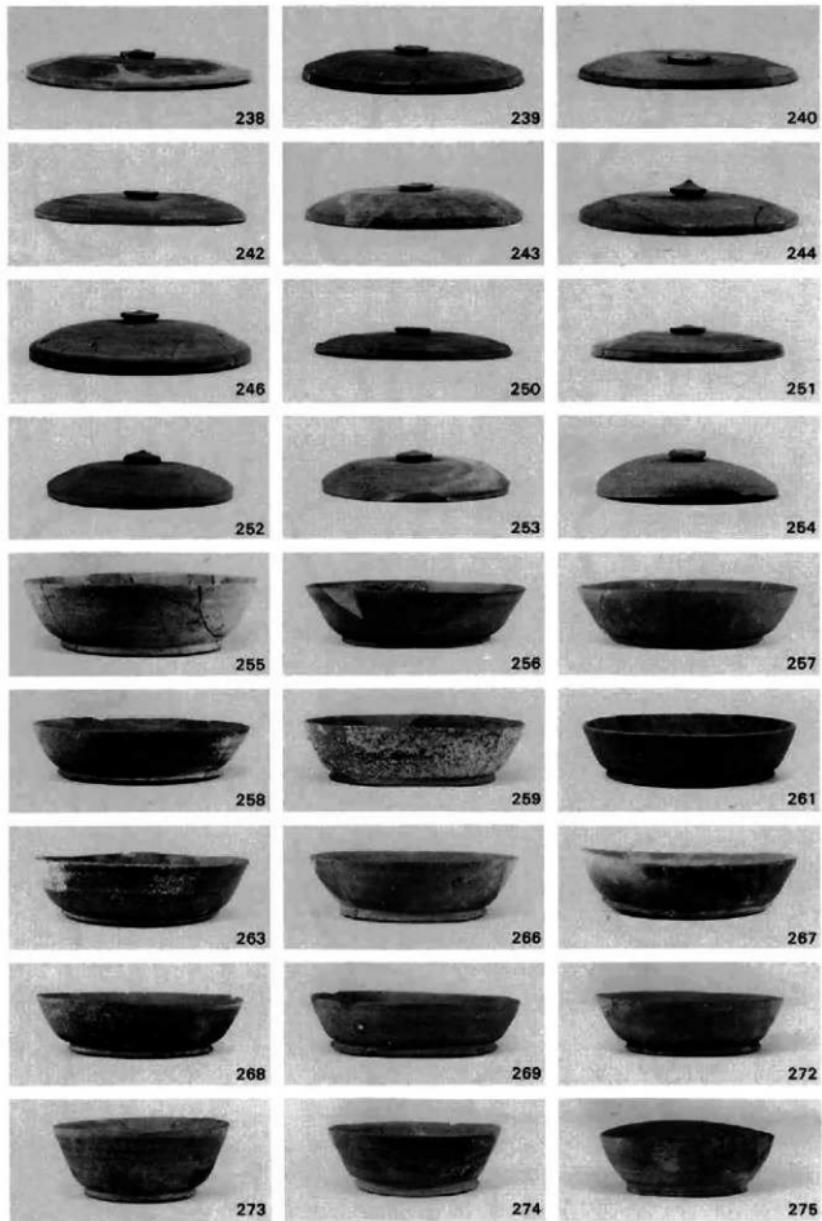


漆器 6

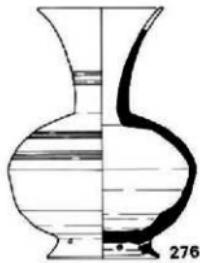


1 cm

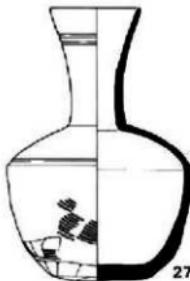




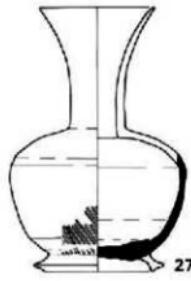
須恵器 7



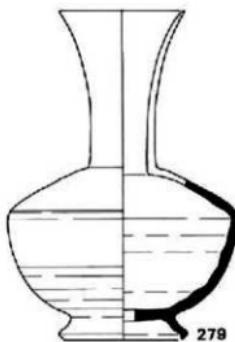
276



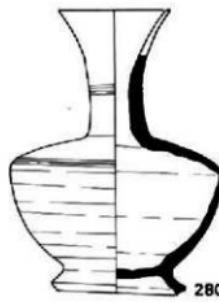
277



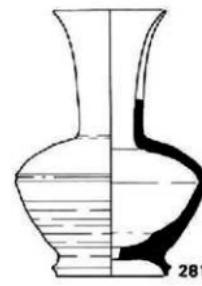
278



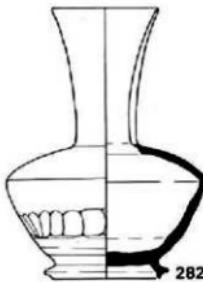
279



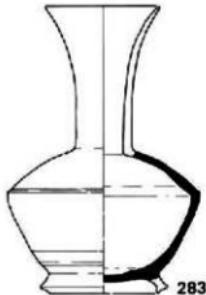
280



281



282



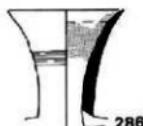
283



284



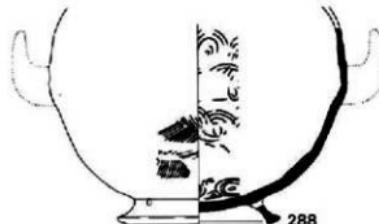
285



286



287



288



276



277



278



279



280



281



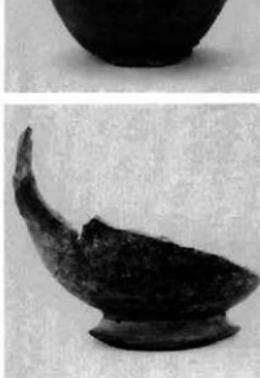
282



283



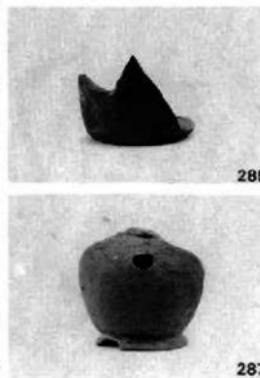
284



285

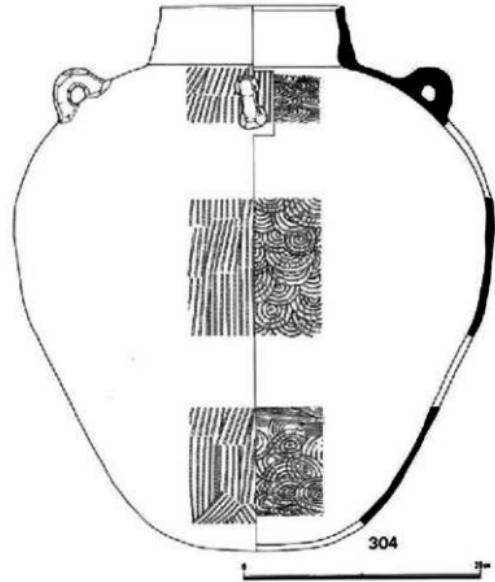
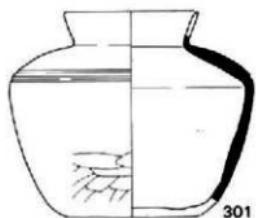
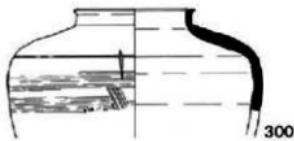
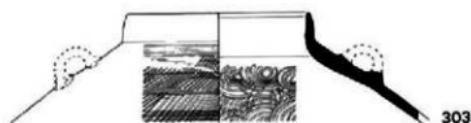
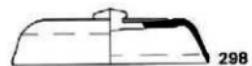
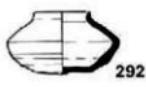
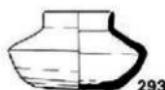


286



287

須恵器 8





291



292



295



289



293



296



297



303



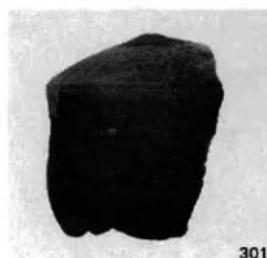
298



300



304

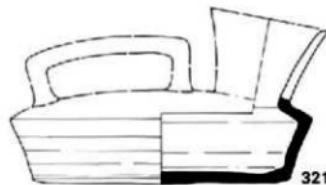
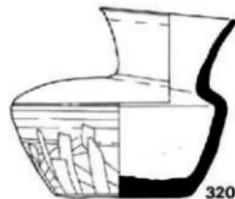
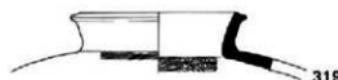
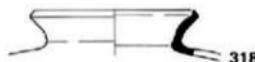
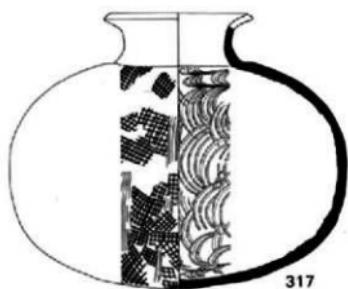
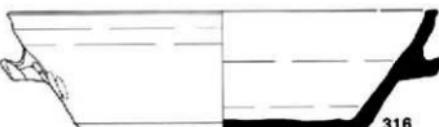
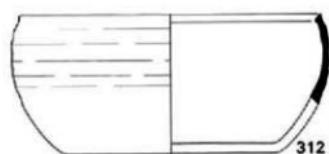
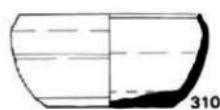
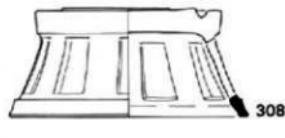
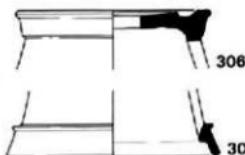


301



302

須惠器 9



1 cm scale bar



305



308



307



309



310



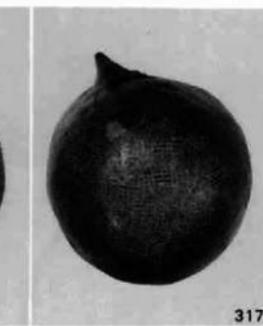
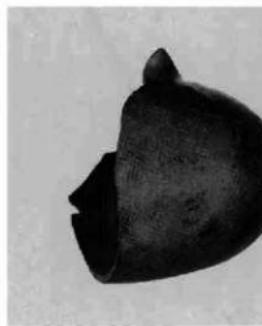
311



316



314



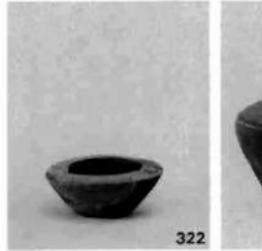
317



315



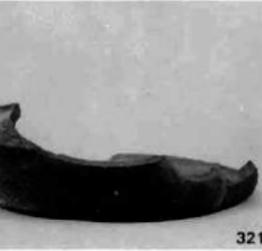
318



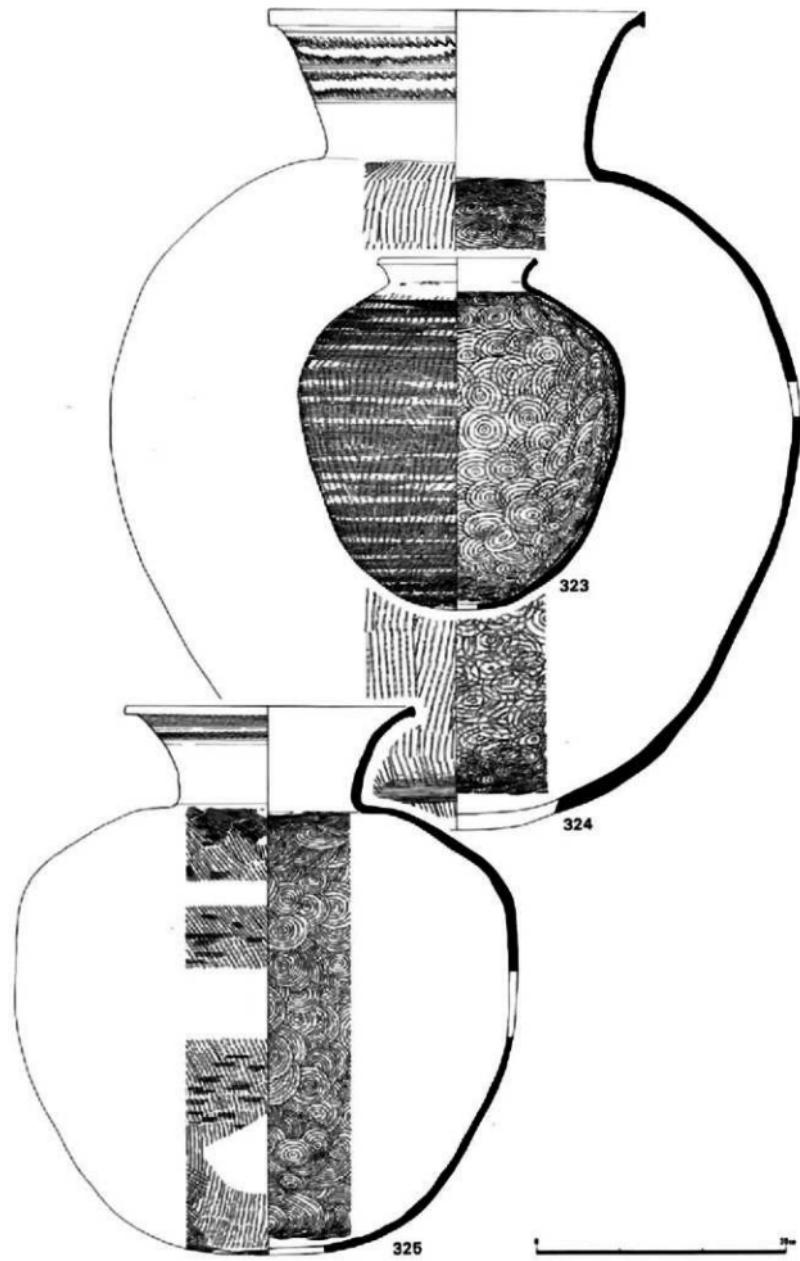
322



320



321



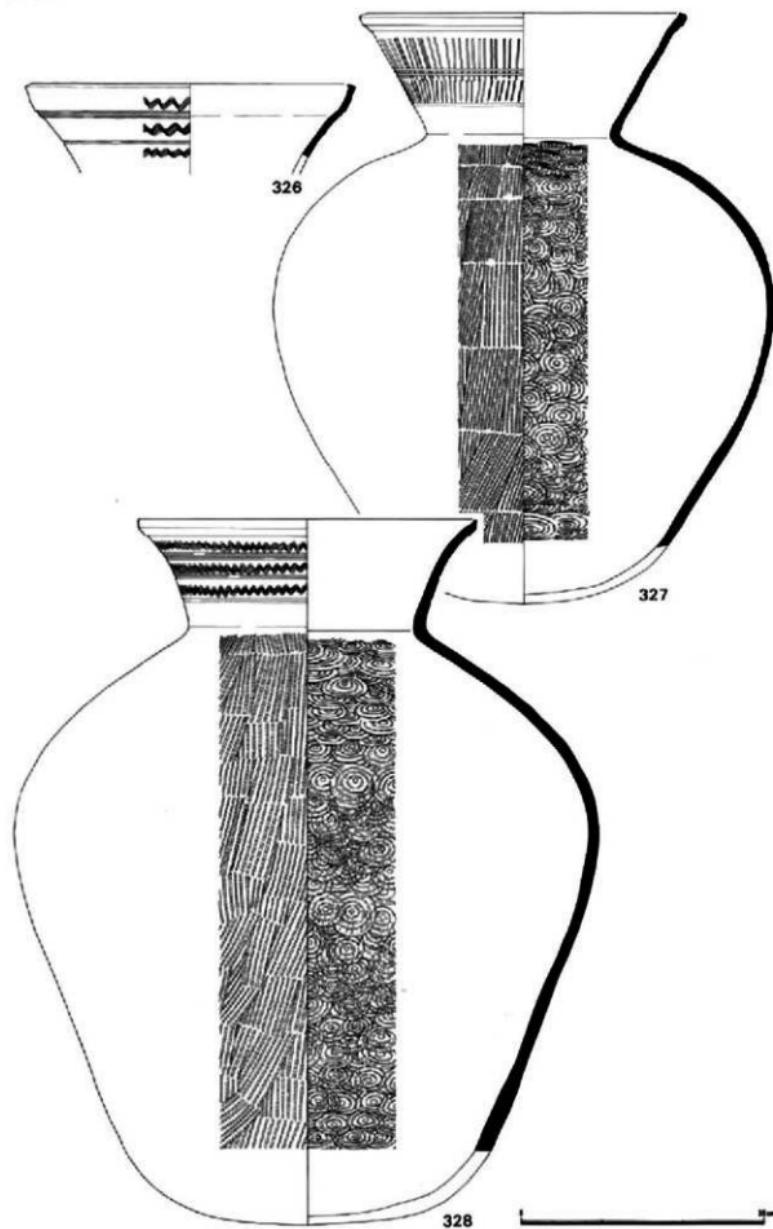


323

325



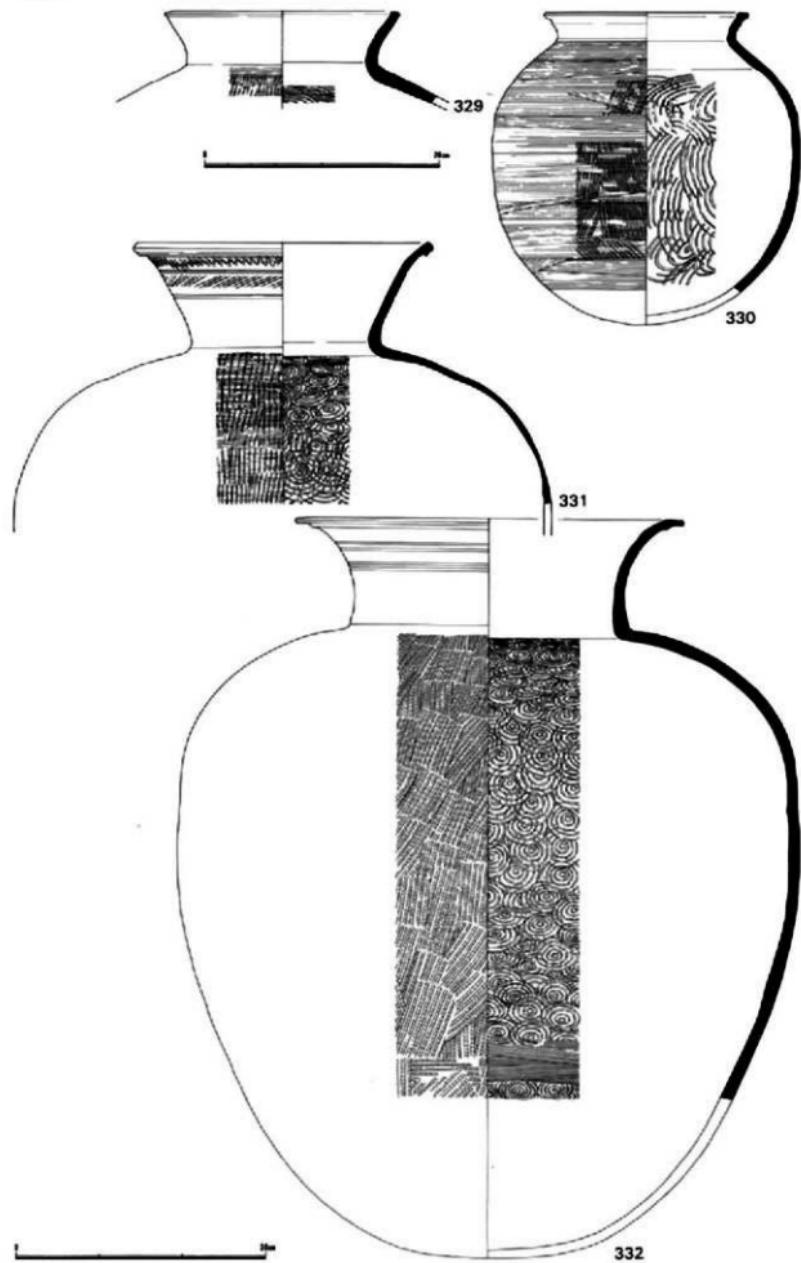
324





328

須惠器 12





331

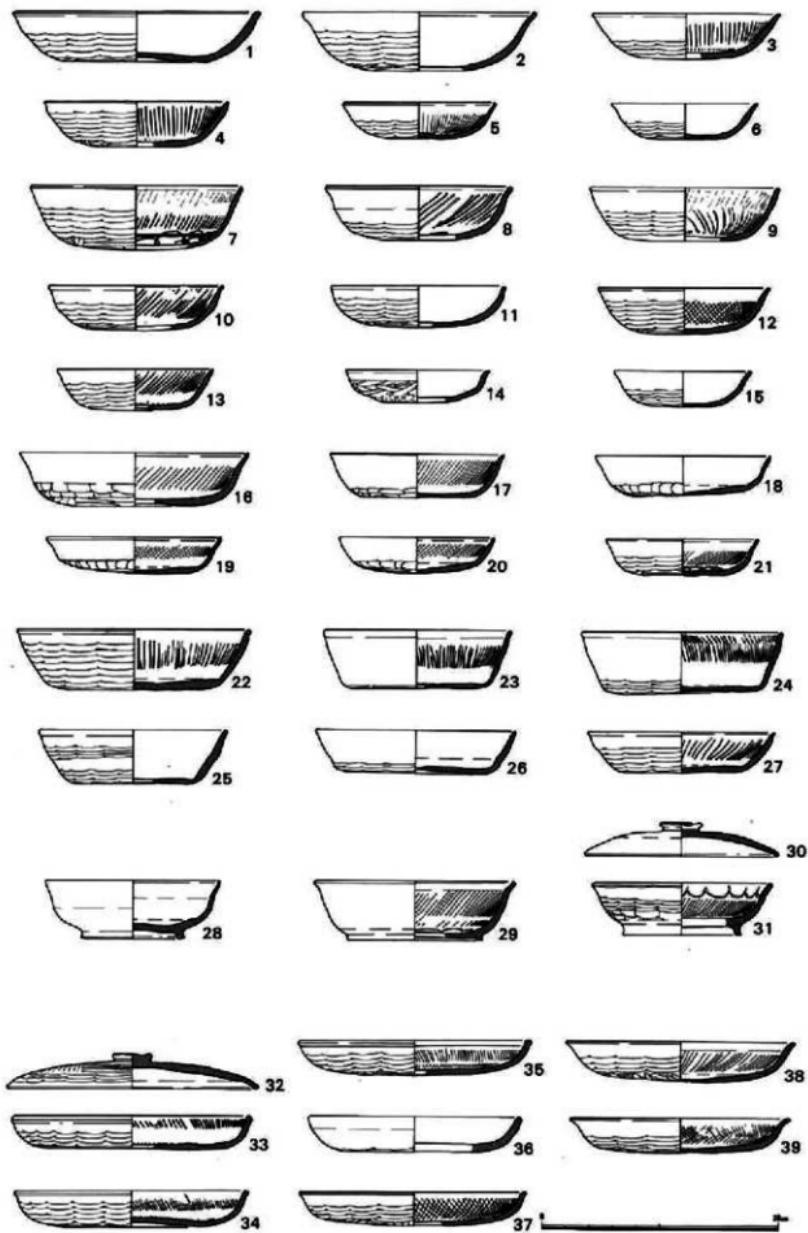


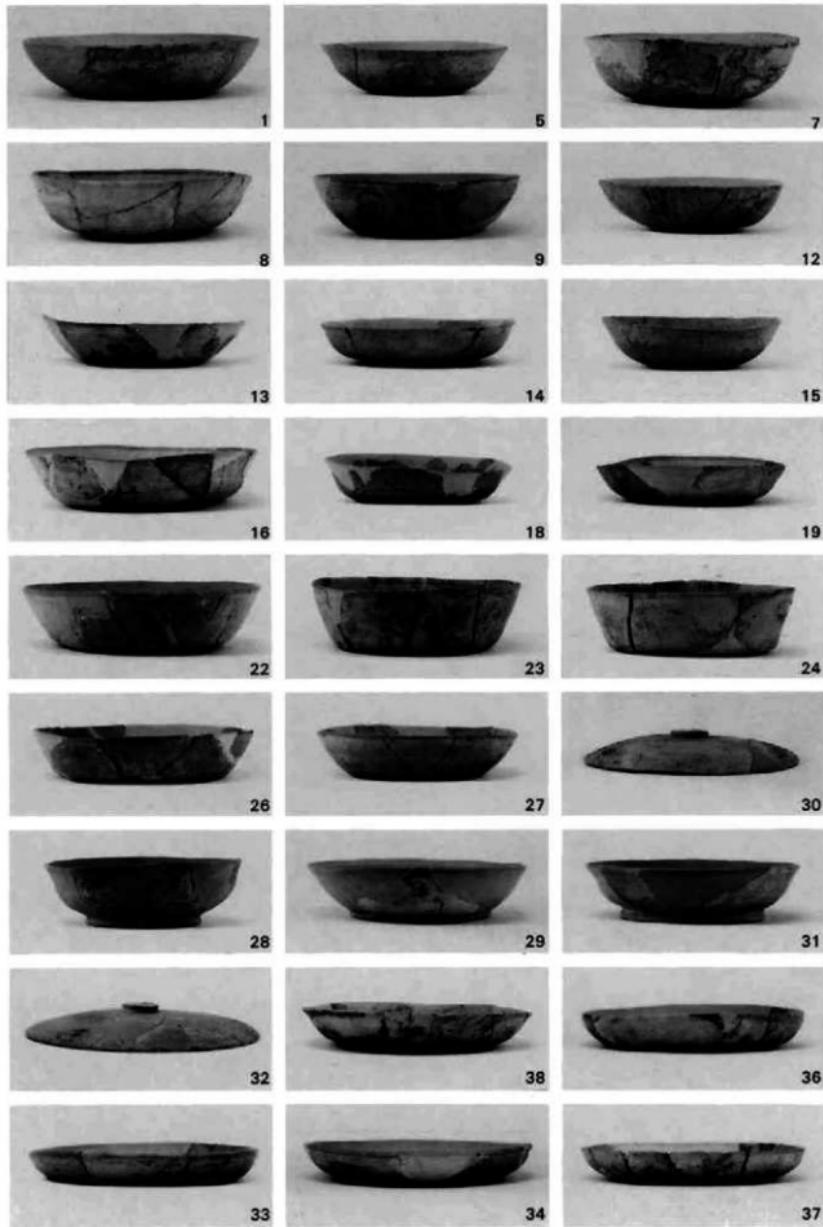
332



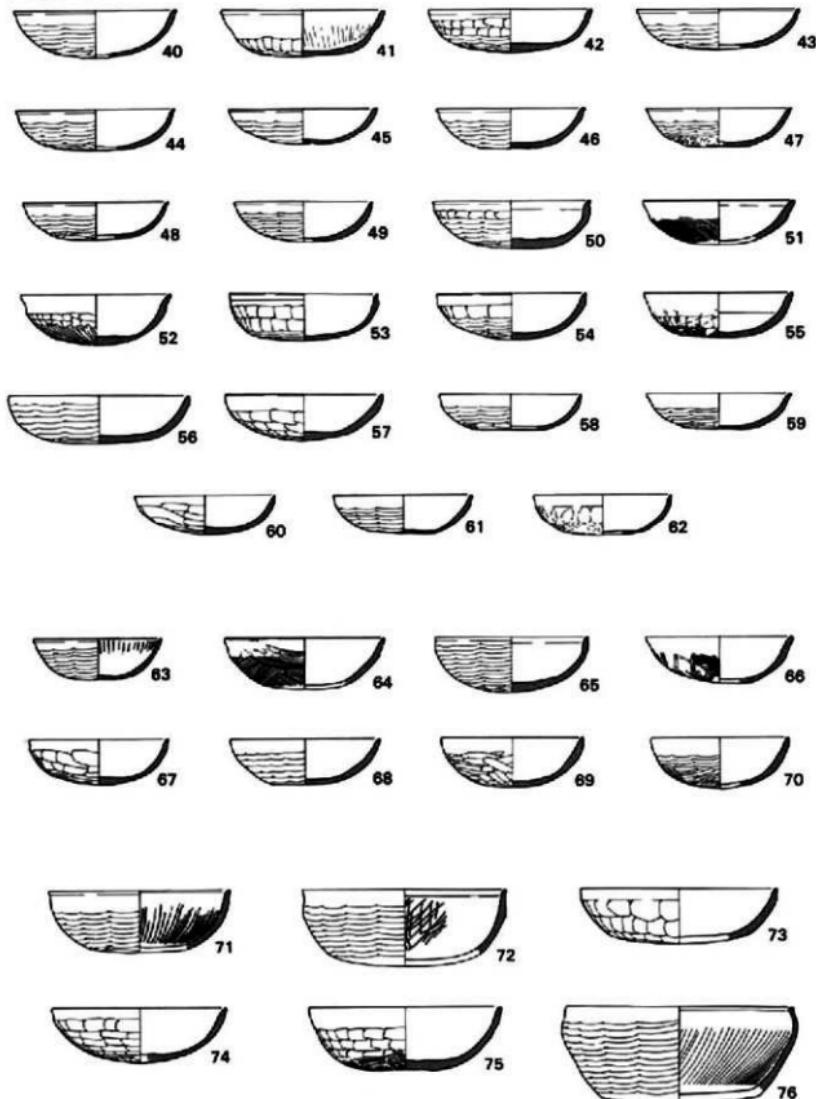
330

土器 1

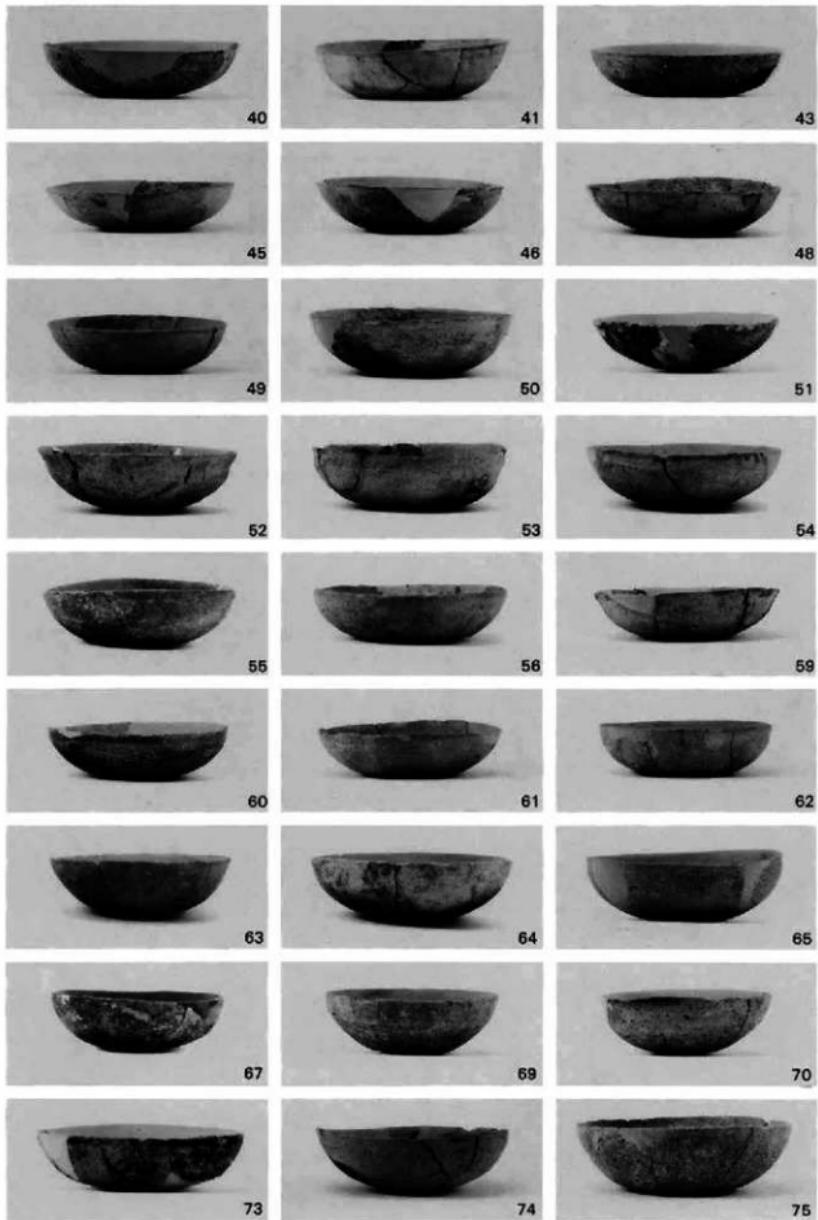


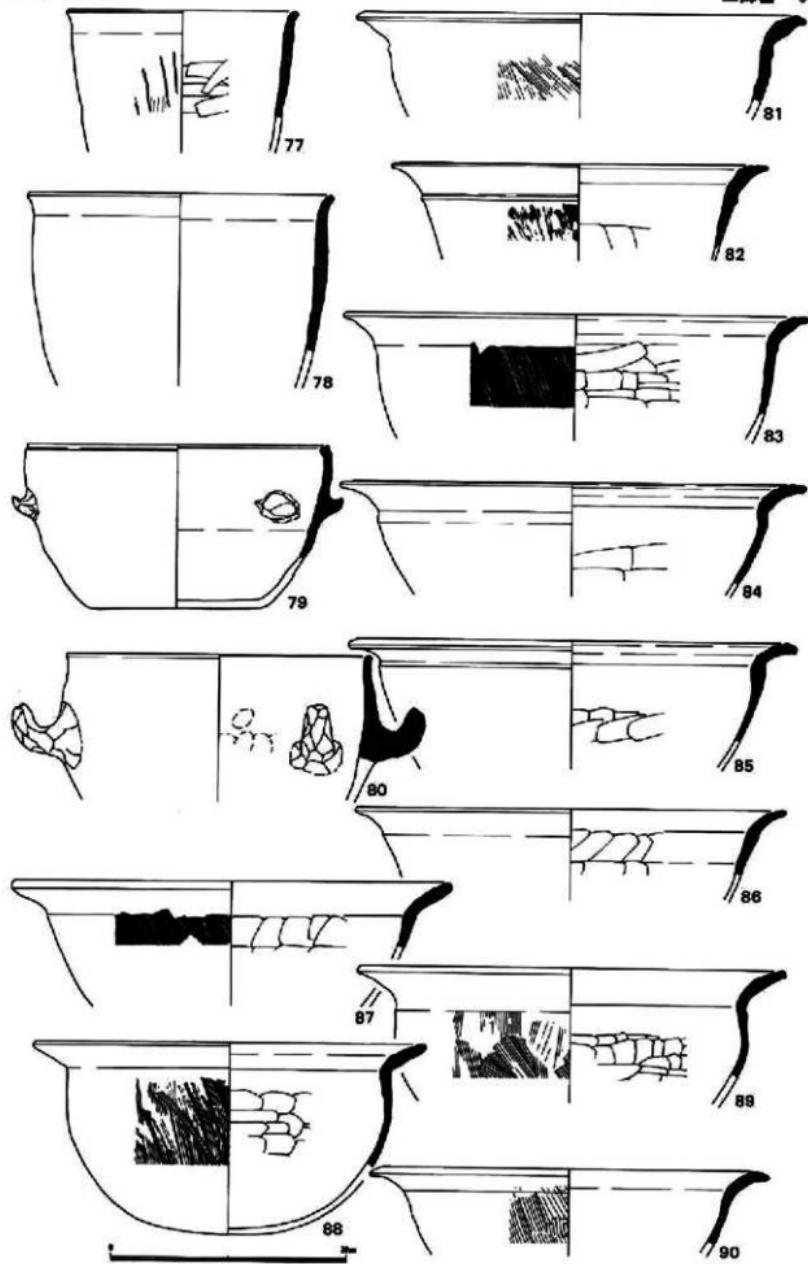


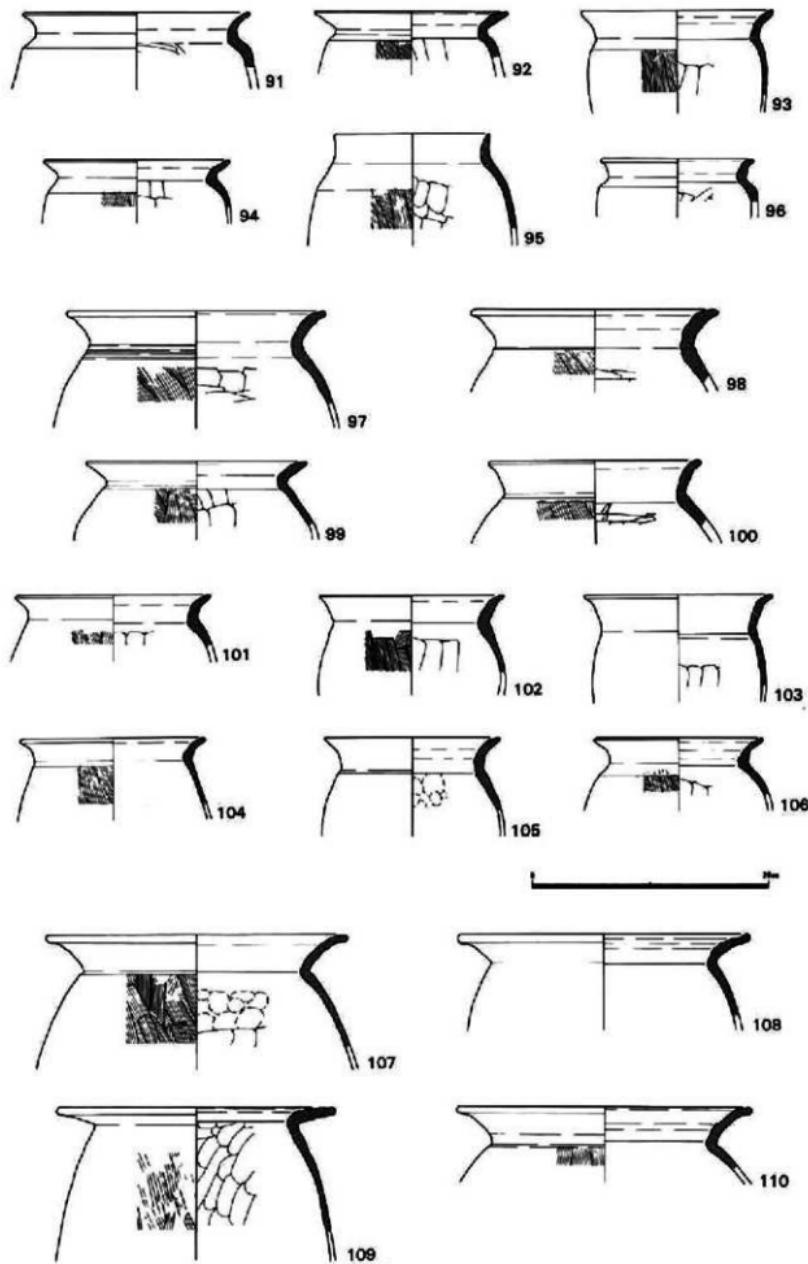
土器器 2

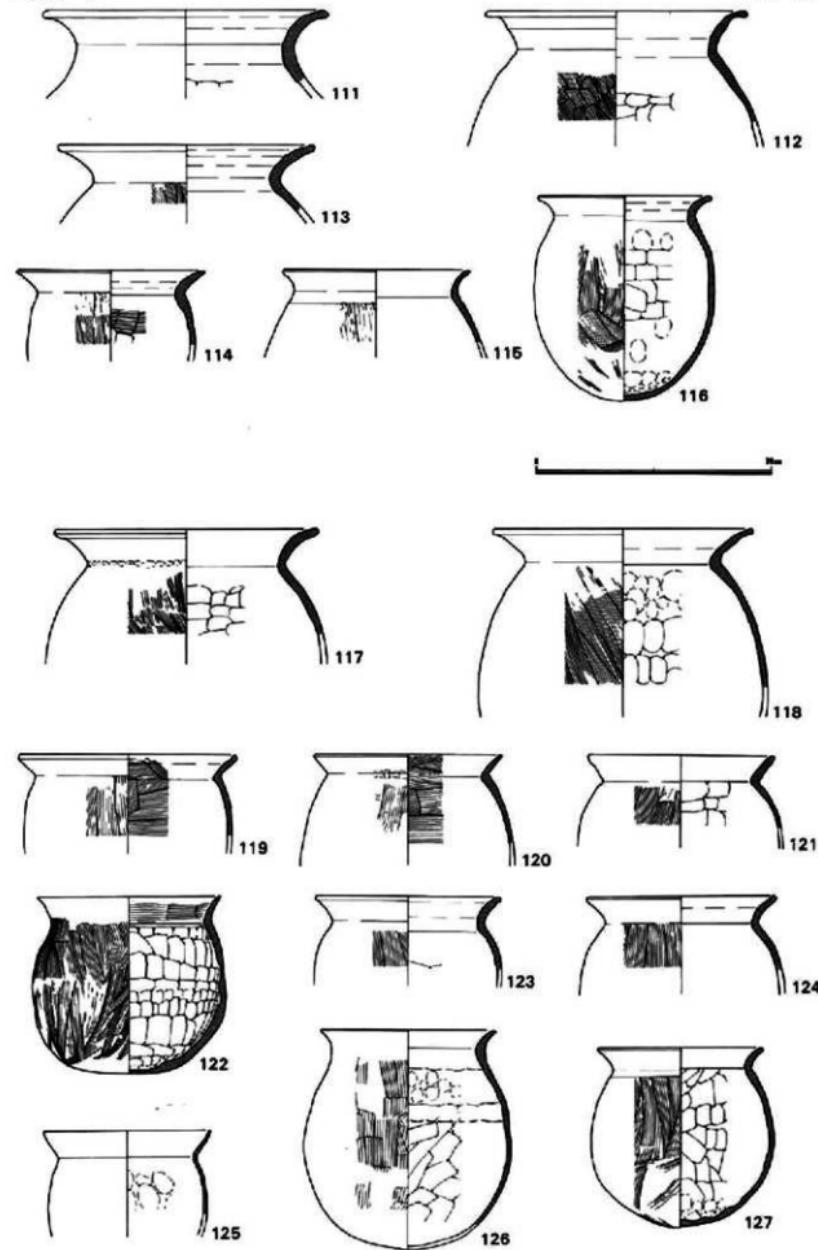


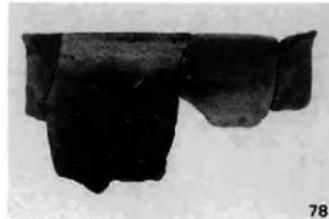
— 2 —







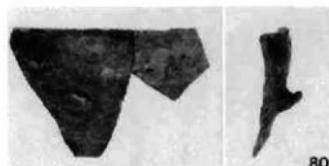




78



85



80



89



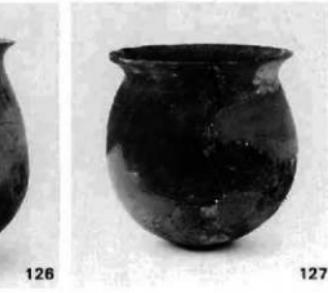
109



116



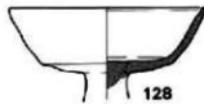
122



126

127

土師器 6



128



129



130



131



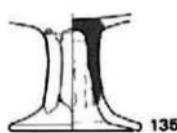
132



133



134



135



136

[Scale bar]



137



138



139

[Scale bar]



128



129



130



131



132



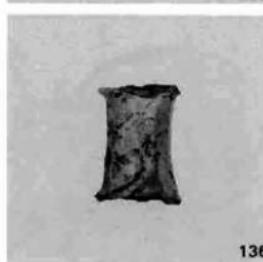
133



134



135



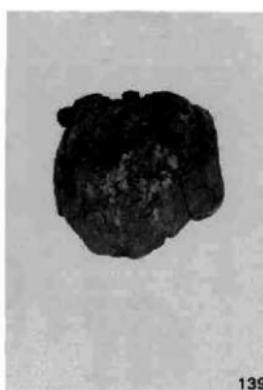
136



137

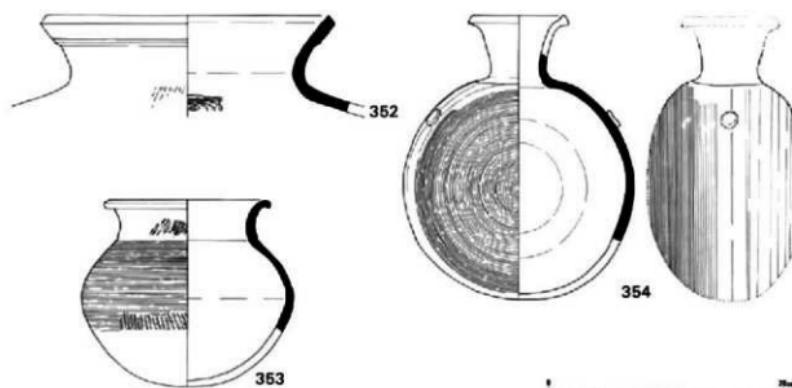
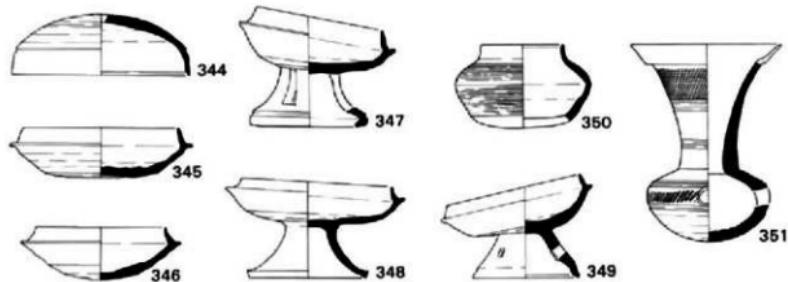
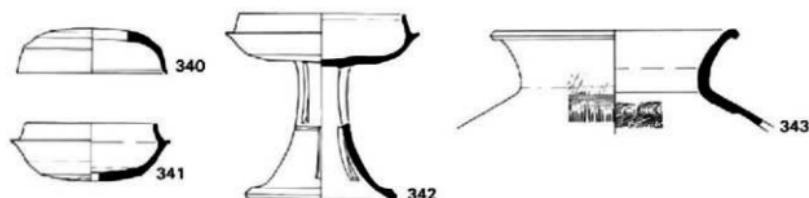


138



139

SD4・5 出土土器、溝内出土古墳時代土器



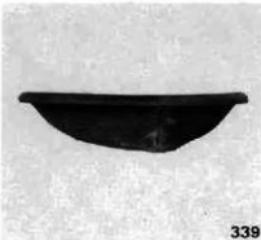
1 cm scale bar



333



337



339



340



342



343



344



349



347



345



348



351

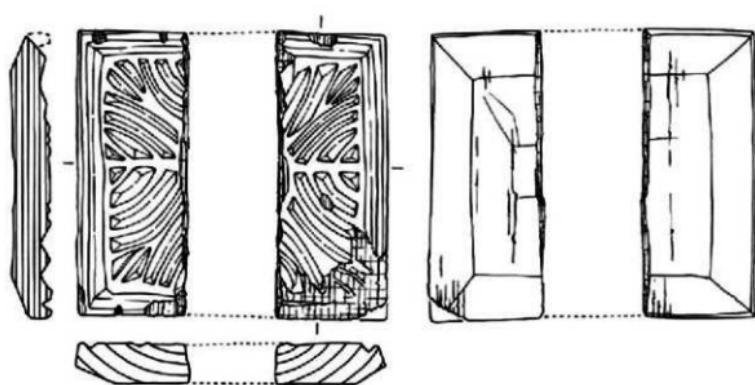
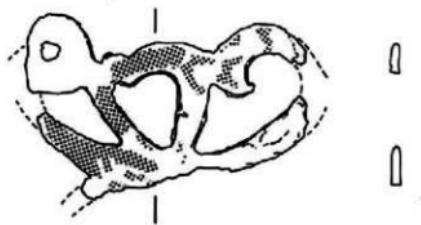


346



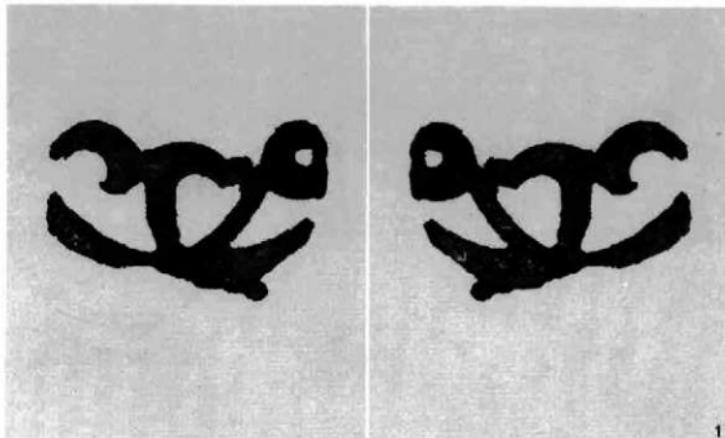
352

飾金具状金属器・飾板状木器

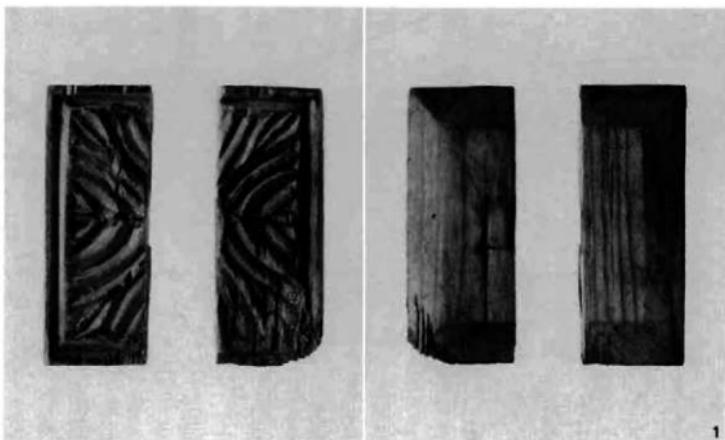


施金具状金属器・施板状木器

图版 46

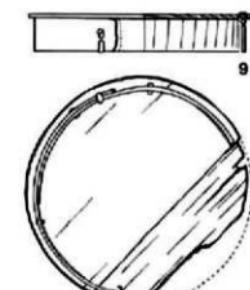
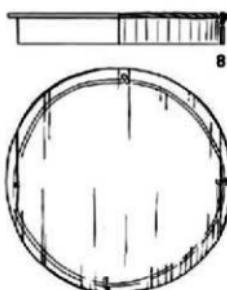
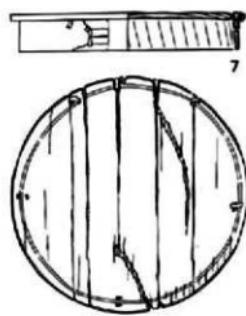
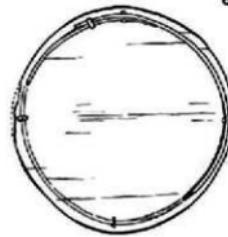
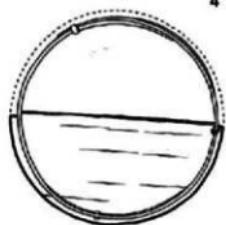
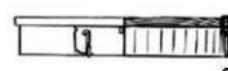
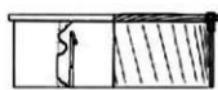
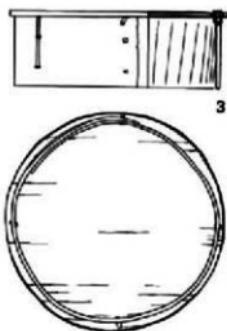
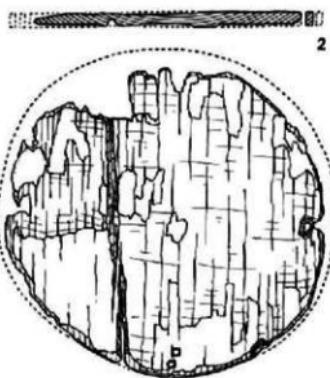


1

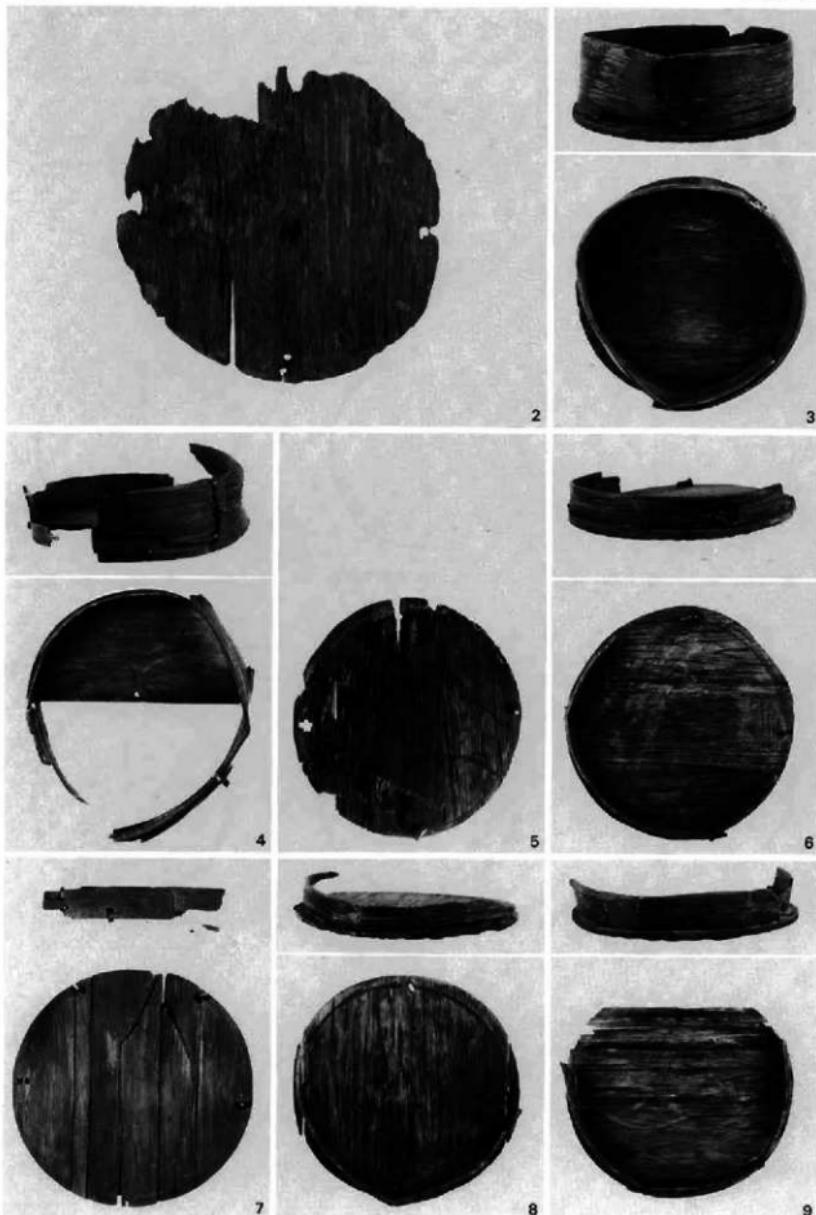


1

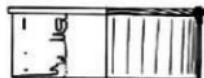
木器 1



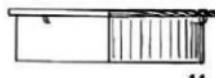
— cm —



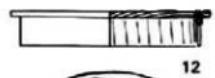
木器 2



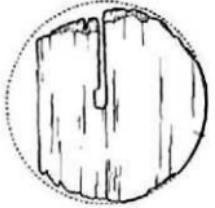
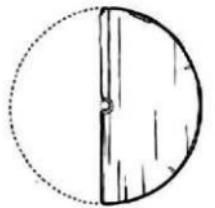
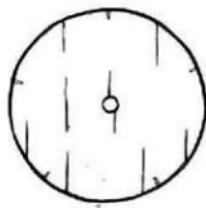
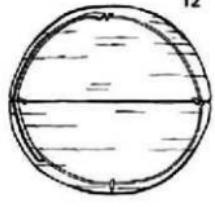
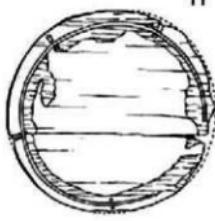
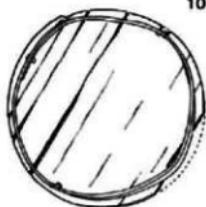
10



11



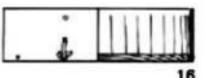
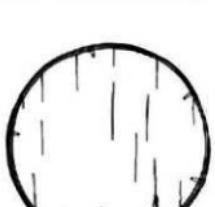
12



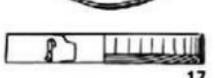
13

14

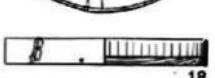
15



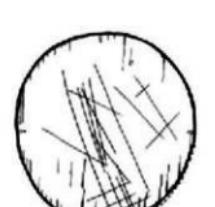
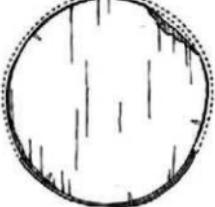
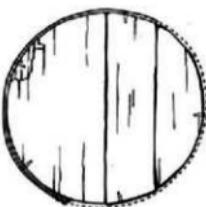
16



17



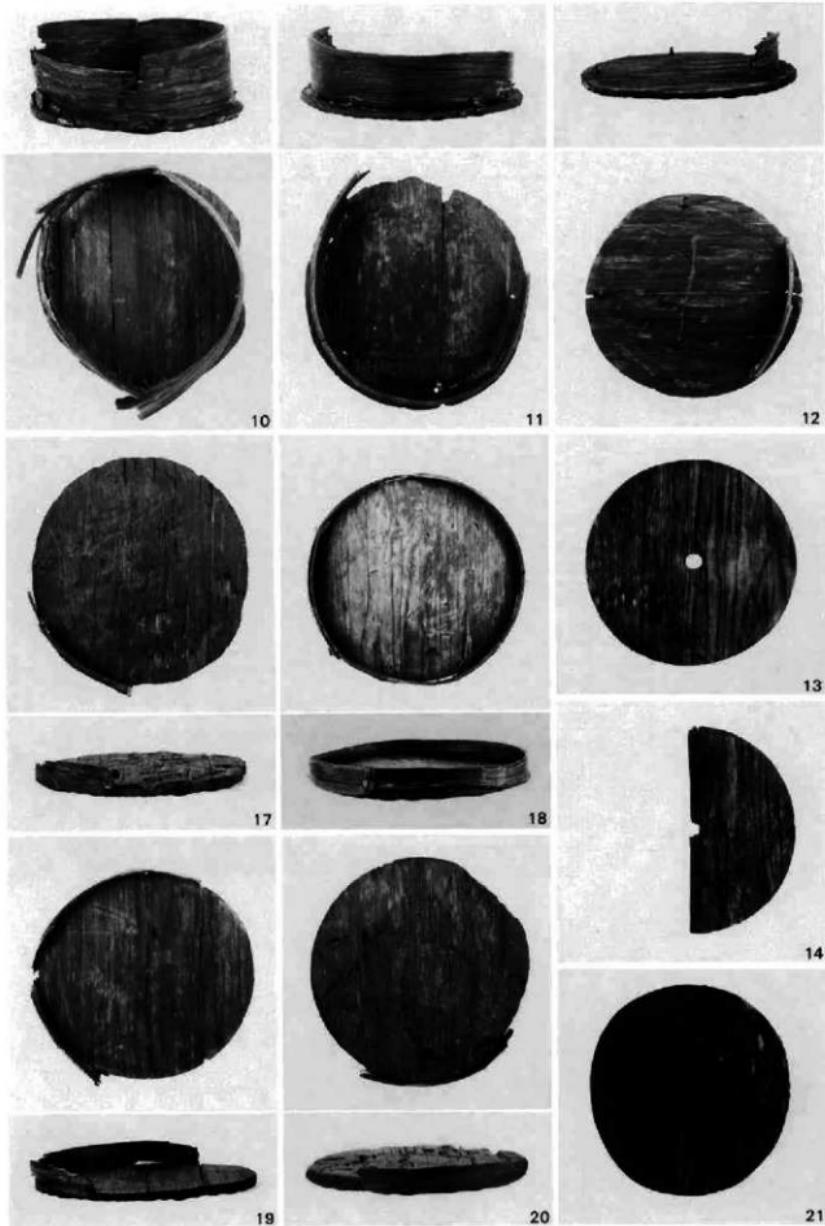
18

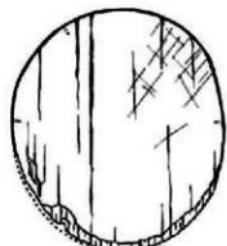


19

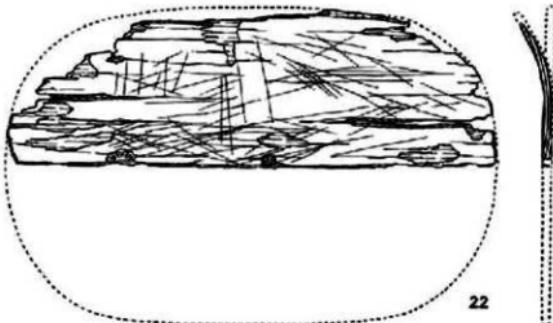
20

21

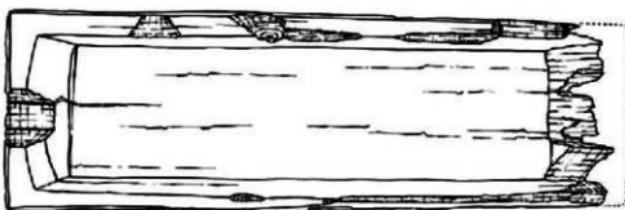




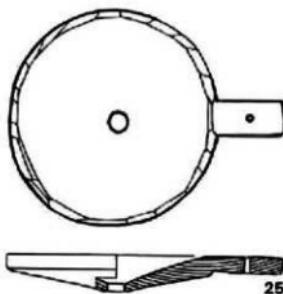
23



22



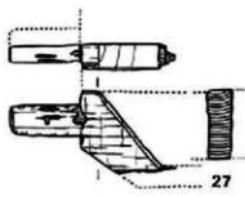
24



25



26

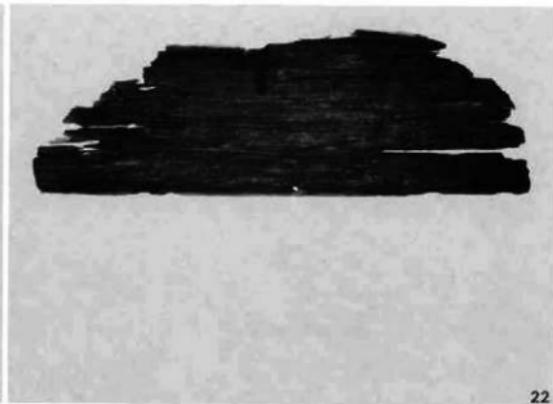


27

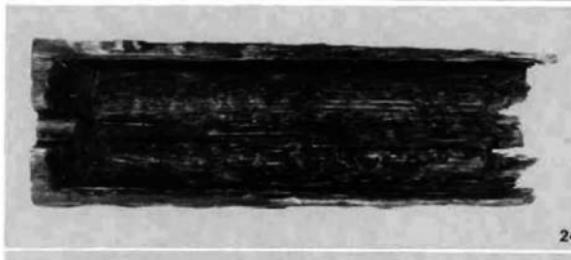
1 cm



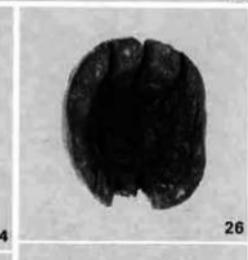
23



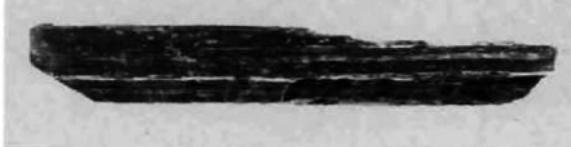
22



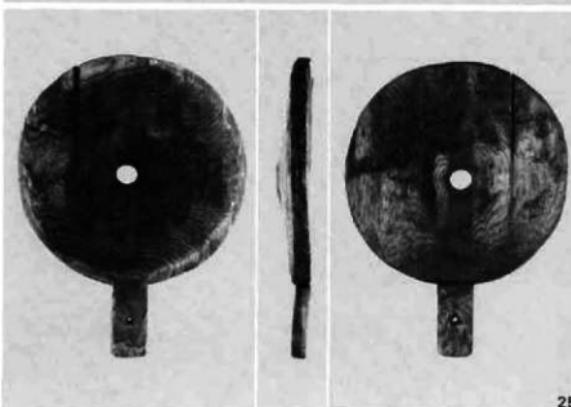
24



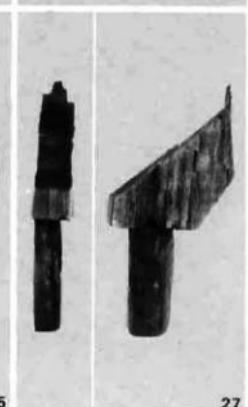
26



27

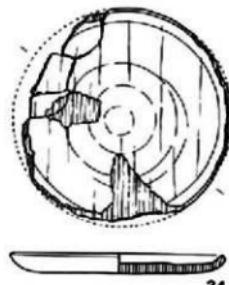
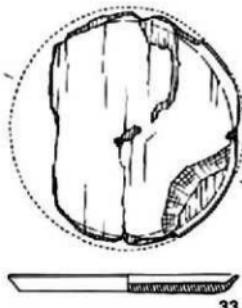
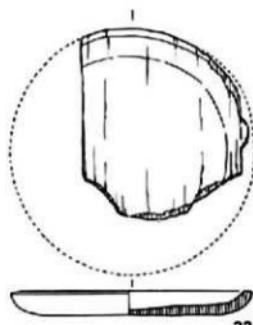
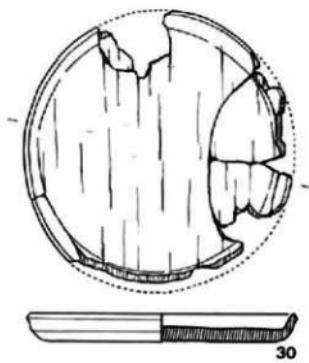
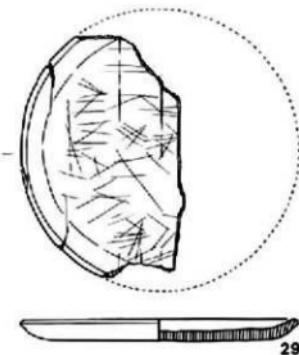
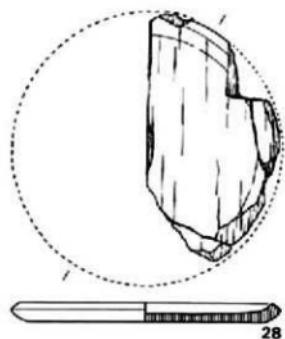


25



27

木器 4



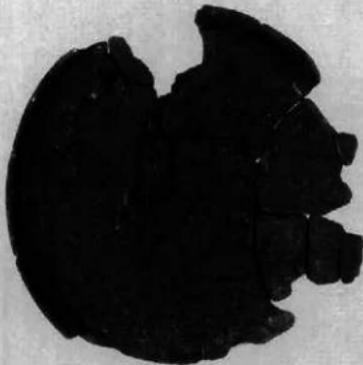
—



28



29



30



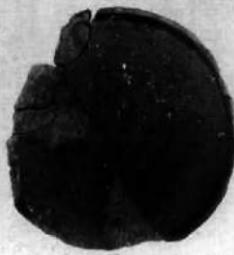
31



32

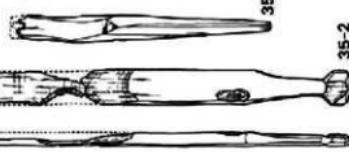
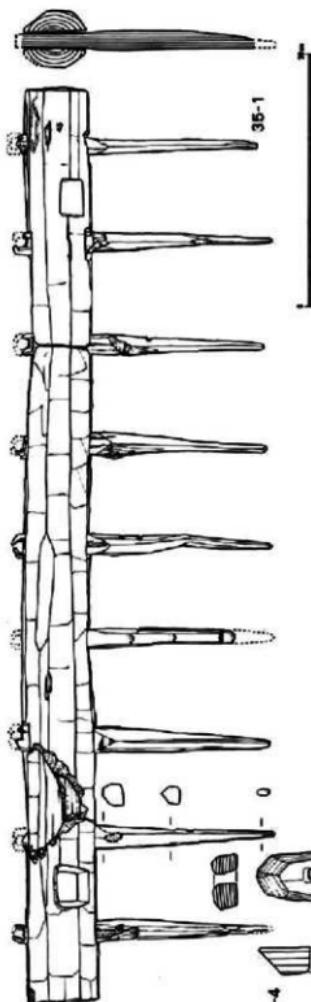


33

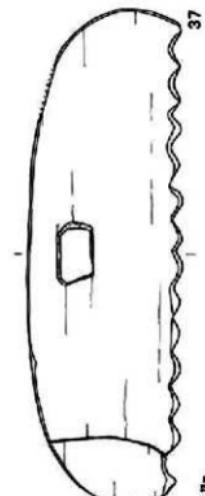


34

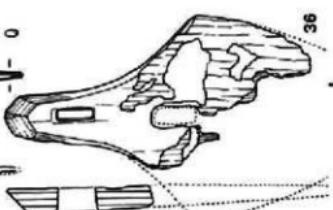
木器 5



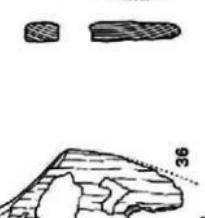
35-4



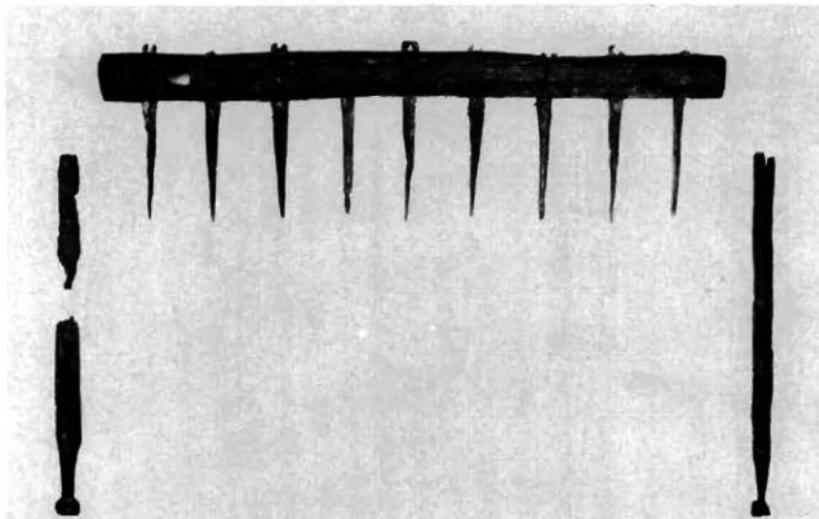
36



36



37



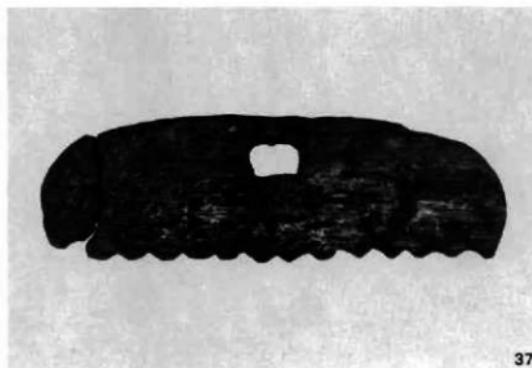
35



35



36



37

木器 6

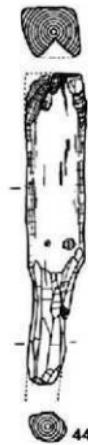


40

41

42

38



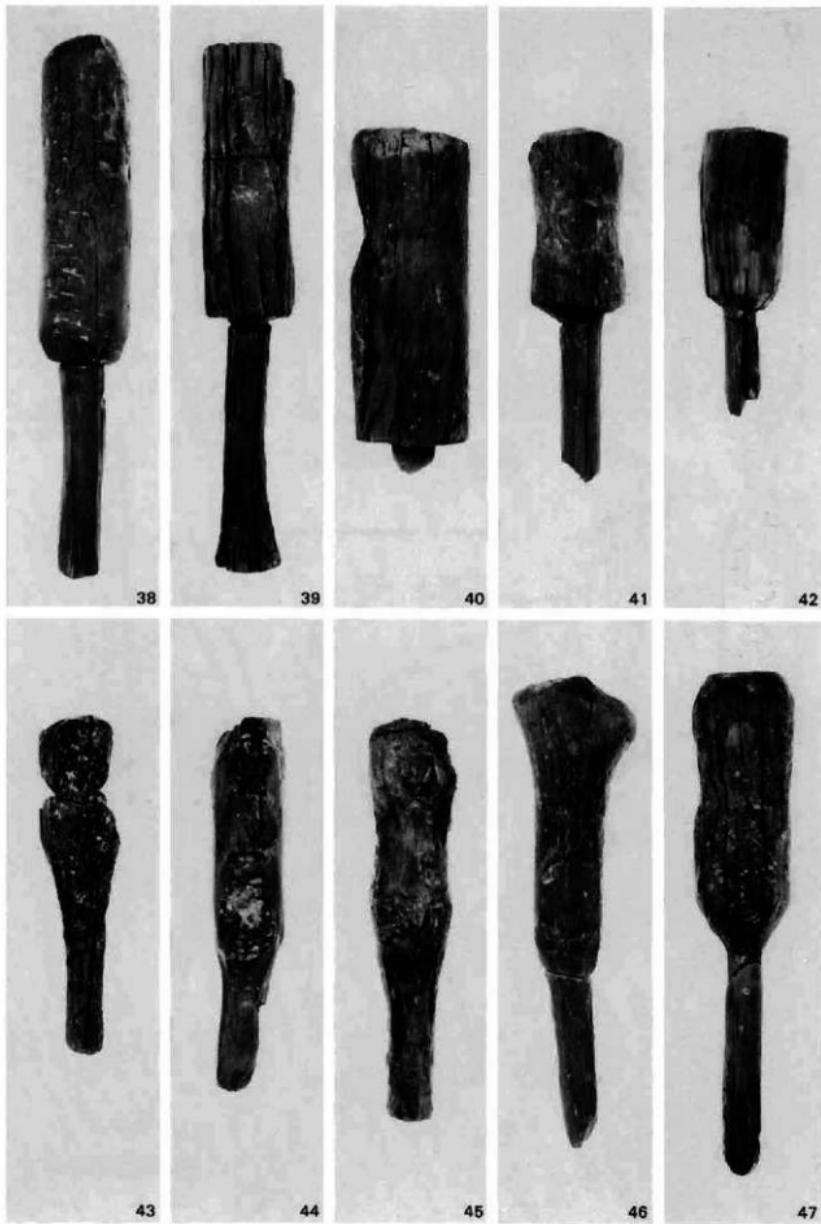
43

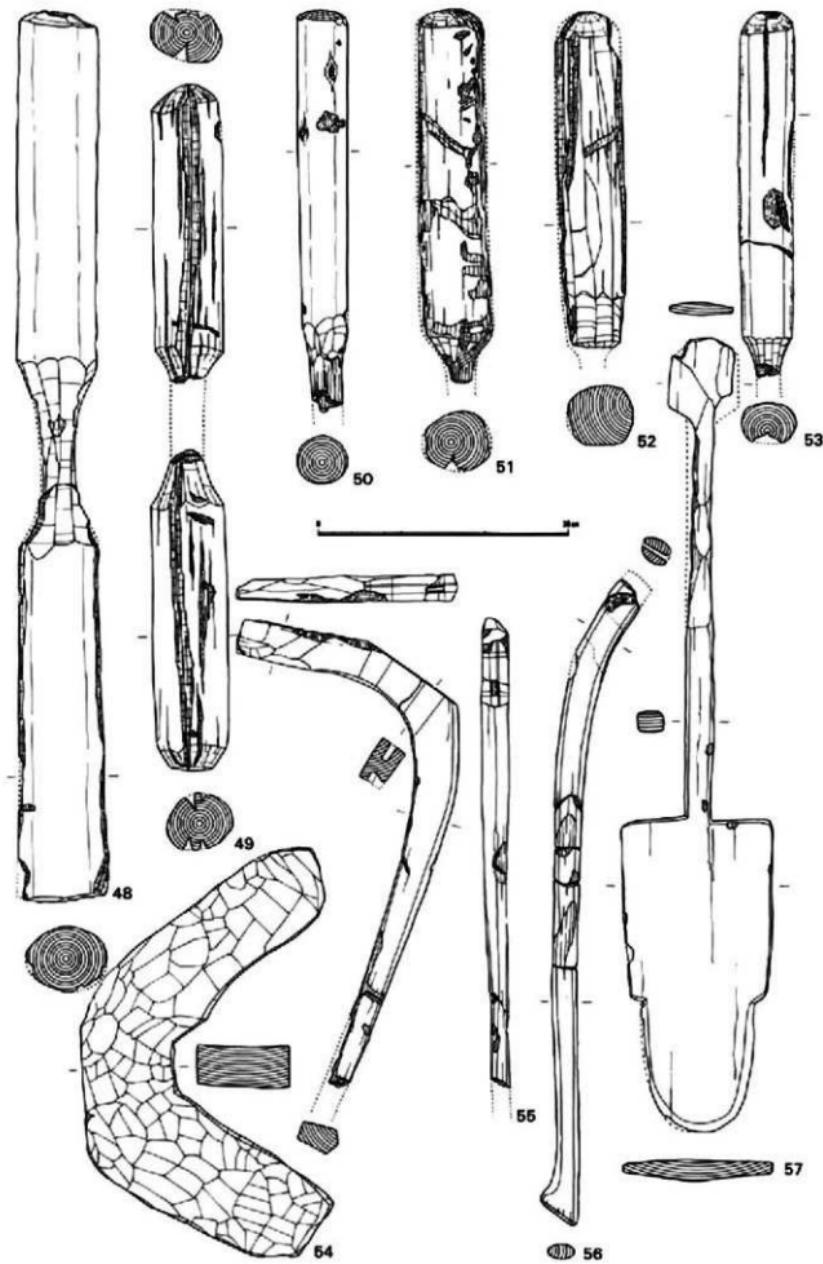
44

45

46

47







48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



木器 I



58



59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



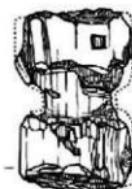
69



70



71



72

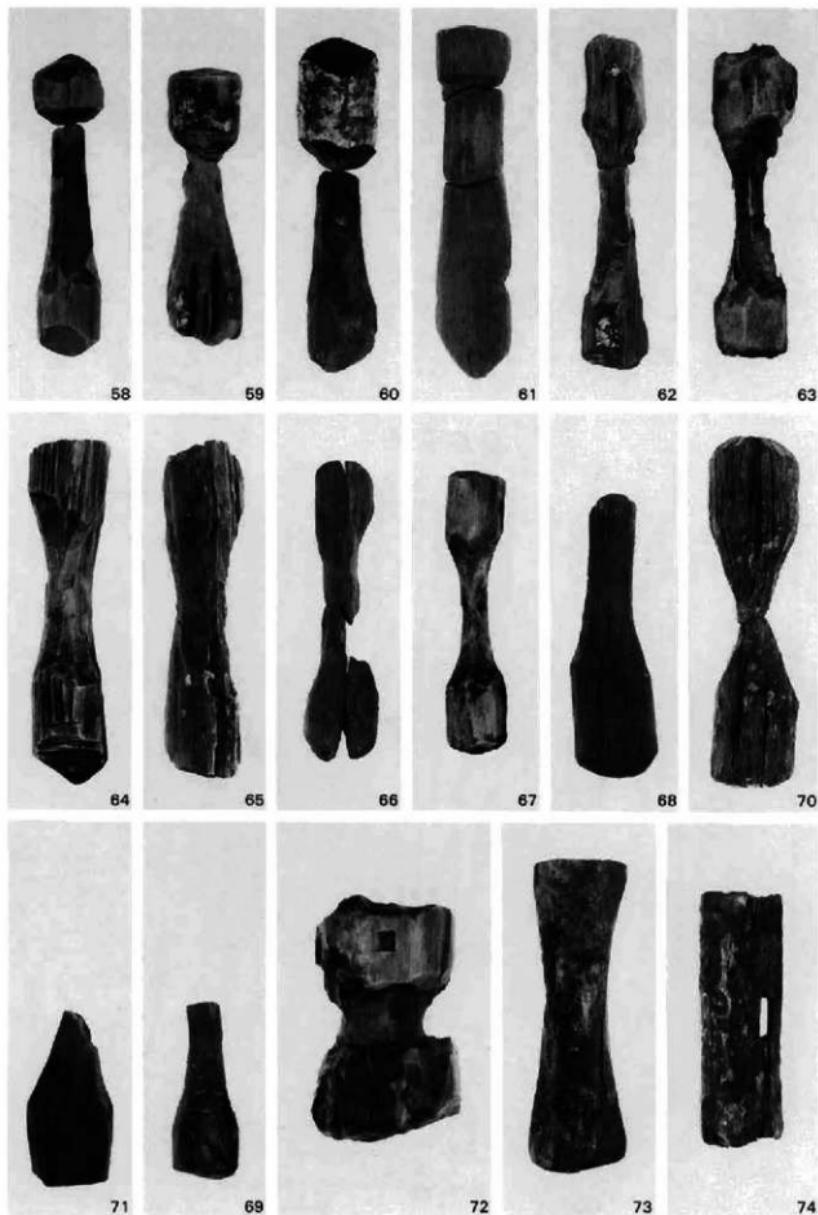


73

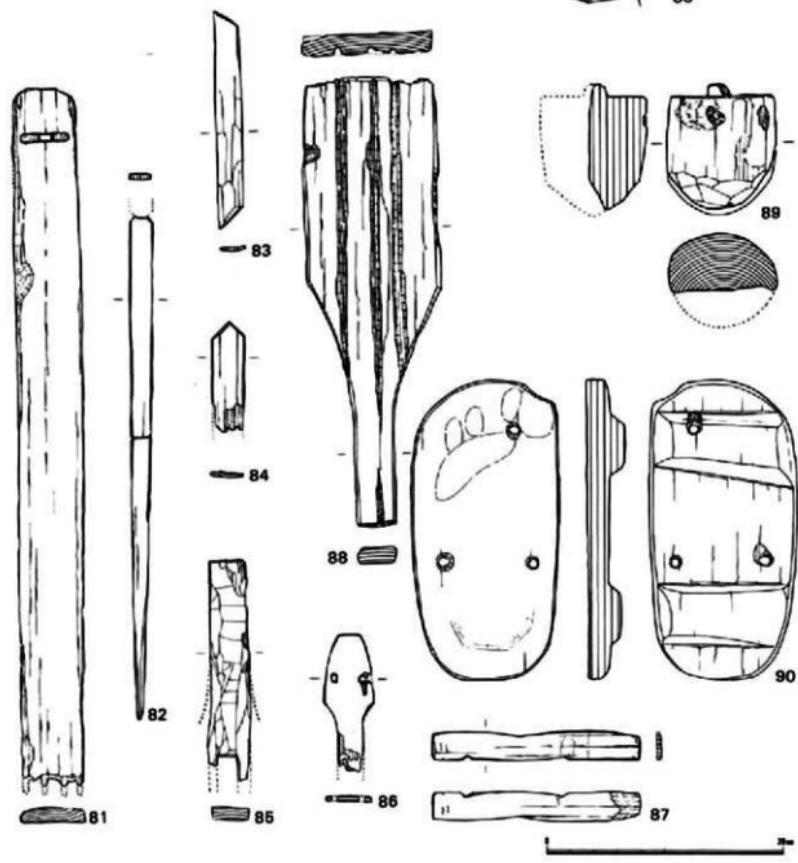
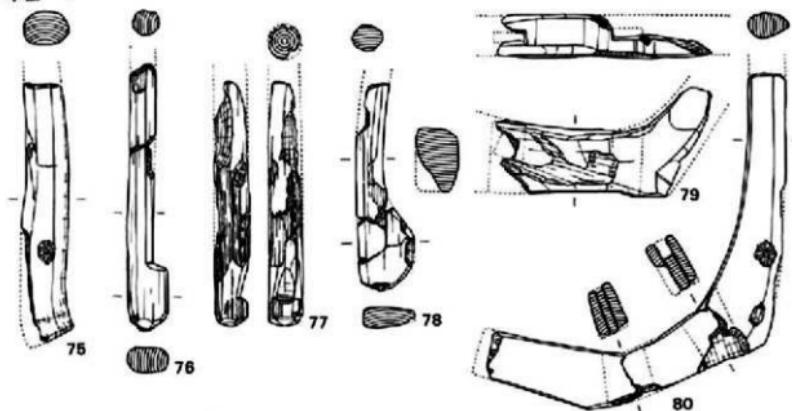


74

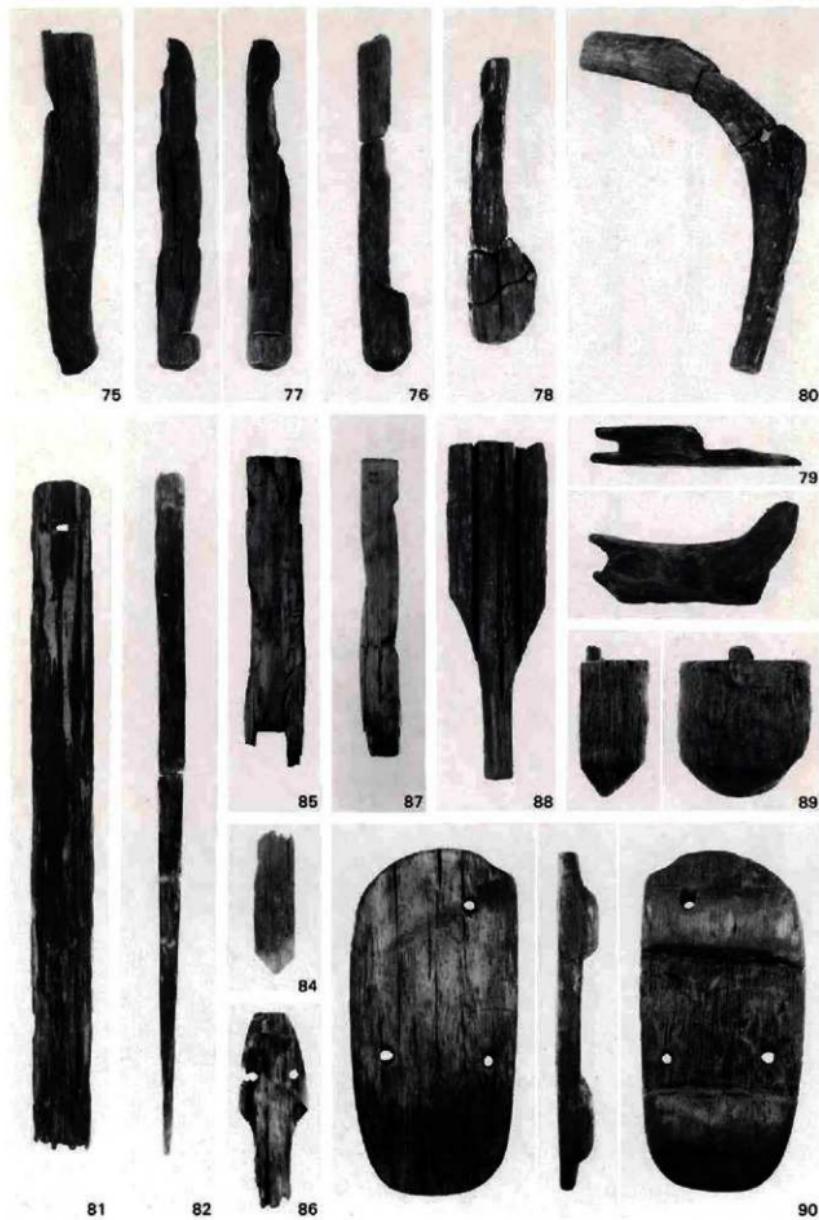
1 cm scale bar

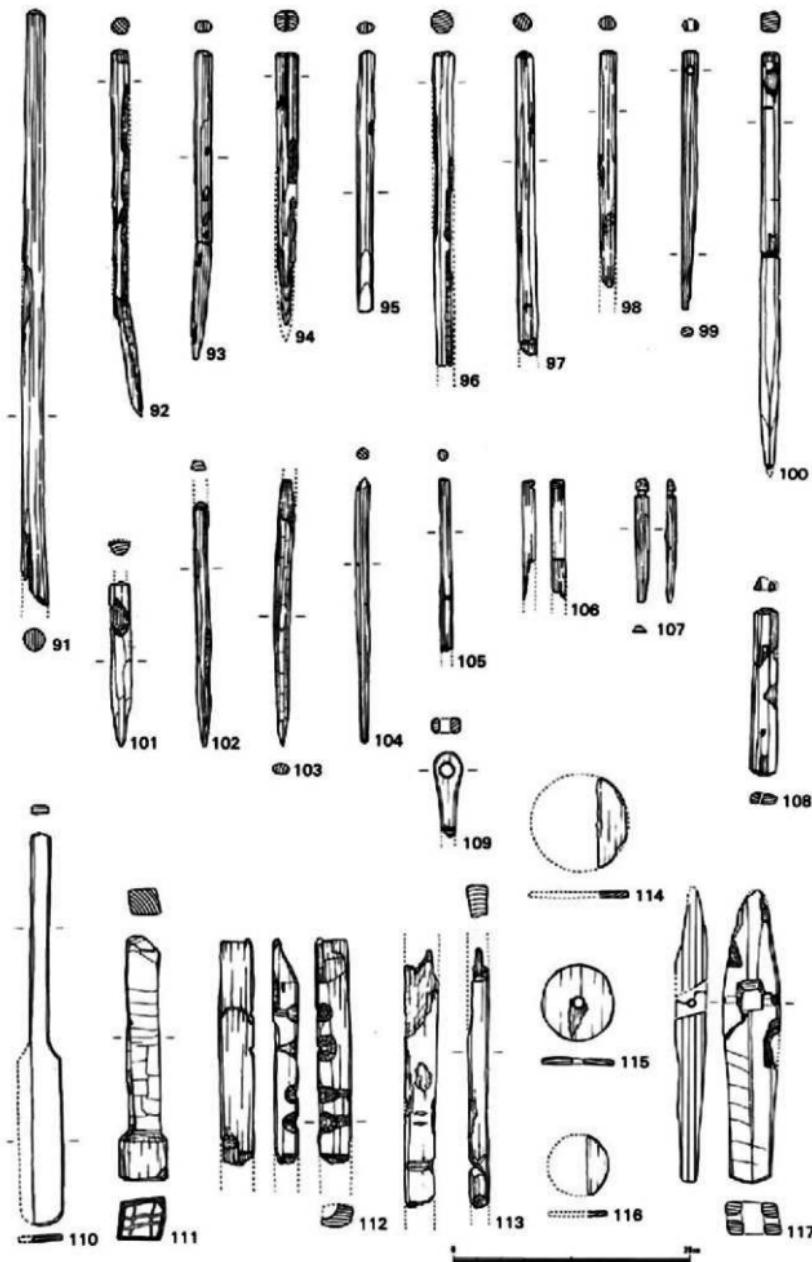


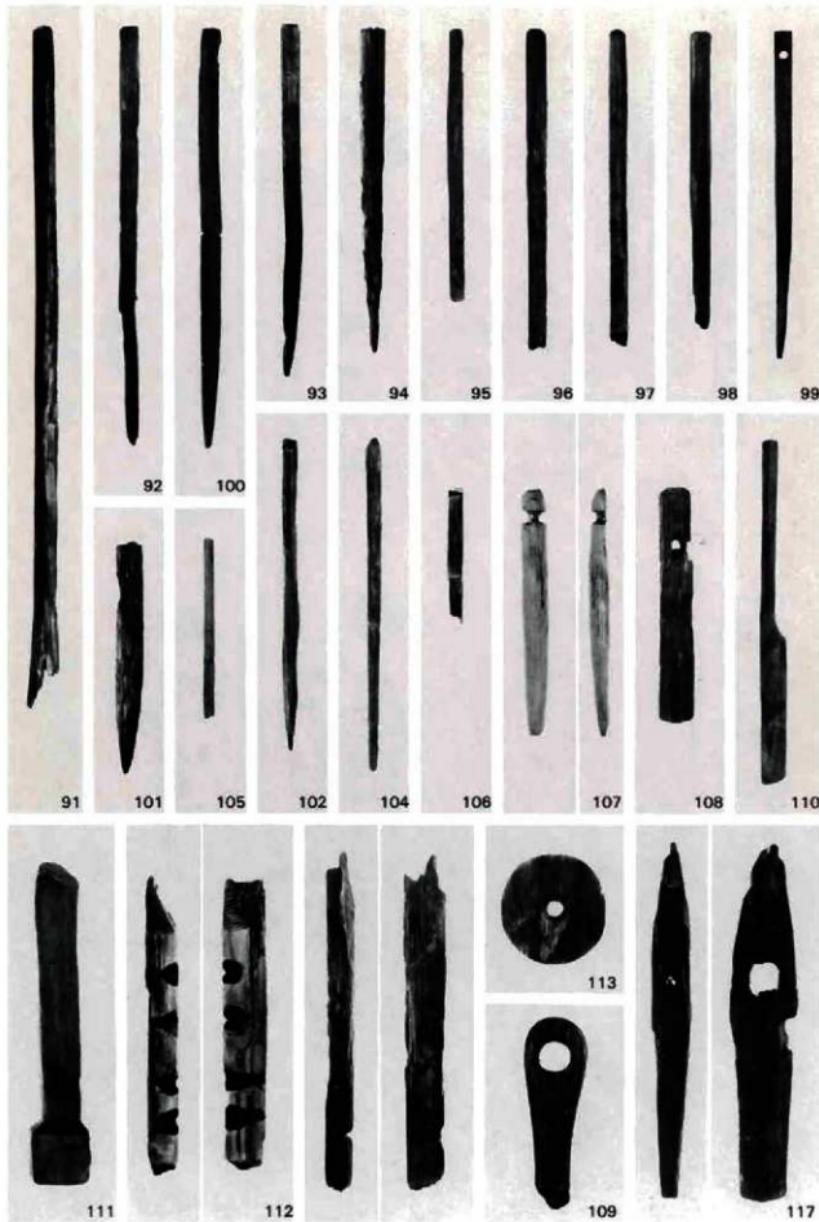
木器 8



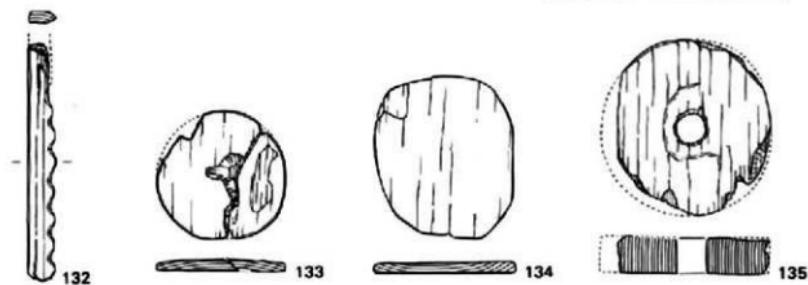
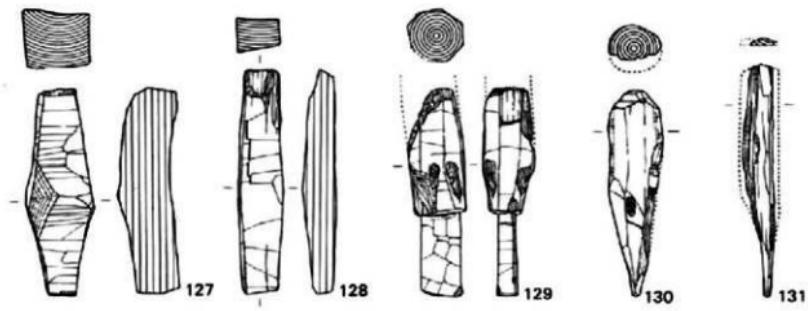
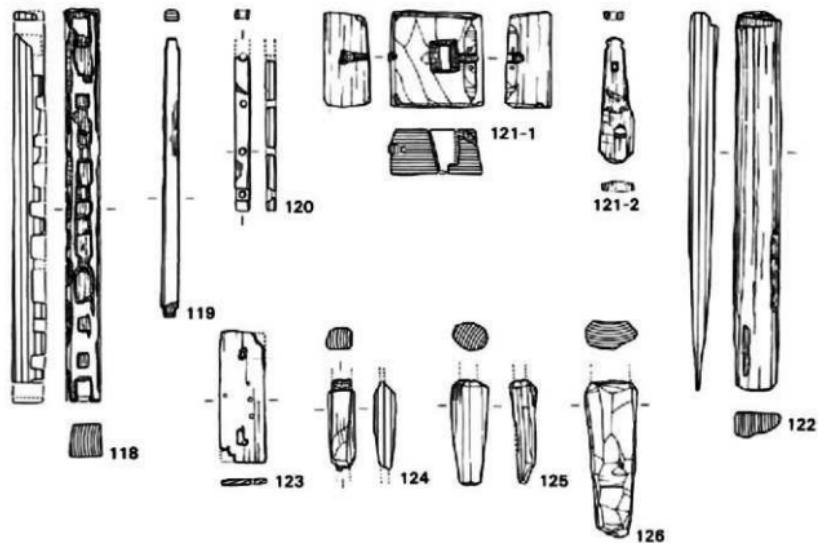
1 cm

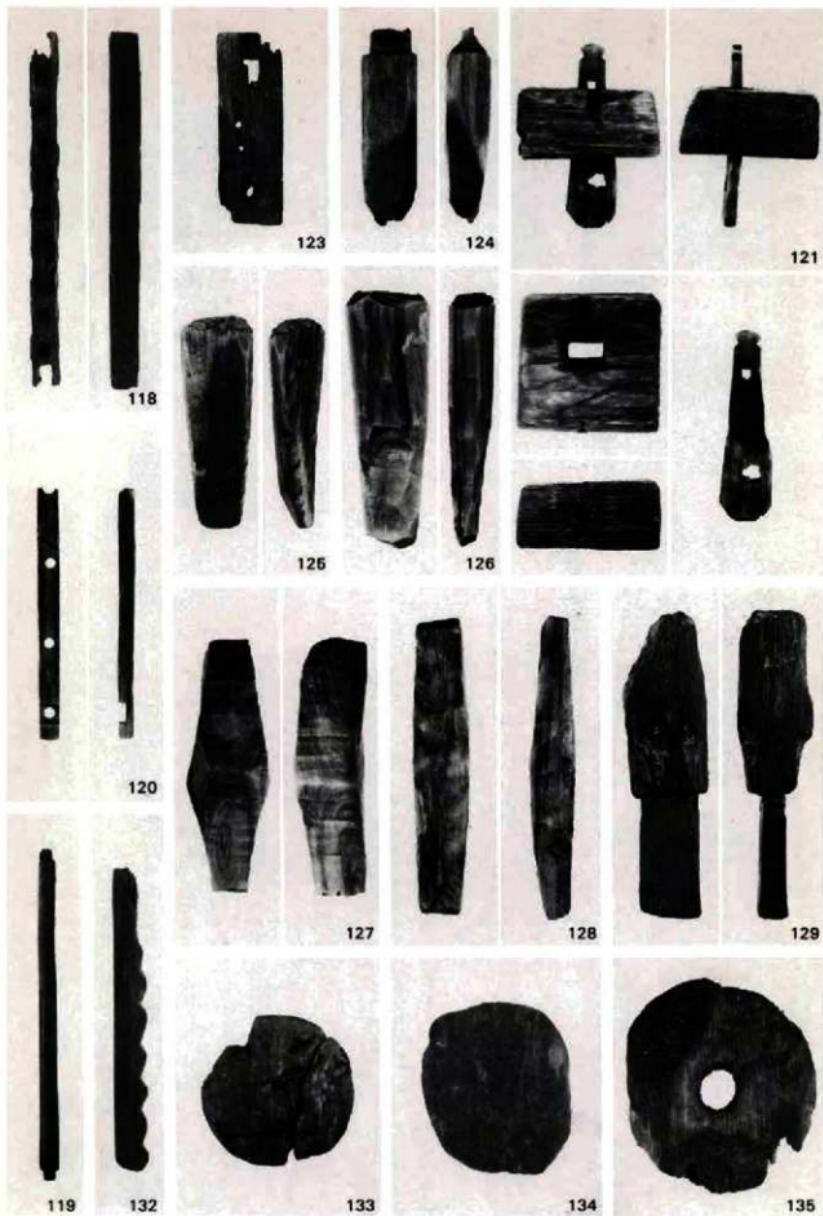




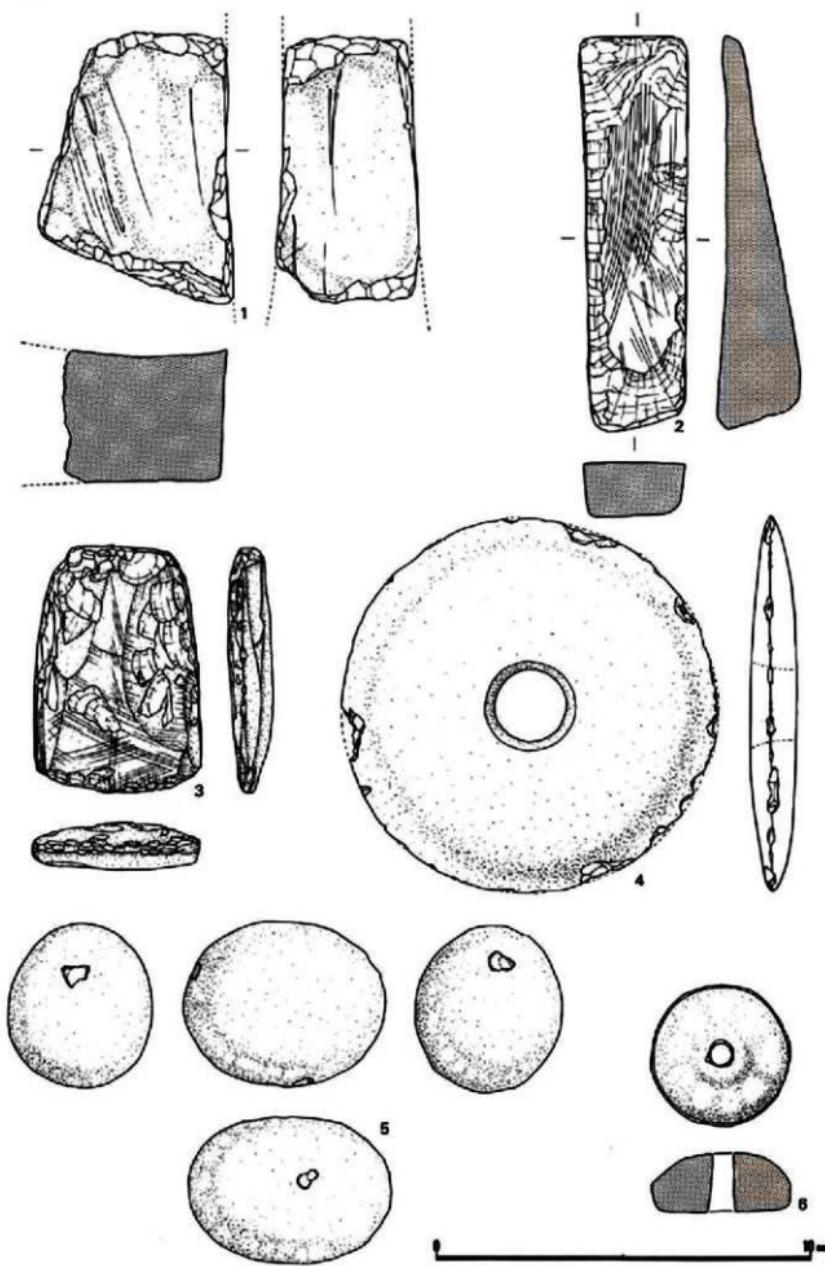


木器 11





石器





1

2



4

3

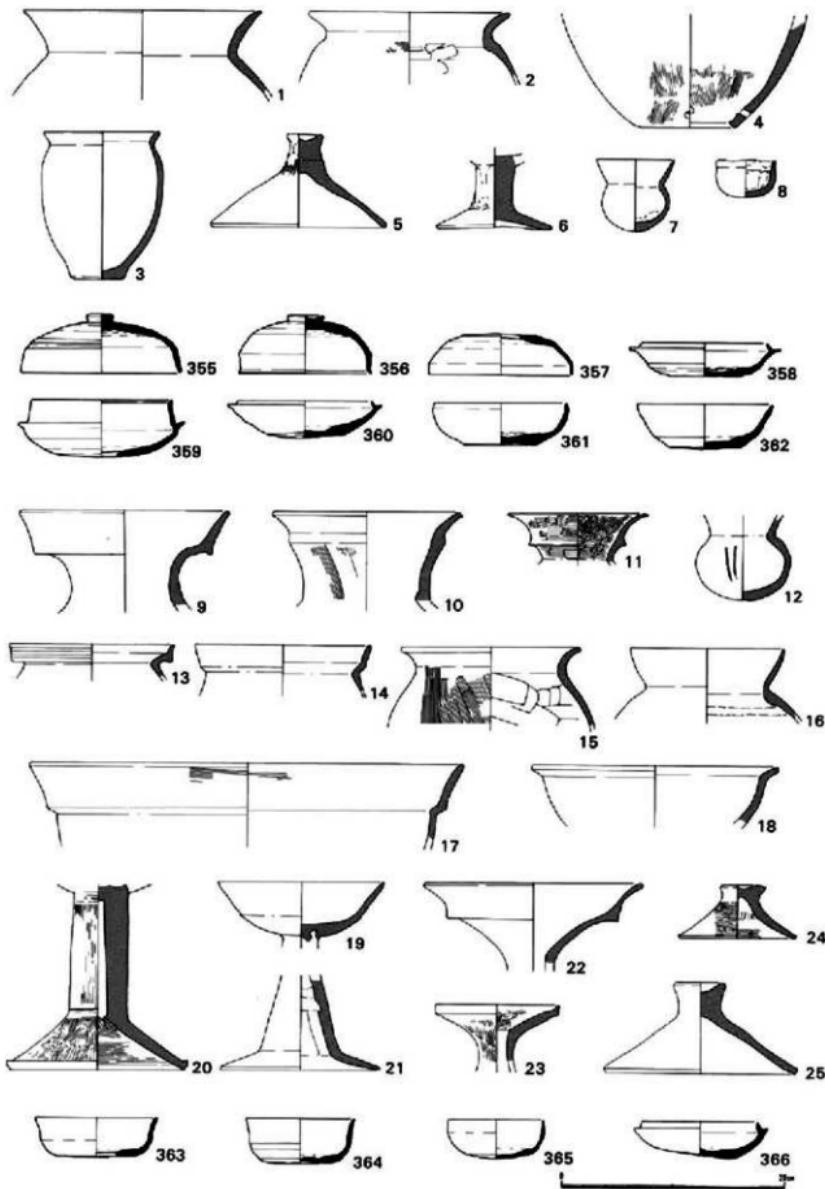


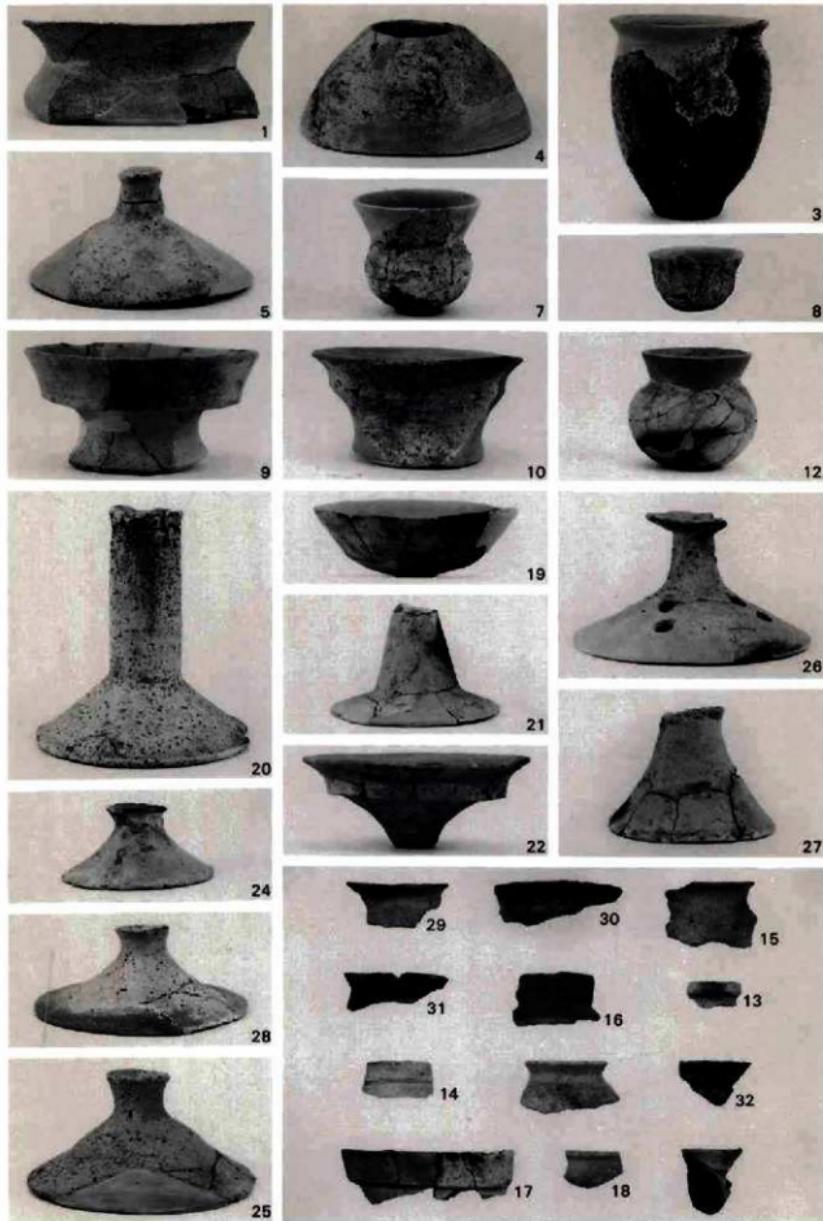
5

6



野村B・C地点出土土器





兵庫県文化財調査報告書 第75号

山 壇 遺 跡

平成2年3月31日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 丸山印刷株式会社
〒676 高砂市米田町神爪57-1